女鑑

第拾參年第拾五號
明治三十六年八月一日發行

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

毎月二回　一日 十五日發兌

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候
尚ほ御注文案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覽被下候樣奉希上候

東京[illegible]駿河町

三井呉服店

大阪[illegible]

女鑑 第拾參年 第拾五號 目次

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無遞送料

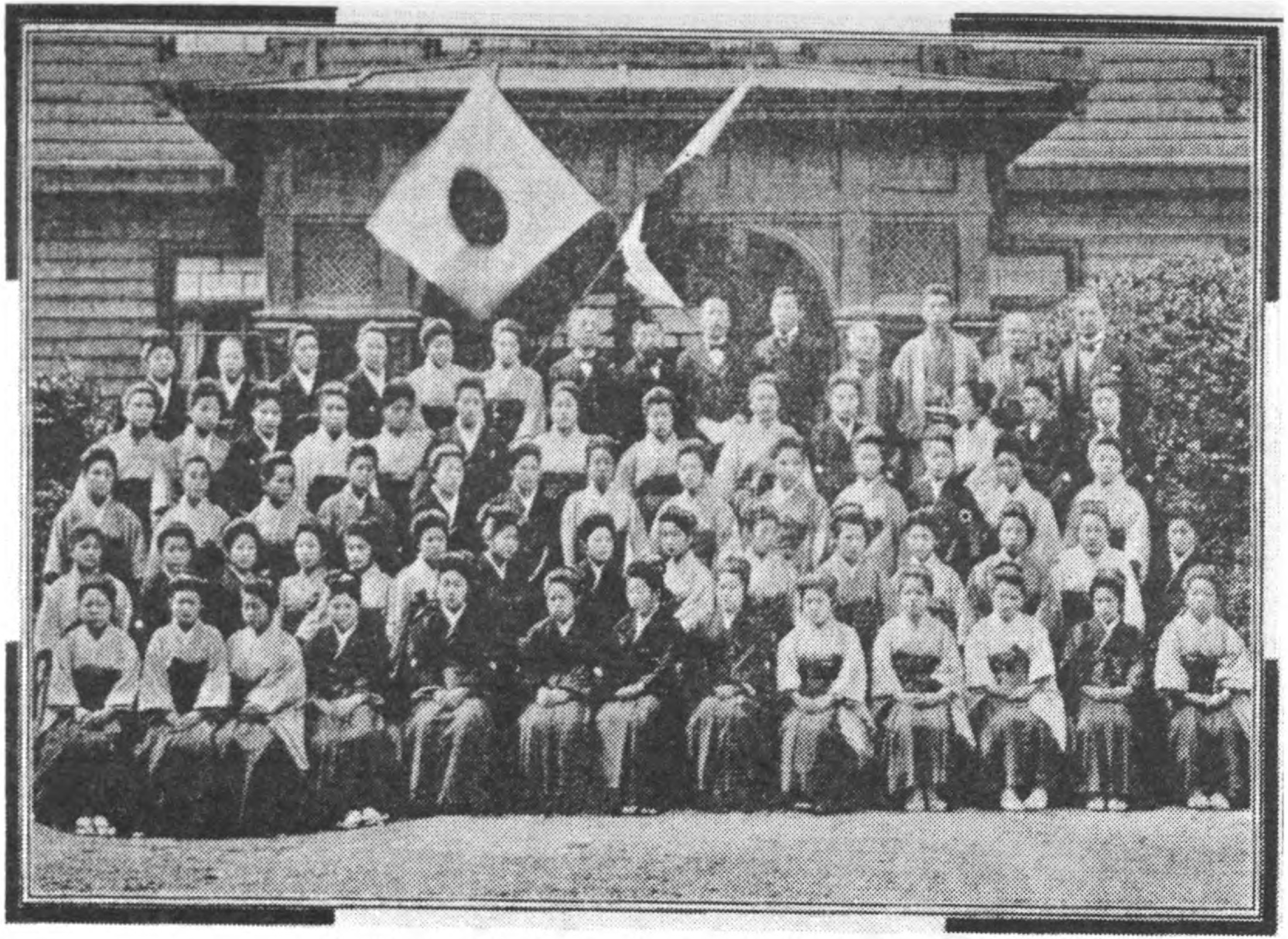
廣告料
五號活字廿三字詰行一行　金三拾錢
半頁　金八圓
一頁　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十六年七月卅一日印刷
明治三十六年八月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊棠一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社　國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候





柳河高等女學校職員及卒業生



淑德女學校報校會



定價一本
五拾錢

ふき出し香水

佛國ロード會社製品

百合花、白薔薇、菫ヘリオトロピンジョッキクラブ、オイレット、オイデ、コロン外種々　定價一本金五十錢

此の香水は硝子管の上端を折れば自然に吹き出し捻じ蓋にて止める新輸入品なり優美高尚なる放香馥郁貴婦人紳士夏期の御携帯に宜しく御進物用等には最も良好なり

輸入元　東京日本橋區本町四丁目　**田邊元三郎**

特約店　東京日本橋區室町三丁目　島田武兵衛

各女學校御用靴製造



守田商店

東京市神田區裏神保町壹番地

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

○前警察醫長山根正次先生無害證明



○前警視廳技師古田宗二郎先生發明

名譽白粉

煉製

特別煉製桃色粉製等色々

○鉛毒を恐るゝ方は名譽白粉をお使なさい

○名譽白粉はのりよくのびよく皮膚を細かに光澤を増し何れの點に於ても在來の品に立優りて居ります

○名譽白粉の粉製は薄化粧の高尚なるを好まるゝ貴婦人間に流行ます

發賣元 東京芝區南佐久間町一丁目 電話新三千〇三十八番 藤村錦水堂

女鑑彙題投稿優等者

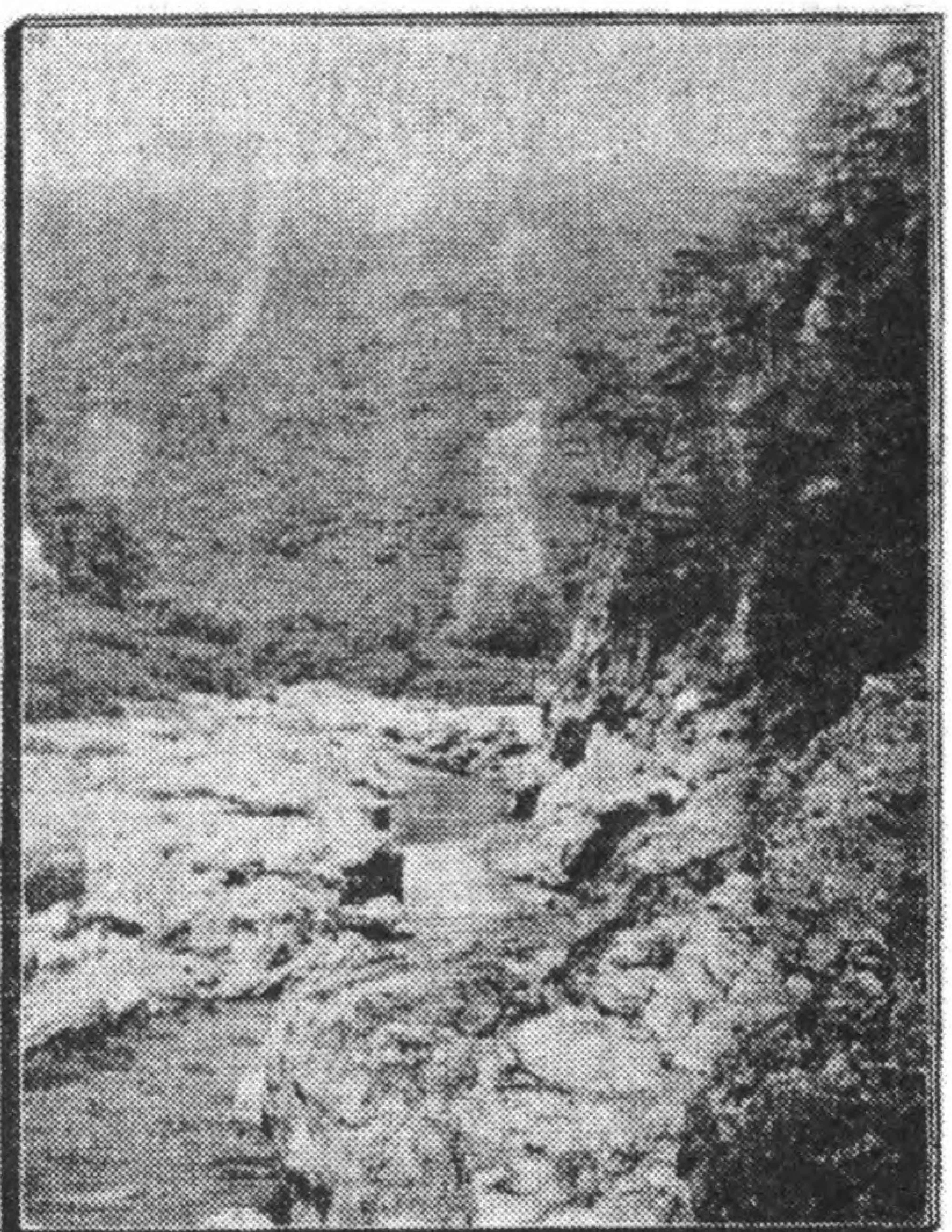


瀬木せき子孃

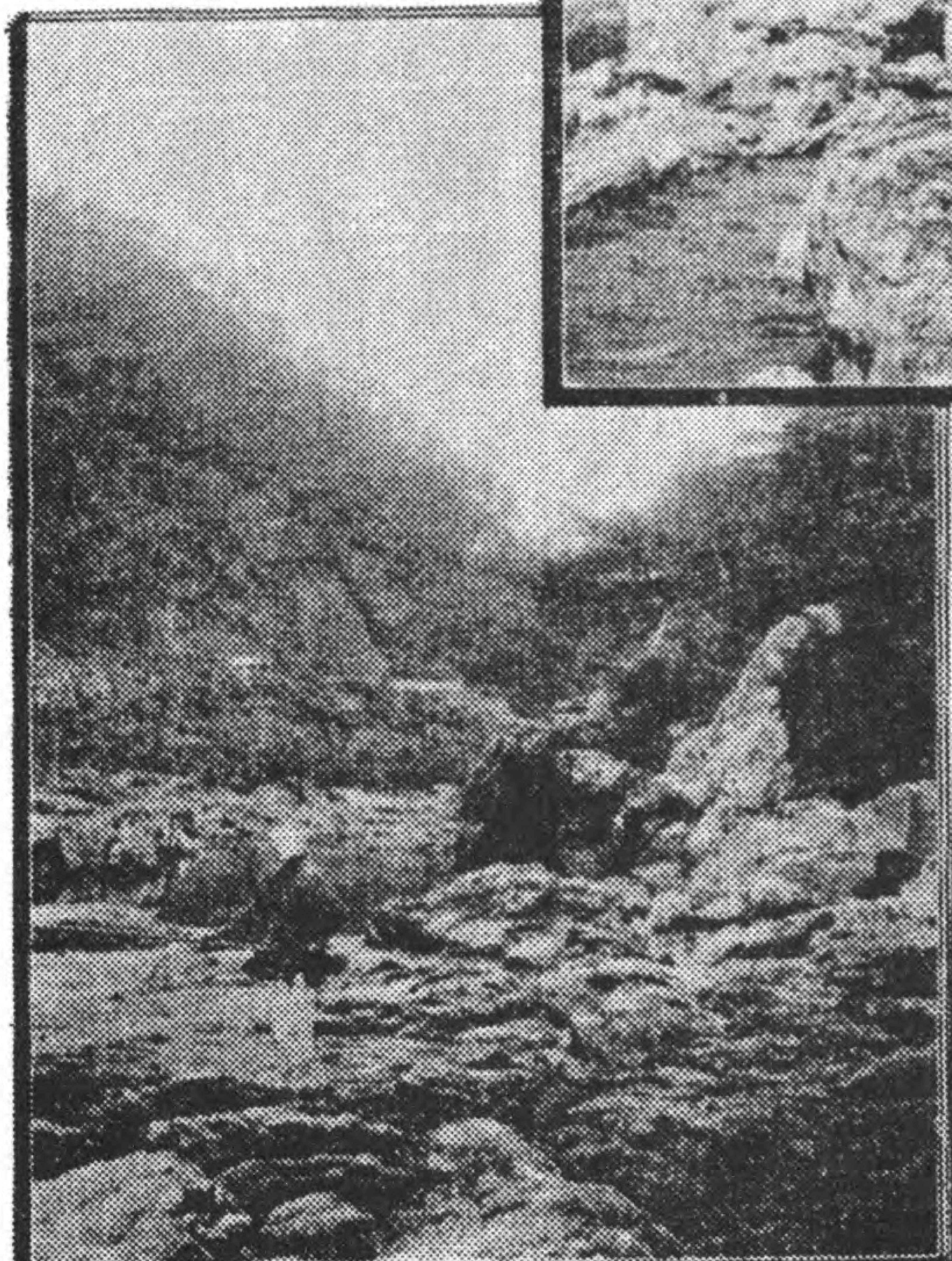


京都文中女學校職員並卒業生

夏の嵐山



保津川



同下流

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

西洋婦人小間物類一式

夏物澤山

貴婦人用夏帽子並ニ子供帽子各種○リボン數百種○西洋造花○西洋傘○レース○西洋人形○ベール○手袋○シヤツ○ハンカチーフ○香水○石鹸○ヘーヤピン○サナダゴム○靴下○膝掛○ヘーヤブロッチ○サイトコーム○其他西洋雜貨一切

●電話にて御注文被下候はゞ直に持參可仕候

東京新橋南金六町

關口商店

電話新橋二一九〇二番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

○寶丹は軍陣練兵。旅行。遠出または船乗等のせつは勿論あるひは遊宴の席に到るにも必ず懷中に備へて大に自他の貴重を得べし眞にこれ濟生至寶の良劑なり



●寶丹効能

○吐瀉症○霍亂○泄瀉
○氣附○疝痢○痢疾○
中暑○感冒○癪聚○頭
痛○食傷○停飲○氣鬱
○眩暈○感染病○虫齒
○心腹痛○噯氣

寶丹本舗

東京市下谷區池之端仲町二十七番地

十世 守田治兵衛

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

第二回内國勸業博覽會褒狀寫

冷礦泉　富山縣　扇浦正二一
八代湧出

褒狀

多量ノ鐵分ヲ含有シ泉質良好ナリ頗ル嘉ス可シ

審査官　清水鐵吉㊞
正七位　巨知部忠承㊞
審査部長　中濱東一郎㊞
正六位　和田維四郎㊞
審査官長従三位勳二等　九鬼隆一㊞

前記の薦告ヲ領シ玆ニ之ヲ授與ス

明治廿三年七月十一日

總裁大勳位　貞愛親王㊞

褒賞贈與之證

東京市日本橋區蠣売町貳丁目
富山靈鑛泉販賣業宮本龍眼堂
監理者　小林遜

名譽賞金牌

天然ノ靈効補血滋養ニ富ミ内外ノ有功最モ著ク販路多シ國益上斯業奬勵模範トナルヘキ其偉功ニ據リ前記褒賞ヲ贈與ス

明三十六年五月十一日

香川縣第拾回内國々益品博覽會㊞

病者安心

官山藥山　富山靈鑛泉

◎政府免稅醫藥之大王◎

効能は無量廣大病として一々全治せざる事無し是以て他藥の如く効能を掲載せず

ば誓つて全治す試みに五瓶服用せよ長年難儀する病人是迄醫師に懸つて効無ち平癒す故に輕症は勿論諸病一度之に觸るゝ時は忽合せられし神聖の天劑なればにして有らゆる藥の原素を調此靈泉は平凡の藥と異なり天然

●内外應用

三日分金十五錢
七日分金卅五錢

◎効驗不思議難病即治◎

見本入用は金一圓送れ二週分發送
照會郵劵封入
全國各地特約店有尚廣く募集す

總本舖　東京日本橋區蠣殼町二の三　宮本龍眼堂
代理店　同　日本橋區上槇町三番地　安川晃榮堂
同　深川區佐賀町二の十一　福田彦兵衛

（取次）東京下谷池の端 [illegible]・東京日本橋大傳馬町 [illegible]・同本郷湯島 [illegible]・同京橋區松屋町一 中山濟生堂・同京橋銀座一 佐々木左兵衛・同淺草北東町 遠山源左衛門・横濱伊勢崎町 安川支店・長崎縣平戸 卜部舒夫・常陸石岡町 塚本虎之助・[illegible]・長崎市西濱町 今富衛生館・同京橋銀座三 松澤八右衛門・同神田鍛冶町 大木合名會社・同日本橋小網町 安川支店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

WASHER 登録商標 ワッセル

化粧下いらず



色を白くし
きめをこまかくする
高等はだあらひ粉
芳香ワッセル

●定價罎入五十錢三十錢十七錢六錢
袋入三錢の五種あり

英國製ワッセル日本一手販賣店
高等はだあらひ芳香ワッセル製造元

全國到處有名賣藥店小間物屋に販賣す

最新輸入

せんたく料の魁

英國製ワッセル

●油しみ油あか、うるし、ペンキ其他總ての汚染は何でも清潔にす
●染色を損せず皮膚を害せず品質をいためず有益の原料です
●臺所道具食器類の洗滌に用ゆれば清潔にして衛生上無害有益です
●化粧品及石鹸製造原料之最良品也
●硬水を軟水とし蒸氣罐の罐石を容易に除去す



●定價袋入二錢八錢十五錢の三種あり
工業用としては樽入あり

東京市京橋區三十間堀三丁目四番地河岸
三友商會
電話新橋千七百十二番

●費用と手數を省く衛生上無類の洗濯品

女鑑 第拾參年第拾五號

女子成功論（下）

希望は須らく大なるべし。大ならざれば乃ち小成に安んずるを免れざる也。しかも希望徒らに大にして實行の之に伴はざるときは、遂に小成をも見る能はずして已むことなきにあらず。目的は宜しく高かるべし。高からざれば乃ち低からざるを得ざる也。しかも目的徒らに高くして、耐忍の之に隨ふものなくんば、低きものにも達する能はずして、早く失脚するもの往々にしてこれあり。古語に百里を往くものは、九十里を以て半とすといへるは、その餘すところの十里の艱難なること、寧ろ既に經過せる九十里に過ぐるあるをいひたるなるべし。九十里の長途も尙は百里に比しては、半ばに過ぎざるものとせば、三十里、五十里、七十里の未だ半途にす

ら達せざるものなることを知らざるべからず。若し初めより希望の點と目的の地を、千里二千里の遠きに置かむには、長亭の霜露に悩み、短驛の風雪に苦まざるなきを得ず。此の苦惱に耐忍するを得ずして、中道にして沮撓するに至らば、希望は失望となりて、目的全く其心と違はざるを得ざるべし。されば如何に大なる希望にても、實行の之に伴はざれば、その希望は寧ろ空望のみ。如何に高き目的にても、耐忍の之に隨ふものなければ、その目的は徒爲たるに過ぎざるなり。空望と徒爲とは予輩が青年學生、殊に吾が女學生に向つて望むところにあらず。

傑出せる女子若くは男子が、絶大の希望、高遠の目的を懐き、其身を苦しめ、其心を悩まし、黽勉鞅掌して、其の初志に酬ゆるに至れるは、固より然るべきことにして、感賞の價値あるは論を待たずと雖も、こは有數稀有の場合に於てのみ見るべきものにして、之を以て一般普通を律せんは、餘りに苛酷なりといはざるを得ず。故に夫の成功といふ者は、必ずしも有數稀有の場合にのみ限られずして、寧ろ一般普通に向つて行はるべきものなるを思はざるべからず。

女子が初等教育を卒りて、高等普通教育を受け、これをも首尾よく卒業せんには、日常百般の事に於て、粗々差支なきを得べし、則ち之より進んで更に高等專門の學術、若くは業務を修

め、以て獨立の生活を立てんとする人々の外は、良家の婦となりて、その室家に宜しかるべき道を謀るは自個の天分にして又自然の常道ならざるべからず。此の天分を完うし、常道を守りて、善く夫に事へ、その家を齊へんには、夫妻和穆して、家庭の裡、春自から温かならむ。是れ女子に於ける第一の成功にあらずや。兒を擧げて、善く其子を導き、敎ふるに道を以てせば、其子また自から賢なるべく、斯の如くにして、父の業を紹ぎ、家を興すに至らしめば、是れ豈に女性第二の成功にあらずや。此の二つの成功は何人も期し得べく、望み得べき、人生自然經歴上の効果にして、一見平易普通のものなるに似たりと雖も、果して圓滿に之を成功せば、彼の獨身の生活を營みて、社會の爲め、敎育に、慈善に、獻身的の行事を爲して、一世の耳目を聳動するものに比し、その功決して讓らざるものといふ可きなり。蓋し女性の常道を守りて、その天分を完うするは、女子の本分を盡すものなればなり。本分以外豈また成功なるものあらむや。

　希望の大なるは甚だ善し。目的の高きも固より不可なし。たゞその大なる希望をして良妻なる範圍に於てせよ。その高き目的もまた賢母なる區域の中に求めよ。然らば則ちその希望は必

ず來るべく、その目的亦必ず到達すべき時あらん。而して其の嘗て學びたるところ、修めたるところのものに據り、細心留意して其間に處せば、その希望は達せらるべく、その目的は遂げらるべし。

ア、吾が可憐の女學生諸嬢が、幾年學窓の勉學を經て學校を卒業し、その故郷に歸るに及んでは、父母一族の歡喜は幾何許ぞや、而も程なく婚嫁の約成りて、華燭の典を擧ぐるに至らば、父母一族は更に一層の歡喜を加ふべし。かくて夫に事へて良妻たる實を擧げ、子を敎へて賢母たる名を揚げんには、福祿自ら至りて、一家其德に懷き、一鄉其名を傳へて、名譽ある天の榮冠は自らその頭上を飾るに至らむ。嗚吁是れ女性としての成功なり。人間として眞正の成功なり。成功豈に遠きにあらむや。必ず先づ之を近きに求めよ。（完）



米國女學生の生活

女子高等師範學校教授　井口あぐり

米國と日本とは、世人の知れる如く、文明の程度も違ひ、人民の氣質も違ひ、教育の方針も違ひ、生活の狀態も違ひ、其他自然界の物までも同じからぬ位でありますから、女學生の生活抔も之が影響を受けて日本とは種々の點に於て相違する所もあるやうに見える。彼國女學生の生活は勿論悉く採りて我國の模範とすることは出來ませぬのみならず、私などは彼國に往つて彼國の教育を受けつゝあるにも拘らず、精々日本の特色を鼓吹した國粹主義者の一人であつたのであるが、併し公平に日米女學生の實際生活を比較して考へて見ると、彼國の方は一體我國よりは進歩的で、自動的で、世界的であると謂はねばならぬ。是は私一個の所見でなく、一度び彼土を踏めるものは何人でも同樣の感を懷かるゝだらうと思ふ。以下所觀の一二を述べて見る積りである。

●●●學校生活　米國の學校殊に大學抔に於ては、生徒をして成る可く自由に學藝を修得せしむる方針であつて、日本のやうに束縛的教育でありませぬ。課業時間抔も割合に尠なく、從つて隨分餘暇に富んで居るのであるから、運動も充分行ふことが出來、又生徒間の交際其他の訪問等も能く行はれて居る次第である。學校に在りては、授業時間の外

は、何時でも自由に外出することが出來る。此等は日本の學校の狀態とは餘程異つて居るやうに思ふ。

●●●●寄宿舍生活　學校の寄宿舍も我國のやうに乾燥無味なるものではなく、恰も家庭のやうな巧合に出來て、其各室は丁度一家に均しいから、本統に愉快な生活を營むことが出來るのである。例へば其部屋々々の生徒が互に往來交際して友情を暖めたり、又相聚つて餘興を催したり、又晩餐後には誰彼の別なく一堂に會して談話を試むるとか、音樂を演ずるとか、種々な遊戲をして樂むのである。尙は各室で餘興の催しあるとき杯は、互に新趣向を凝らさうと競爭するので中々面白く、且益する所も狹小でないやうに思はれる。

●●●●●女學生の交際　米國の學校では、前に陳ぶるやうに、學藝を講究するばかりが生徒の仕事でないから、學生間の交際なども努めて實用に適するやうに躾けるから、誰人も皆交際の術は至つて巧妙である。又交際といつても女同士ばかりの交際とは限らぬ。男子とも自由に交際を結んで居るので、從つて女子も日本杯に比較すると、ズット社交的の智識に富んで居る譯けである。彼方の女學生は學校の課業終れば、散歩に出掛けるとか、運動に行くとか、或は知己朋友を訪問するとかして、日本の女學生のやうに寄宿室にばかり引込んでは居らぬ風がある。

●●●●女學生の旅行　米國の女學生間には外國旅行は隨分はやりて居る。それは主に暑中休暇を利用するのである。同志の人々が集りて一隊を作り、或は獨逸とか、或は英吉利とかいふやうに遠方に迄も出掛けるものが年々衆多ある。之には幾回も斯る旅行を試み、能く其地方の事情に通じて老婦人が

監督をして參るのである。又有志の富豪中には、其子女を大學に入るゝ前に、一回は歐洲へ漫遊させるものが多數あるさうだ。斯くすれば、社交的の智識を練磨せしむることが出來、又語學にも餘程巧妙になるといふのでさうするのである。之は遠國への旅行のことであるが、一體彼國の婦人は、我國婦人などの比でなく健脚であるから、一寸散歩に行くとしても、二里や三里は平氣で參るので、之は其慣習となつて居る。私などは最初には之が爲め困難を感じたことも屢々あつた。

●●●●

女子の運動　彼國では男女を問はず、一體運動は大變盛に行はれて居るので、學校（殊に大學）に於ては、時々其學校限りの競技を初め、各級の生徒は皆熱心に技術を闘はせ、又毎年二回づゝ他の大學との競技會が開かれるのである。高等女學校中でも、技術に巧みな所は、折々大學とも競爭を試みる。かういふ運動會を催す時分には、勝敗の公平を保つ爲めに大抵他校の職員を審判官に採定するのである。又女子の體操も格別男子と異なる所はない、大學でも、高等女學校でも、師範學校でも、普通體操は素より、器械體操も皆男子と同一に課して居る。高い處より飛降りるとか、或は跳飛ぶとかいふやうな技術も危險がらずに遣つて居る。却々我國の女學生の類ではありませぬ。總じて自分から進んで運動を試むるので、我國の生徒の如くいや／＼ながらするとは大差があるやうだ。それだから動作操練はいつでも自然活潑である。又學生にあらざる一般婦人であつても、運動倶樂部に入りて運動するとか、其他工女抔の如く一日一杯勞働に從事して居るものであつても、基督教會の設立せる組合に參りまして、體操教師に就いて、肢體の工合を矯正して貰ふとかいふ次第

で、女子體育上の設備は隨分能く行屆いて居るのである。

●●●●●婦人の讀書會　是は主として家庭內の仕事として行はれてゐるのであるが、米國には方今中年の婦人の催しに係る讀書會が設けられて居る。大抵最寄の婦人が七八人乃至十人位も集つて、種々な仕事を爲しながら、代り〳〵に新刊の書籍や雜誌のやうな物を讀で聞かせる仕組で、月に三回とか、一週に一回とかいふやうに、各會員の家で順番に之が開設さるゝのである。之は一般婦人方の爲めには隨分興味もあり、又有益な事であると私は信ずるのである。

之を要するに、我が國婦人界の積弊を除き、社會に出でゝ活動せしむる爲めには、可成歐米婦人社會の實況に鑑み、彼の長所美點を採りて之を實地に適用したならば、至極得策である。

婦人問題の解決期

江東五郎

人は社會的の動物なり。社會は共同の生存を目的とす。共同生存の最終の美は強者弱者を扶け弱者強者を凌がざるに至つて全しと謂ふべし。或は博愛と稱し或は慈仁と謂ふ。皆是強弱相調和して平等に圓滿に共同生活の目的を達せんとするの要件を指示するものたるに外ならず。

男女二人の畢世の共同生活を目的とする結合を夫婦と稱す。夫婦は社會の基礎たる單位を爲すものなり。唯々夫れ男女天然の性情を異にすと雖も等しく靈妙の頭腦を具備し、過去を喜び、現在を推持し、將來を慮る所の高等動物たるに至つて

は二者固より毫末の差異あることなし。果して然らば兩者の地位其間猥りに懸隔あるを許さゞるは勿論殊に社會的道德の基本たる共同扶助の觀念は、先づ以て夫婦の間に最も圓滿なる調和を保持せざるべからざるは言を俟たずして明なり。

古訓に曰く一身修りて一家齊ひ、一家齊うて後一國治まると。是固より千古の眞理なり。然かも予輩は附言して曰はん、夫婦の道修つて後社會的道義の圓熟を期すべしと。修身齊家の道之を個人の修養に待つこと勿論なりと雖も、併せて社會の基礎は夫婦なる男女複數の單位より成れることを記臆せざるべからず。否、夫婦なる複數を以て社會構成の單位とするの觀念は、人生百般の問題を解決するの前提として誤る所なきこと予輩の確信する所なり。

夫婦は實に社會の基本を爲すものなり。若し夫れ兩者の地位其平衡を得ず、常に調和を失し、何れか倨傲に、何れか因循に、何れか尊大に、何れか卑屈なるが如きことあらば是即ち社會の單位已に其調和を失するものなり、焉んぞ得て大局の美を望むべけんや。

婦人問題は果して如何なる場合に發すべきか、曰く夫婦の調和整はず、夫の權威婦の孱弱を制壓するときにあり。而して予輩は我國現在の狀態に於て此婦人問題の大に論究せらるべき時機に接着し居るにも拘はらず、未だ有志者の起ちて正義を喚起するものなく、暗憺たる妖雲此大問題を覆うて光明を望むの日何れにあるやを知らざらしむるは、將來の爲め社會の爲め遺憾に堪へざる所なり。吾人をして遠慮なく言はしめば、近今三十年我國文明の程度も長足の進歩を致し誇稱措かざるに拘はらず、未だ以て野蠻の慣習を脫する能はざるの

確證は之を婦人の酷待に見る。婦德と名け、貞淑と稱し、順良なりと讃し、以て暗に婦人活動の地歩を窘迫し、他方に於て男子放逸の責之を問ふに由なからしむるもの、其由來所謂東洋道德に淵源し、封建時代の弊風之に加味し以て今日に至れるものなるべしと雖も、其變遷の如何は姑らく措き、婦人の地位を侮蔑して之を酷待するの陋習は正に太古野蠻時代の遺風今日に現存するに外ならずして、實に文明の一大汚辱と云はざるべからず。

太古濛昧時代に於ける生存狀態は單に腕力の强弱に存し、一も平等の關係を保持するの機關を有せず。於此乎孱弱なる婦女子の地位は實に憐憫の狀を極め、社會の基礎たる夫婦の關係すら尚は且一に腕力の施用に成り、男子は其意の動くに從ひ婦女を掠奪して已れの慾を滿したり、史家の所謂

掠奪婚の時代即是なり。其後掠奪の風衰ふるに至りしも單に暴力の使用を停めたるに過ぎずして、婦人の地位は依然男子の無視する所となり、賣買を以て夫婦の關係を生ぜしむるに至れり。賣買婚の時代と稱するもの是なり。其後文化大に進み智識並に道德の開發漸やく見るべきに至りたるも、古來の慣習たる女子の奴隷的境遇は容易に改善の徵を現はさず、賣買婚の惡風は僅に其跡を收めたるも女子一身の運命は其父母若くは祖父母たる尊屬の手裡に轉歸し、婚姻は之を尊屬の注意を以て他人に贈與するものなりとの觀念を生じ、所謂贈與婚なる弊習を生し、婦人の地位は男子の爲めに蹂躪せられて今日の狀態を現ずるに至れり。

夫の權威無限にして婦の地位殆んど之を認むるに由なきが如き、夫婦の關係は、上來陳述したる如く、全く太古腕力爭鬪時代の遺風にして、最も

恥づべく將た厭ふべき陋習なるにも拘はらず、因襲の久しき人深く怪まず、寧ろ之れ天賦の關係の如く思惟し、德敎又は時代の風潮に制せられて其惡風を改善するの勢力なきのみならず、却て强者の味方と成りて女訓の名の下に、幾多峻嚴なる鐵鎖を婦人の四肢に加へたり。古往今來婦人の境遇觀じ來れば眞に憐れむべからずや。

婦人の地位を重んぜられざるが爲め、社會の風俗を壞り、道義の頽廢を惹起すること一々枚擧に遑あらず、就中藝娼妓なる奴隸の公認せらるゝが如き眞に陋醜の極にして、之が爲め社會の風俗を紊し、强窃盜を始め、詐僞、情死、殺人其他百般の罪惡は源を游里の徃來に汲むものにあらざるはなく、吾人が日々の新聞にて嘔吐を催しつゝある所なり。而して如斯奴隸の公認せられて社會の安寧を害しつゝある所以のもの、一に皆是男子の暴横婦人の地位を無視して自己の玩弄に供するの結果に外ならず。

世の所謂紳士、學者、敎育家と稱する人士にして、宴を開けば必ずや席に紅裙を侍せしめざるなく、而して世間又敢て怪むものなし。既に學識あり、德望あり、若くは社會の指導者を以て自ら任ずるものにして、自家門外一歩を出れば婦人を玩弄視し、婦人の體面を侮辱すること如斯にして毫も意に介する所なし。焉んぞ家庭に於て夫婦の圓滿なる調和を保持することを得ん。

離婚の頻繁なる所以は如何。婦人の體格の不良なる所以は如何。將た其見聞の寡少なる所以は如何。詮じ來れば皆是れ男尊女卑の蠻風より基ゐする結果ならざるはなし。

男尊女卑の蠻風今日に現存して爲めに社會百般の罪惡の原動力を爲すこと以上の如しとせば、是れ

識者の大に考慮を費さゝるべからざる重大問題にあらずや。近時公徳問題世上に喧傳せられ、社會的道徳振作の傾向を呈するに至りたるは、予輩の大に欣喜に堪へざる所なるも、尚ほ未だ此重大なる婦人問題寧ろ一種の人道問題に關し、眞正なる同情を以て、正義を喚起するの志士を見ざるは、實に遺憾の極なりと謂ふべし。

婦人問題は眞に重大なる問題なり。從ひて之を解決すること固より容易の業にあらざるべし。然れども此問題は何れの日か之が解決を見ずして止むべきにあらず、否、今日は當に之が斷案を下さゝるべからざる時機なり。回顧すれば曾て十有餘年前一時有志婦人なるもの盛んに男女同權論を呼號したるも、所謂女壯士的行動にして、本問題に對し、何等貢獻するなきのみならず、爲めに却て反對の結果を收むるの失態を呈したり。爾來風俗改良其他の旗幟の下に女權擴張を唱ふるものなきにあらずと雖も、何れも能く本問題の病源を觀破したるものにあらざるを以て、一も其効果を全うするの見込あるものあらず。

惟ふに婦人問題の中心は決して婦人其ものを研究するにあらずして、寧ろ之を男子の方面に求めざるべからず。蓋し本問題の圓滿なる落着は全然男子の節制に待たざるべからざることを信ずればなり。要するに偏に婦人其もの丶素質改良を唱へて得たりと爲す從來論者の迂愚は、予輩の最早之を再びするを欲せざる所にして、吾人は自己の所信に基き、新方面に向ひ、著々研究の地歩を進め、他日更に本問題の細目に論及せんことを期するものなり。



雲龍物語

文學士　濱田廉

千歳の老松、風にも雨にも枯れずして、常磐堅磐に榮ふるは、雄々しきことと云ふを俟たざれど、これに纏はる濃紫の藤浪あらば、ながめ更にはへあるべし、英雄に良妻あるは、これと相ひとしきか、豊太閤には北政所あり、柴田勝家には夫人織田氏あり、武田勝頼には夫人北條氏あり、細川忠興には夫人明智氏あり、皆この類なり、伊達政宗の夫人田村氏の如きも、決してこれ等の後に落つるものにあらじ、凡そ花の色こそ異なれ、むくつけき松ヶ枝を飾らむは一なり、良妻もその性質はひとしからぬも、良人の一生を花やかにするは相同じ、噫婦人の力も亦偉ならずや、予今田村氏の事を述べむとする筆の序にも伊達家の系統を記さむ、伊達家は内大臣藤原魚名の後裔にして、成宗初めて陸奥の守護となりしより、やう〳〵東北に勢を張ることゝなれり、子尙宗孫植宗、陸奥探題となる、性雄々しく、勢ます〳〵旺なりしが、其臣五十嵐將監權を專にして、家道一時亂れしも、尙東北の雄藩たりき、其子晴宗二子あり、長子親隆出てゝ岩城氏を嗣ぎ、次子輝宗家を繼ぐ、其子は即ち政宗なり、政宗一目明ならざりしも、性猛くして、近隣の諸國を從へ、後には使を

外國にまで遣し、勢威東北第一なりしかば、時人獨眼龍と稱しゝことは、世のあまねく知る所なり、抑も伊達家が陸奥仙臺に治するに至りしは、慶長五年にして、その以前は出羽米澤に在りしなり、故に政宗も初の程はこゝに在りしことゝ知るべし。

この頃陸奥田村郡三春城主に田村大膳太夫清顯と云へるあり、征夷大將軍坂上田村麿が二十八代の孫にして、武勇世の常ならず、小藩ながらも葦名佐竹などの大敵に當りて、嘗て敗を取りしことあらざりき、清顯伊達政宗の弱年ながらも、器量拔群なるを見て、これと緣を結ばゞ、田村家の爲めには此上なき援助ぞとて、使を米澤城に遣はして、この由を輝宗に申入れぬ、輝宗もかねて清顯の武勇を知れるが故に、老臣等と諮りて、遂にその議を納れぬ、清顯一女あり、名を愛姫と云ふ、容姿殊にすぐれて、天成の麗質玉を欺き、進退座作みやびやかにして、閨秀の譽高かりき、清顯仍て愛姫を政宗に娶はせむと約し、天正七年十一月向館內匠姬を送りて三春を出で立つ、輝宗も伊達藤五郎成實、遠藤文七郎基信をしてこれを迎へしむ、途上野武士ども伊達田村の合體を妨げむとせしも、事なくして、兩家の使者伊達郡梁川に相會したり、その時內匠は齎らしゝ水晶の珠數を出して壽ぎけらく、

水晶の玉のやうなる子を以て

と、基信即ち

末繁昌と祈るこの珠數

とつけて、各千代八千代を唱へつゝやがて、愛姫は恙なく米澤に着きけり、かくて天正十年正月吉日を撰びて、めでたく婚儀とりむすばれぬ、時に政宗十七歲、愛姫は十五歲なりき、それより姫

は田村御前と稱せられ、政宗の世となりては北の御方とあがめられき。

さる程に天正十四年の霜月、田村淸顯こゝち例ならず、とみにおこたるべくも見えざりければ、家臣を召して遺言すらく、我家の敵に犯されぬは、政宗の威望によるなり、我死なば家の事すべて政宗の指揮を受けよ、我幸なくて男子なし、唯一の愛姫は政宗に嫁ぎたれば、その一男子を養ひて、田村を繼がしめよと、やがて空しくなりぬ、夫人のなげきは更にも云はず、その後田村月齋橋本刑部等は淸顯の遺命のまに／＼伊達に歸したれど、家臣の中或は其外戚相馬氏と通じて、家を傾けむと計りしかば、天正十六年五月、政宗卽ち淸顯の甥孫七郎宗顯を以て、三春城代となしぬ、是時に至り、豐臣秀吉殆んど天下を平定しゝかば、天正十八年三月、親ら大軍を催して相模小田原の北條氏を征しぬ、將士の從もの雲の如し、政宗も五月を以て、越後を經て小田原に至り、秀吉に謁して優待せられしが、遲參の故を以て三春の地を沒收せられしゆへに、宗顯は伊達家に來りしかども、不幸短命にして死し、田村氏絕えぬ、夫人の無念の程こそ推測らるれ。

さて伊達政宗は天正十二年十八歲にして家を繼ぎ、やゝ／＼侵略をつとめて、天正十七年二十三歲の時には、會津四郡仙道七郡を並せて、戰場に臨むことしば／＼なりしも、封內よく治まりて、五日の風や十日の雨も時にかなひ、人は鼓腹擊壤の樂にあきぬ、これ北の御方の內助の力多きに居ると云ふ、易に曰く雨は龍に從ふと、旣に龍と曰へば雲これに從ふ、夫人の政宗に於ける、宛も雲龍の如し、政宗は卽ち獨眼龍なり、此龍をして益其靈を神ならしめしは夫人の力なり、亦偉な

らずとせむや、さる程に一大事こそ起りつれ。頃は天正十八年の冬、陸奥の葛西、大崎地方に、一揆起りければ、秀吉政宗に命じて、これを征伐せしめけるに、政宗にも謀叛の企ありと讒するものありしかば、秀吉大に怒りて、翌年政宗に上洛を命じたり、一門眷屬如何はせむと、額を鳩めて密議をぞ凝らしける、その時夫人は山城伏見の屋形に留りしが、遙に密書を政宗に寄せて曰く、世の中再び亂れなむとす、唯理ありと思召す方に志したまへ、妾こゝに留り侍れば、意を勞し給ふ勿れ、守刀一口こゝに有り、妾も武士の家に生れ侍れば、徒には佩びじ、縦令いかなる暴亂に遭ふとも、ゆめ／＼人手の辱を受け侍らじと、雄々しき言葉をもて、動かすべからざる決心を示し、良人をいさめたる心根のけなげさ、若し一旦變至らば、必ずや細川忠興夫人の先驅をなしゝならむ。

政宗これを見て喜悦の眉を開き、女流ながらも、さすがに田村將軍の裔なりと、いたく感じけるとなん。

夫人三男一女を擧ぐ、長子忠宗家を的ぎ、仲子卯松丸季子竹松丸、共に世を早うせり、女五郎八姫は、徳川家康の六子越後少將忠輝に嫁ぎたり、寛永十三年五月、政宗薨去の後は、松島瑞巖寺の雲居和尚に就て禪を修め、亡き人の爲めに追善供養怠りなかりき、夫人婦徳の優りたるは云までもなく、和歌を能くし書に巧なりき、されど治に居て亂を忘れず、一朝事變起らば、良人を助けて、玉碎の覺悟ありしは、非常の用にとて造りおきたる筒袖衣を觀て知るべし、後江戸の邸に遷り、承應二年八十六歳を一期として身まかりぬ、法名陽德院殿榮庵壽昌尼大姉と稱す、その奥城は瑞巖寺の東北陽德院に在り。

夫人生前亡夫清顯の遺志を遺れず、實家再興を計りしも、男子皆早世しゝかば、常にこの事をのみ忠宗になげきたるを以て、その逝去の年四月、忠宗其三子宗良をして田村家を再興せしめぬ、噫伊達家が東北の雄藩たるに至りしは、夫人の幼少しとなさず、田村家の今日あるは、又夫人母子の誠孝に因る、古語に陰徳あれば陽報ありと云へり、天夫人の陽徳に報ゆるに何を以てせむとするぞ。

附言、此一篇は大槻博士著復軒雜纂に載する所、「伊達政宗側夫人田村氏の話」に據りて文を爲せり。

佐藤俊子の至孝

菅原倭翁

『陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成』とは、男性と云はず、女性といはず、志あるもの丶最初の意氣であります、然るに一度何か障碍に出遇ふやうなことがありましたら、その堅かりし決心も覺えず鈍りますのは、殆ど人生の常と申しても宜しい位で、千挫屈せず、萬障を排して初一念を通じたものは、古今千萬人の中でたゞ一人二人と數ふる程でありませう。殊に女性は心も狹く、氣も弱く、若し不時の災難にでも遇はゞ忽ち喪心し、狂氣し、思ひ餘つて死を企つるなど、世間にそのためしは珍らしくありません。

さて此にお話いたさうとする佐藤俊子と申すは、一度ならず二度三度、不幸に不幸を重ねまして恰も不仕合の問屋と申すほどの境遇に淪みながら、しかも二十幾年と云ふ永の月日の憂氣苦勞を堪へ忍びて、優曇華の花咲く春に廻り遇ひ、天晴れ本望を遂げまして、地下の父母を慰めました雄々しさは、眞に日本女性の本領を發揮したもので、誠に目出度く珍らしき女丈夫であります。

昔橘逸勢の女が父の配流を歎き悲み、その後を慕ひ參りて、亡き父の墓畔に小屋結ふて仕ましたは、我國孝女の鑑として世に稱へられて居る所であります。俊子が首尾よく父母の仇を討ち卒せてから、身を捨てゝ父母の後生を弔ひました孝行は、かの妙仲に較べて過ぐるも、及ばざることはありません。

下總古河の城主松平伊豆守の家臣に佐藤仙右衞門といふ方がありました、俊子はこの仙右衞門の愛娘であります、仙右衞門は古河藩の徒士目付役を仰付て居たが、時に同家中の平徒士大西助四郎と云ふものとは、至て入魂の間柄でありまして、朝夕互に相往來して睦じく交際して居たのであります、所が此の助四郎と云ふ男は油斷のならない男であつて、日外仙右衞門が妻女、即ち俊子の母親に横戀慕いたして、仙右衞門の留守を計りて不屆にも直々妻女を口說ました、けれども妻女は一向承知せない、散々にその無禮を咎めて耻しめました、助四郎は耻かしめられてそれにも懲りず度々五月蠅く言寄るので、妻女は遂に此事を夫の仙右衞門へ告げましたから、仙右衞門は大に立腹いたしまして、此に兩人多年の友情は一朝にして吳越の如く相反目するやうになりました。

さていよ〳〵助四郎は惡人の根性を現はして此事を大變に遺恨に思ひ、或夜仙右衞門の邸內へ忍び込んで待受け居りましたが、仙右衞門は斯る怨敵の潛み居るとも思ひませんから、夜更けて何心なく歸て來た所を、得たり賢しと助四郎一刀拔打に致しました、仙右衞門は切られながら直に拔き合せて助四郎の鬢先きから耳へかけて切付けました、所が助四郎が再び眞向から切下げたので、氣丈の仙右衞門も遂に二の太刀に痛くやられたので

ウンと言つて倒れてしまいました。

仙右衛門の妻女はこの物音を聞き付まして何事であらふかと、出で來ましたら助四郎はスカサズ切付たので妻女はそのまゝウンと仰向に倒れて共に絶命いたしました、助四郎は仕すましたりと直さま何處ともなく逐電して姿をかくしました。

其あとで下女が目を覺しましたら、この有様ですから吃驚仰天して大聲あげて叫びましたので、近所の人々が集て來て早々役所へこの旨を訴へました、時を移さず目付や徒士小頭などが檢分に來られまして、まさしく助四郎の所業とは極つたけれども、その時は既に助四郎は何處へか逃げて了たので致しかたがありません、かくて俊子の兩親は非業の最後をとげたのであります、これ俊子が第一次の不幸でありました。

仙右衛門方には此時僅か二歳の幼女俊子一人で、外に後仕末をするものもありませんから、生前の朋友が集つて葬式萬端あひすませ、その上家財諸道具賣拂ひまして、その金を添へ俊子を縁家へ養女に遣はしました。

俊子は縁家へ送られまして、そこで先づ無事に育てられて居ましたが、その四歳になつた夏の事でありました、養父母は時の流行病に中てられて共に相前後して死亡いたしまして、俊子は又第二の父母に別れました、是れ俊子が第二の不幸であります。

それで俊子は又々養母の妹で、江戸難波町の商賣家へ嫁て居る人の方へ引取られまして養育せらるゝことゝなりました、此養家を津國屋と申して大財産家であつて、その上一人の子供もありませんければ、主人夫妻は大變この俊子を寵愛して育てましたので、不幸中の幸でありました、かくて

俊子が十二歳になつた時に養母が一夜守袋を出して來て、實の父母が人に切られて死たことを物語いたしました。俊子は玆に始て不倶戴天の親の敵のあることを知りまして、女でこそあれ、兩親の敵を取らねば孝行の道にはづるゝと思ひまして、其後は明暮れその事ばかり考へつめて、小さき胸をいためて居たのであります。

俊子が十四歳の時でありました、養母へ對して申しますには、私お陰にて何不足なく成人いたさせて貰ひまして、御恩は海山かへ難し、誠にすまぬことでありますけれど、一旦不倶戴天の敵のあることを知りましてから、その敵を取らぬうちはドウも安心して眠ることも出來ませんによつて、是れから江戸中を探し歩行いて是非共助四郎に廻り合ひたう厶ります、何卒今日限りお暇を下さるやう養父へお賴み下されと、サメ〲と泣きました。養母も實にもともらひ泣を致しましたが、しかし思ふには、折角今迄樂しみ育てゝ跡目の相續をさせやうと思ふて居るではあるし、殊に十四歳位な纎弱い女の腕で敵を打つなどは出來る沙汰でもないことはわかつて居ますから段々俊子をなだめすかして一先づ敵打を見合すやう、シミ〲と諭しましたから、俊子も詮方なくそのまゝ心にもあらぬ月日を送つて居ますうちに、俊子が十五歳の冬になつて、津國屋の養母が重患にかゝつて終に空しく死去いたしました。俊子は玆に又第三の母に訣れまして、その悲しみの爲に一時敵打のことも忘れて居たのであます。

その翌十六歳の春から冬へかけて、津國屋は三度も火事にあひまして、土藏から穴藏まで火が移つて、家財は勿論、商品殘らず燒失して了つて、さしもに富み榮えて居た津國屋も、斯く重ね〲災

難の爲め次第〳〵に家運傾むき、下女、下男は申すに及ばす、手代丁稚にまで暇を出して、遂に廢業し裏長屋に住居せねばならぬやうに零落致しました。是れ俊子が第三次の不幸であります。

されば俊子は養父に向ひ、度々の不仕合で家計も次第に困難と相成ました今日、妾なにも爲すこともなく御厄介お掛け申して居ますは相すまぬとであります、幼少からの御養育、一日も御傍を離れまゐらすは誠に悲うありますけれど、一層の事、奉公に出で〻幾分なりとも御困難の御助を致したく、且つは私最早十六歳にも成りますれば、是非とも亡き父母の敵に廻り合ひ一刀なりとも恨みたく、それには奉公せば敵のありかを知る便りともなりませう、我ま〻なお願でありますけれど、此儀お許下されたしと、只管頼みました、養父も俊子が切なる心を思ひ遣りて、涙ながら奉公に出すこと〻致したのであります。

俊子は機嫌よく養父の許を得ましたから、先づ亡父母の舊主松平伊豆守の家中へ奉公いたしまして、十八歳になるまで滿二ヶ年の間と云ふものは誰れ彼れの別なく助四郎の行衞を尋ねましたけれど、頓んと消息がわかりません、その後は此處の家中に半年、彼處の家中に一年といふ風に、到る所の大名の家中に奉公して必死となつて探索いたして居ました、斯るうちに年月は遠慮なく過去て、早くも元祿十四年となりまして俊子も今は二十八歳となりました。

此の十三年の間俊子の苦勞と申せば尋常ではありません、普通の女ならば嫁入をするとか、又は衣服髮飾の爲めに浮身をやつすのでありますけれども、俊子は大望ある身の決してそんなことは致しません、只だ明け暮れ養父母の奉養と敵助四郎を

狙ふとばかりでありまして、何處の主人へ仕へても身を粉にして働いて、窃に敵助四郎の行衛を尋ねたのであります、さて元祿十四年の三月から湯島天神下新御番作田彦九郎方へ奉公いたしました、所が此屋敷には悪るい家風がありまして、女が新に奉公するときは、家老の藤城勘左衛門と、八木太郎兵衛との兩人を奥の茶の間で饗應することゝなつて居るのであります。俊子も此屋敷は初めての奉公なれば傍輩の女中の取持て、三月七日の夕方に少しの酒肴用意して二人の家老を饗應いたしました。

この藤城勘左衛門といふ家老は元來の飲み抜けでありましたから、少し酒が廻つて來ると、上機嫌になつて、弱年の手柄話などを大得意になつてベラベラ饒舌ります、それが可笑しいので俊子は此の老耄の癖にと、ジッと其顔を見ると、かすかながら勘左衛門の額から耳へかけて疵がありますから、俊子はギヨットいたしましたが、素知らぬふりでその疵のゆはれを尋ねました。

勘左衛門はます〳〵得意となつて、此疵は百石疵と言つて向ふ疵だから豪氣なもので、最早や廿三四年前の頃だ、丁度元氣盛の頃であつたが、敵は二人シカモ武藝の達人であつた、それを即坐に仕留め、此通り鬢先から耳へかけて斬れたけれど、蚊の喰ふ程とも思はなかつたなど、自慢たら〳〵饒舌くりましたから俊子はいよ〳〵と見當をつけましたに依て、其夜は眠むらうとて寢られません、思案ながらに其夜は早や明けました。

さて段々樣子を聞いて見ますと、此家へ來てから改名したと云ふことまで突き留めましたから、藤城勘左衛門こそ兩親の敵助四郎にまぎれのないことが、わかりましたので俊子の喜び一方でありま

せん。

モウ斯うなつては仕事も何にも手に附きません、たゞ明け暮れ善き機會をと附け狙つて居ましたが、その年の春も暮れて五月の幟を祝ふ頃となつても未だよき機會を得ません。早や夏も過ぎて九月の菊の盃に太平を壽く頃となつても未だ時節は來ません、俊子は立ても居ても居られないで、此事ばかりに氣を疲らして居ると、九月の十四日といふに勘左衞門が主人の知行所相州へ檢分の爲に出張すること丶なりました。

遺恨十年一劍を磨すで、いよ〳〵仇を報ゆるは此時であると、早速兩親の年忌を申立て丶暇を貰ひ、それから自分の中に年久しう召使つた下男で、當時他家に仲間をして居る喜兵衞といふものを尋ねて、男と見て大事を賴とて敵打のことを打明し、今迄の難困辛苦の次第を物語りました。喜兵衞は至つて正直な六十餘の老爺でありましたが、俊子の物語を聞て涙を流し、斯くまでの御孝心は神佛も必ず助けられませう、屹度御加勢申しますと承知いたしました。

いよ〳〵助四郎が出張する十四日の早天に、俊子は喜兵衞を伴ひて鈴ケ森へ行つて今か〳〵と待て居りました。然るに夜も早や明け放れて秋の日もや丶高うなり、江戸出立の旅人などは大方通つてしまつた頃になりましても、助四郎はやつて來ない、そこで品川の問屋まで立歸つて馬次の役人に問合せますと、作田樣御家中藤城勘左衞門殿事は、今朝明け六ツ前に御通りになりましたといふ、俊子と喜兵衞は共にガツカリして、急ぎ川崎へ行きて又々問屋で聞くと神奈川泊りの筈で既に先刻通行したといふ、二人はこれより駕籠を雇つて夜の十時頃に神奈川に着いたしまして、兎も角

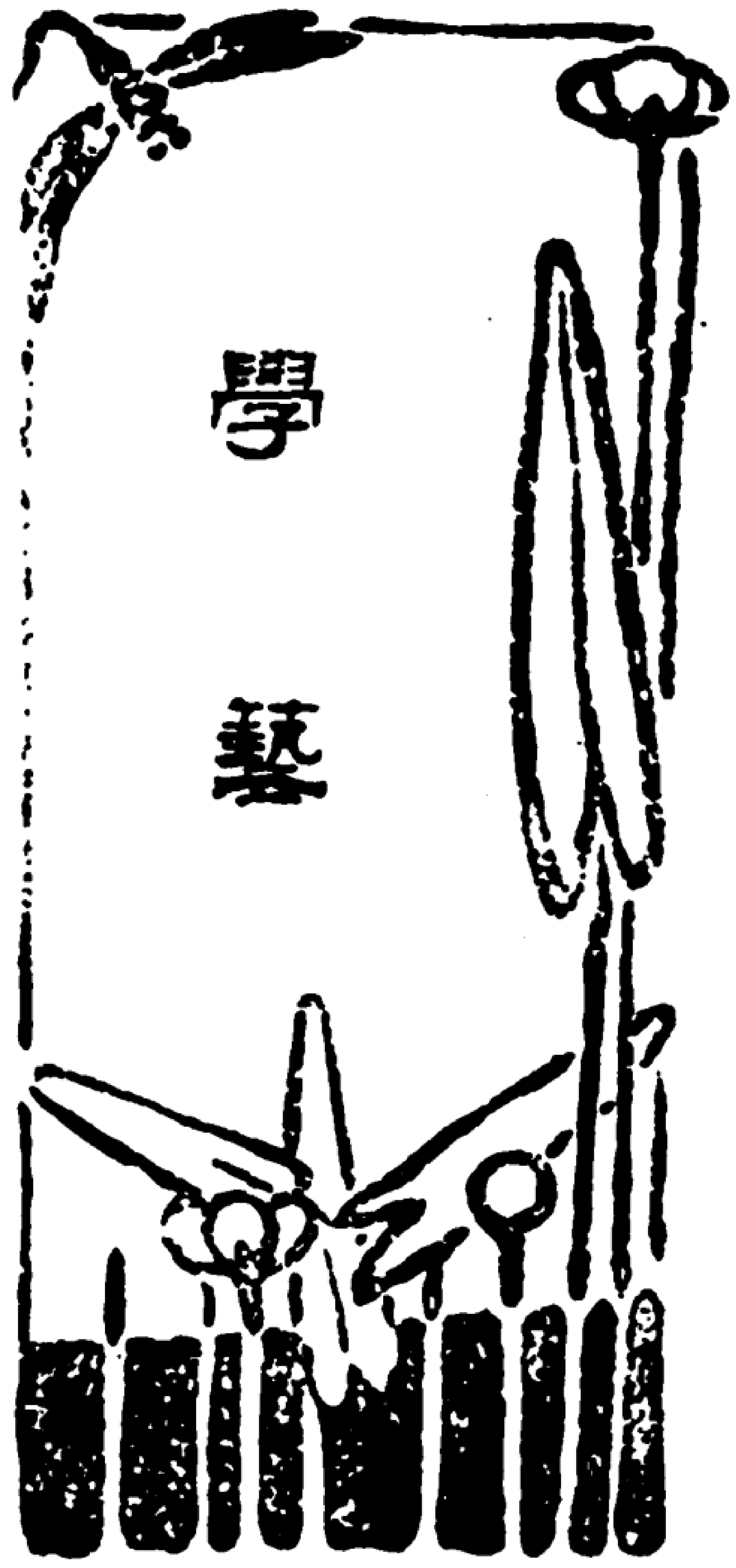
此處にて宿を取り置いて、それから段々宿屋中を探しましたら助四郎の勘左衞門は果して宿泊いたして居りました、いよ〳〵宿處を見屆けたによつて翌朝狙ふことゝして一先づ宿につきて休息いたしました。

されば其夜は宿屋に一睡もせずして明し、翌十五日まだ夜深きうちに宿屋を出立して山田ヶ原といふ所で待つて居りました。

所へ午前七時といふに勘左衞門一行三人は馬上ボカ〳〵とやつて參りまして、既に俊子の前を通り拔けんとせる刹那、俊子は大道へおどり出で、親の敵大西助四郎覺悟せよ、妾こそは佐藤仙右衞門が娘俊子なりと呼はり切てかゝりました助四郎大に驚き馬から飛び下りやうとする所を俊子はおどりかゝつて眉間を目かけてシタヽカ切付けました、助四郎は切られて氣を失ひ、馬から眞つ逆樣に落つる所を喜兵衞スカサズ押倒し、俊子外さず首を打落して目出度く本望を遂しました。かくて俊子は二十年の年月苦辛した甲斐あつて首尾よく敵を打ち卒せましたので、その身はその儘鎌倉へ參つて尼となり、亡き父母の菩提を弔ひましたのであります。又存生中は折々江戸へ歸つて參りまして、津國屋の養父を見舞ひました。居は志を移すが世間の習ひなるに、身幼少より町家に育ちながら、武士の魂を失はなかつた、俊子の如きは、實に類稀れなる女性ではありませんか（完）

◎夏季料理

煎り鳥　先づ牛蒡と蒟蒻を適宜に切り能く茹でゝ笊に上げ置き鶏肉を薄く切りて鍋に入れ味淋と酒を等分に割りてザツト煮立て汁を器に取上げて醤油を掛置き前の牛蒡と蒟蒻を鶏肉を煮たる汁の鍋に入れ大略汁の煮詰まりたる時更に鶏肉を浸したる醤油を入れ一しきり煮たる後鶏肉を入れて攪交ぜるなり



通俗土佐日記（第廿回）

北海道師範學校教諭　兒玉彌三郎

七日、今日、川尻に舟入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水干て、艱み煩ふ、舟上ることいと難し、

○川尻に云々　昨日川尻に入るとあるは川尻の口に取り付きしにて、今日は其の内に入りしなり、

○いと難し　とは此處までも上り難かりしに、此處よりは一層上り難きをいふにて、是れ亦不幸を歎きたるなり、

斯かる間に、舟君の病者、元とより骨々しき人にて、斯樣の事更に知ざりけり、斯かれども、淡路の老婦の歌に感でゝ、京誇にもやあらん、辛くして、怪しき歌拈り出せり、其の歌、

　來と來ては川の堀江の水を淺み舟も我が身も煩ふ今日かな、

是れは、病をすれば、讀めるなるべし、

○舟君の病者　とは紀氏の事なり、

○元とより骨々しき　は生れつきこつ〳〵したるといふにて、やさしき處なきをいふなり、

○斯様の事云々　歌を讀む等のことは、とんと知らぬ人なりといふにて、紀氏程の歌讀みを斯く言へるは、此の舟君は紀氏に非ずして別人なりと人に思はせん爲めなり、故に謙辭にはあらで記者の女の評語なりと知るべし、

○斯かれども　とは歌の事は知らぬ人なれどもといふなり

○淡路の老婦が云々　前日のことを承けていふにて、歌を知らぬ人なるが故に、善くもあらぬ歌を賞めたるを誹れるなり、

○京誇云々　此の舟君、都人なれば、都人といふことを鼻にかけて、淡路の老婦に誇らんとの心なるべしといふなり、

○來と來ては　來り〳〵ては、辛くして來てはなどの意なり、此處まで來たれば最早舟も滯らず、進むべきにといふ程の心を思はせたるなり、

○川の堀江の　は堀江の川のといふべきを倒置せるにて、後世の連歌詞の起原とも見るべし、

○水を淺み　とは假りに、舟に心あるものとして、舟が水を淺がりて、水が淺さにといふ程の意なり、

○煩む　は字の如く、煩ふことなり、

○一首、海上にては風波に障へられ、辛く此處まで來れば又水の干たる爲めに障へられ、舟も我が身の病も共に煩ふに依り、從者をまでも煩はすことよと舟の進まぬを歎きたるにて、身の不幸を歎ける意は固とより離れず、

○見れば病をすれば云々　記者の女の、傍らより推測して言へるに書き爲したるにて、本來亡兒の歎などより病も起れるを、愼みて然かいはずして、單に病の爲めの歎とのみ思はせんが爲

めなり、
一歌に言の飽かねば、今一つ、
疾くと思ふ舟惱ますは我が爲めに
水の心の淺きなるべし、
此の歌は、都近くなりぬる喜びに堪へずして言へるなるべし、淡路の子の歌に劣れり、妬く言はざらましものをと、悔しがる中に、夜になりて、寢にけり、

○一歌に云々　一首讀みたるにて滿足せずして、讀まずもがなのことに又一首讀みたりとて、記者の女、此の舟君の、歌もろく〱知らずして只都自慢のしたさに讀みたるを誹りたる意を示せるなり、

○疾くと思ふ云々　疾く進めと思ふ舟を水の惱ますはといふ意なり、

○我が爲めに云々　水の我を思ふ心淺きなるべしとの意なり、淺きといふ詞、現實に水の淺きと、假設の水の心の淺きとを兼ねて、頗る巧みなる遣ひ樣なり、

○一首、我に心あれども世人我を思はずとの不幸の意を水に託して述べたるなり、

○此の歌は都近く云々　此處の詞の遣ひ樣絶妙なり、蓋し此の歌は、都近くなれるを喜びたる餘り讀みたるにはあらざるを、記者の察し誤りたる齟齬の工合など、到底凡腕の及ばざる所なればなり、元來歌を知らぬ舟君なれば、此の歌は必定、都近くなれる喜びの餘りに讀めるならんに、毫も然か見えぬこと、其の讀み樣のあさましさよ、此の故に一首だに心苦しかりしに二首まで讀みて斯かる耻を得たることよと、甚だ

片腹痛く感じたる心を思はせんが爲めに態と斯く齟齬せしめたるなり、
○淡路の子　子は女を呼ぶ通稱にて、記者の女よりの詞としていふなり、
○妬く　は言はざらましものをに冠らせたるにて、其の意は、物に先を取られて負け惜みする程の心なり、此の下は舟君の上に付いていふなり、記者の片腹痛がるのみならず、舟君自身も悔しがる由をいふにて失敗の極なるを思はせたり、
○是れ等の詞、皆此の歌を紀氏のにあらじと思はせんが爲めに書けるなり、
○夜になりて云々、是れ等の歌の出來、善からざりしを不興がりて、手持ち不沙汰といふ樣なりしこと見る樣なり、

◎茄子の料理

▲**鴫燒茄子**　中位な茄子の皮を剝き、二つに割り皮附の方へ裏を少しく取り中程へ七八分位に庖丁を入れて身を揃へ、三個位宛を金串に刺し胡麻油をよく煮切りて臭氣を拔き、それを茄子の表裏へ塗り付け、少しく茄子の焦げる加減まで燒く、これに用うる味噌は鹽の辛きがよろしく、味噌百目に胡桃十粒程入るゝ割合で、先づ胡桃を摺鉢で能く摺り、其の中に味噌を入れて尙能く摺り混ぜた上鍋へ入れ、味淋一合を煮切つて、これに加へ、砂糖五十目を入れ烈火に掛けてざつと練り裏濾で濾し、之を燒いた茄子の裏表へ刷毛で塗り付け又炙りて出すのです

▲**茄子の刺身**　茄子の皮を剝き、淸潔な水に入れて灰汁を拔いた上、これを二つ割りとし、剝身庖丁で縦から一分九厘位の厚さに切りこれを重れて蒸籠に並べ、凡そ五分間位蒸して能く冷し、盛合には絹蒟蒻を添へます、この絹蒟蒻の拵へ方は晒し蒟蒻の兩面をで、灰汁をとり、薄刃の庖丁で薄くへぎ、水でよく洗ひ、二回程茹でこぼし水に入れて冷して置くのです、別に又裂葱を添はます、これは葱の白根許りを四つに裂き一寸位に切り沸騰つた湯に入れてざつと茹で、水に入れて冷して置きます、又之に用ゐる酢味噌の拵へ方は、味噌五十目を摺つて、これに味淋一合五勺に煮詰めて冷したのを加へ、酢凡そ五勺程を入れ糊位の硬にし小皿に入れて出します

▲**茄子山かけ**　大なる茄子の皮を剝き霰に切り水で晒して灰汁を出し、沸騰つた湯へ入れてざつと茹で、之を極く濃く取つた鰹節汁に少し醬油を加へたので煮て、別に山の芋の皮を剝いてよく水を拭き取り下し金の目の細かい物で摺鉢の中へ下し、摺古木で摺りその中に濃い鰹煮汁の冷たのを芋の三分の一程入れ醬油は食味になる程加減して鹽梅し、之が出來上ると、前の煮た茄子の汁をよく切り山葵醬油てあへ小皿へ盛り、その上に彼の山の芋を掛けて出すのです、なか〱可味い料理です

眠

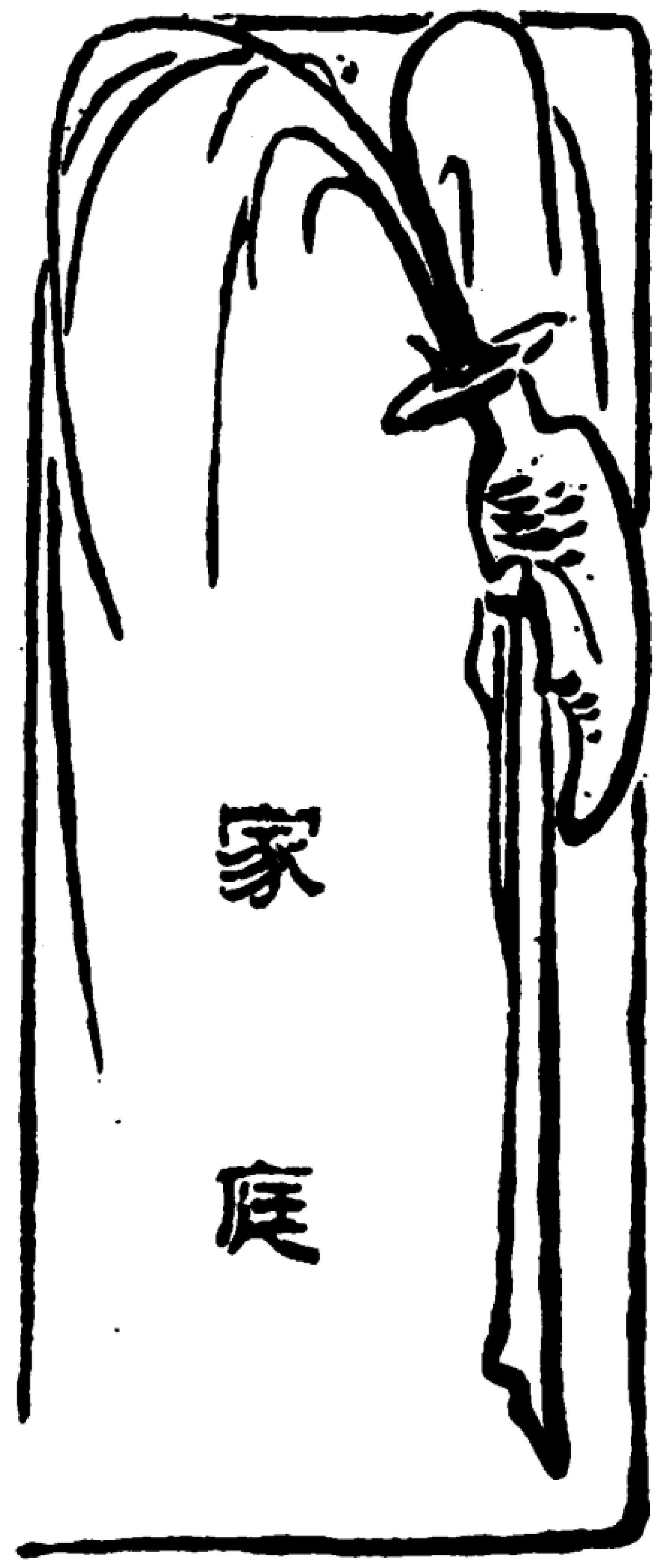


和畫通信講義

山崎隆子

墨畫にては、白色の花は、淡墨にて、輪廓をとるのみなれども、もし、花瓣に紅色の點班散見する花ならば、濃墨にて、これをゑがき入るべし。

彩色なれは、白色は、胡粉にて畫き、黄がち靑色の隈を入るゝのみなれど、色あるものは、その實物の色に適へる樣に、濃淡をはかりて顏料をとき置き、胡粉を含めし筆につけて畫くなり、もし、白色にして、紅色の班點あるもの、または紅色にて白色の點を顯はせる時は、最初、胡粉にて畫きおき、乾きて後、紅色にて點體を畫き入るゝか、胭脂にて全瓣を塗りつゝ白色點狀を塗り殘すかの二法に從ふべきなり。



田舍に於ける予等の遊樂

林　壽　祐

田舍よ！田舍?、あア田舍?!。田舍といふと直ぐ野卑無興味といふ觀念が起る、田舍は全く野卑で、そうして無興味な所である、されど古人言はずや「樂また其中にあり」と、田舍は田舍として、又それ〴〵の樂みがあるのです、で同じく田舍といッても、田舍は日本國中にひろがッてるから、土地によつて風景も違ふし、人によッて樂みも異ッて居るのです、所でこれから予等の住める田舍の風景、次ぎに田舍に於ける予等が、春夏秋、如何なる遊樂を爲しつゝあるかを、ちよッと摘話をしてみましやうか。

予等の住める田舍は、廣々してる所で、田舍の村落として自慢する方であるが、東京に住みなれてから歸ッて見ると、實にはや淋しい、ちよッと外へ出ると樹や草がもや〴〵してる。田や畑は平らかで、遠く見晴らすことが出來るが、日暮にでもなると、人ッ子一人居らないことがあッて、呆れかへッてしまう。けれどもそれが春であると、草が新らしく芽を出して、一面緑色である、小鳥は愉快さうに梢で囀ッてる、夏になると色々な花が花園道傍に咲き亂れ、魚が川や池でバタリ〴〵

と躍り勇んでる。秋になると夏結んだ果物が甘まさうに黄色く熟し、蟲族叢で鳴き騒ぎ、谿間池邊の草木は霜の爲めに、紅葉して、時ならぬ錦を飾る、冬になると何處も同じ霜枯れどき、葉落ち莖折れ、草木は寒むさうに悄々となッてしまう。たゞ松竹の類は相變らず常盤の色を示し青々としてる。で雪が降ると、野も山も田も畑も、小屋も蘆芥もあッたものじやない、唯一面の銀世界、蒼空翔けるは鷹鳥、將た雁の聲、地走るのは、腕白小僧に可憐の犬兒、勤勉なる農民も此時節には仕方がない、家々で戸をしめ、炬燵にむぐり込んで雜談に光陰を費してる。而しこれは僅かの間で、直き梅が咲き、春の光が輝くと、雪も氷も解けて、再び樂しき田舍となるのである。混雜で敏活で、智識製造場の多い都會から見れば、何んだか、淋しくて不便な所であるが、靜寂で空氣が清潔で、花が鮮かで果物の甘いのは、確かに田舍の都會が優ッてる所である。

予は田舍生れ、其廣々としてる空氣のよい、淋しくて不便な所で、十何年間育ッたのである、故に予は何となく田舍が懷しい、予は敏捷なる都會生活は極く好きであるが、予の潔癖は都會に住むに適してゐない、いはゞ水の清い河で育ッた鯉が狹苦しい池の濁水に移るも同じこと、始めから汚れた水の中に生長したものであれば、體に慣れてるから、左程に思はないが、小供のうち全で河水へ泳いてたものには、何うも心持がわるい、田舍では春夏にかけ、風吹くと何うも佳い心持であるのに、何うです東京では雨が降ると、眞ぐお汁粉の樣にドロ〳〵な路になり、風が吹くと心よいどころか、忽ち塵が飛ぶ、紅塵萬丈、實に面を向けられないことがある。九段、砲兵工廠、お茶の水

橋、大學の前などは、最も甚しい、時としては砂礫が飛ぶかと思はれることがある、賑かな大通りでは水を散らすが、少し小街になると、矢鱈に腐ッた泥水を投げ降らす、堪まッたものじやない、プン〳〵臭ふ、であるから予は年々熱くなると田舍に逃げ出してしまう、殊に郷里に歸ると、情の冷かな人類ちう動物の居る所と違ッて、情の温かな愛の園であるから、何の位心よいか知れん。

予は酒を飲まず煙草を吸はず、甘い菓子も食はず、碁、將棋もうたず、ハナアハセやベースボ



ールなどいやなれば、釣も好きでない、人を譏ッて遊ぶは猶更すきでない、好きなのは讀書の外多汁果物を食ふと、綺麗な花を觀ると、其花の香を嗅ぐのと、音樂を聞くのと、高い山に登ッて四方を眺めると、濱邊へ出て、あらい波を見るのである。でもう一ッは無邪氣な小兒と遊ぶのが好きである。田舍に居ると、草や木を植えたり、野原の草を採集したり、田傍を逍遙したり、山中を徘徊したり、時としては幼妹、及び他の兒童を相手に、大きな男が、ドン〳〵競駈をしたり、相撲をとッたりする。餘

所の人は笑うであらう、大きな男が草を採ッたり、蟲を捕えたり、子供と戯遊だりすると、予はいくら人が笑ふと平氣、予もまた浮世の慾に迷ッてる亡者共がと、笑ッて丶一向頓着しない、氣隨氣儘、ほんの自然に任してる、よく〳〵呑氣な男と見えるでせう。

予には頗る快活な幼妹がある、今年七ッ、また予の家に養はれてる世にも憐れな孤兒がある、今年八ッの男の子、で二人は餘り多くの他の小兒と遊ばないから、まだ猾くもならない、殆んど天眞爛熳。『楓葵を植えたから水くんで來い』とか『牽牛花の棚を結ふから繩を持ッて來い』とか『蟲を捕えたから毒壺を持ッて來い』とか、言ひつけると大義がらずに能く働く、勿論予が平常書を書いてやッたり、ブランコをつッてやッたり、菓子を買ッてやッたりするから、働かない譯にはいかない。それで予が田舎にさへ居れば、春の且秋の夕、或は夏の眞晝中、不相應な餓鬼大將となり、二人の小供を率ひ、或は郊外へ散歩し、或は池や河に入り、魚を捕え、或は昆蟲や植物を採集するのです。是れが即ち田舎の風景、是れが田舎の家庭、否予等の遊樂である。人は何んと思ふか知らんが、無邪氣なる予等田舎の青年幼年が、廣き野原へ出で、清き風に吹かれながら、自然物を玩んで樂むといへば、縦令や其身は低くとも、縦令や其智は淺くとも、まア美しいことといッてもよいのでしやう。

（了）

佛國結婚事情（つゞき）

土肥月巴

◉其の十六

新夫は、婚姻を周旋せる者、若しくは仲に緣女と

見合を行ひたる家の主人、新婦の兄弟姉妹、並に介副男に物を贈る。

▲註に曰く　新婦の召し具する僕婢に對しても、漏れなく手當するは勿論也。

◉其　十七

新夫の父母たり、伯父母たり、兄弟姉妹たる者は、緣女に物を贈り、祝意を表す。

▲註に曰く　勿論身分の大小に依りて、贈物の價格に輕重の差あるも、通常食具或は粧具など、日用最便の物を擇むは、自然の慣例なるが如し。

◉其の十八

緣女の母は、新郎に一箇の紀念物を贈り、同時に娘にも化粧具を與ふ。

◉其の十九

既に定規の禮物を交換せる後、不幸緣組破裂すれば、破談を持ち掛けたる者は、一切受納せる物品を返却し、又た破談を持ち込まれたる者は、依然受納品を保有す。

▲註に曰く　假令ば男子の方より破談せば、女子は婚禮籃を戻さず、又た之に反し女子の方より、破談を申込む際には、直に一切の禮物を返却す、總て如何なる場合に於ても、他動者は受品を保有するの權利あり。

◉其の二十

大喪中は婚姻を擧行せず。

▲註に曰く　半喪の期に至り結婚すれば、配偶者は、婚禮の翌日より、他の配偶者と、同期限中喪に服するを常とす。

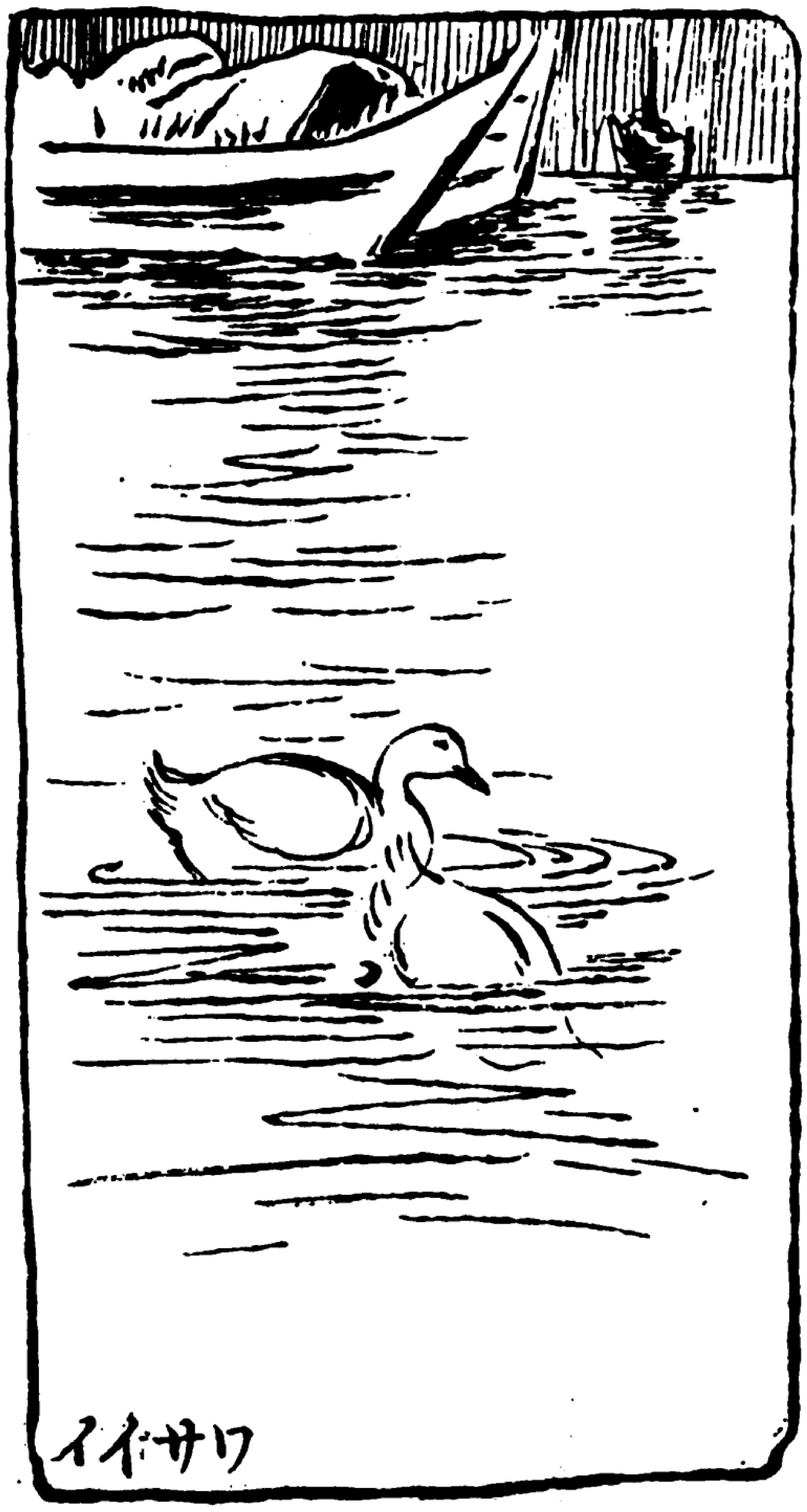
◉其の二十一

一旦婚禮の式日を定めなば、非常なる事故あるにあらざる限り、之を延期する事なし。

▲註に曰く　關係者の重立つたる者公命の爲め、遠く外に遊ばざるべからずとか、或は何れか一方に、大病、病死等ある時。

◉其の二十二　縱令ば女子の方よりして、緣組を斷はり來りたる爲め、破談となりたる場合に於ても、男子は成るべく虛心平氣に、愚痴つぽく怨恨を漏すを避け、總て緣談以前に於けると、一樣に家族に交際するを以て、肝腎なる戒めの一に加ふ。

◉其の二十三



一旦調ひたる緣談も、已む無き事故ありて、新郎の方より、破緣を申し出づる時には、新郎は自ら氣を利かして、一時其の地を立ち退くが多し、而して後日他の婦人と、再び結婚する時は、先に破談せる家に通知狀を送らず。

◉其の二十四　翻つて破談されたる女子は、姑く緣故を求めて旅行するか、或は親許の家に蟄居し、其の内又の良緣を求む。

▲註に曰く　寡婦に於ても亦た然り、但し這は年長なる近親の女子、或は尊敬すべき友達の一人を保護者とし、良緣あり婚禮を擧ぐる

までは、總て其の指揮に服從すべし。

◉其の二十五

結婚既に成立し、三々九度の祝宴を終れば、双方紹介の意味に於て、近所合壁知己朋友を會し、第二の宴を開くを例とす。

▲註に曰く○○○○昔日は彼國も矢張り我邦の如く婚禮の當日宴を張るを常とせしが、現今は少しく之を略して、大抵は條約書に署名するの日、繰り上げて之を開く事となれり、條約書とは、婚姻を通知する



前に、公證人の立てたる文案に對し、双方箇條を討議したる上、愈々異議なしと云ふ所に決定し、婚禮執行の數日前、若しくは十數日前に於て、公證人、證人、及び兩家の親族を招き、其の面前に於て、最も嚴肅の手續を踐んで、互に署名の式を交換す、我邦未だ此の事なしと雖も、兎に角婚禮結了の次日、若しくは數日後に於て、紹介の小宴を催すこと丈けは、其の意彼れ是れ一致すと云はまじ。

化學應用 夏の臺所（つゞき）

東京物理學校講師 田中伴吉

前號に於て醱酵と云ふことが略御分りに成つたらうと考へますから、愈々夏の臺所に荒れ廻る腐敗、即くさると云ふことのお話を申し述べませう。

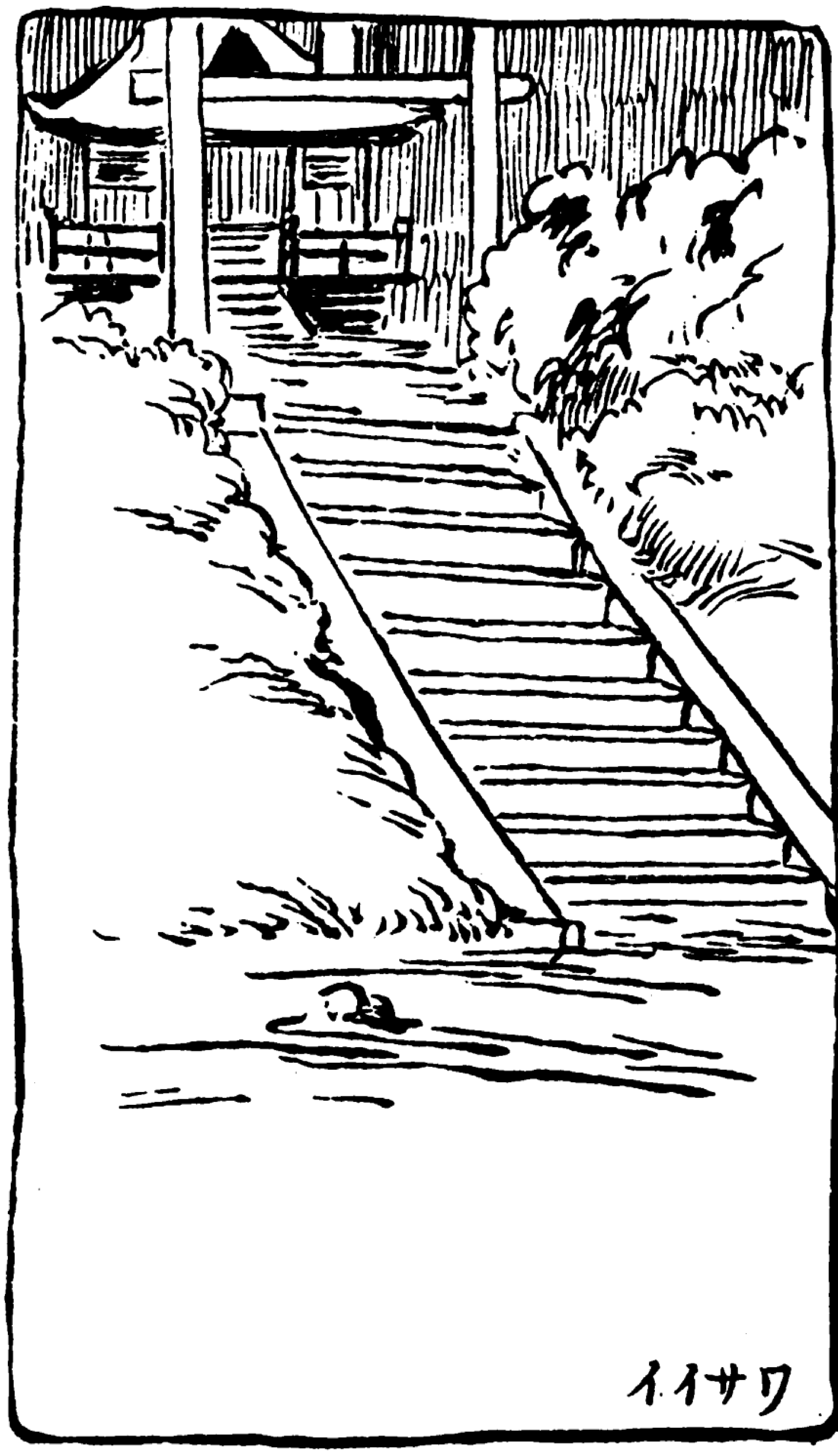
御覽なさい。おいしさうに燒き揚げた伊達卷の卵も、日中の炎天に數時間攻めつけられる時は、脆くも其味に變化を起して、先づ第一に肝心の甘味を失ひ、それからソロ／＼酸味を帶で來る。ブンと厭な香が着く。卵の體が崩れ出す。さうなると鼻持のならぬ惡臭を發で有りませう。

偖其燒卵がケ樣に崩れ出して酷い惡臭を發するのは、勿論腐敗したので有る、さうして此惡臭を發するのは、空氣中に充滿する所謂微生物が燒卵の上に押し掛けて其成分たる蛋白質に醱酵を起させたからで有る。此醱酵を起す時即分解を始めるとそれは恐ろしい毒の有るものが出來て、其上アンモニヤなど云ふ厭な臭の瓦斯を放ちます。此微生物は攝氏三四十度の溫度で、然かも濕氣の多い時には非常の速力で繁殖するもので有る。其れゆゑ夏の臺所、殊に御馳走などが腐敗し易いので有る。そこで未だ其惡臭の出ぬうちは、醱酵の範圍なので、前回も申し〻通り物が酢く成つたとて、直に腐敗とは言へませぬ。所謂鼻持のならぬと云ふ臭が出てからが、腐敗の領分なので、此兩者は善く人の間違へ易いことである。一口に申せば、惡臭が出ると出ぬとの相違で、必竟腐敗は一種の醱酵なので、其働きは全く同じでありますけれども、醱酵の働きは有益のものを生ずるが、腐敗は有害のものを生ずるので、結果の上には大層の違ひを來たすのであります。腐敗の結果は忽人

の命をも取らうとする、誠に險呑なもので有るから、吾々は常に腐敗退治に力を盡すことが大切で有ります。

腐敗退治

腐敗退治虎の巻と申すは、其生ずる原因を尋ねて此本陣に切込むと云ふのが奥の手で有ります。そこで其生ずる原因を調べて見ると三通り有るので先づ第一の原因は熱度の高いと云ふことである。之は春よりは夏の方が早く腐敗する筈で、考へても直ぐ分ることで有りませう。其れゆゑ熱さの敵藥には、雪や氷の樣なものが屈竟で、彼の至つて腐り易い魚や鳥などの肉類を圍ふに、此雪や氷で包むのは、即此理に外ならぬので有ります。



第二の原因は濕氣の多いので有る。御覽なさい同じお櫃の御飯でも移して直ぐ當り前の蓋をするのと、簀の樣な蒸氣の漏れ易い蓋をするのと何方が早く腐敗しませうか、無論蒸氣の拔け難い蓋の方が腐敗し易いので、つまり濕氣の多いからであります。彼の昆布や若菜や乾鰺や鰹節などが、何時までも腐敗せぬのは、善く此理

を應用したからであります。茲に一寸注意すべき事は、彼の桃や栗などをアルコール砂糖漬にしたり、鮭や鰤などを鹽引にしたり、菜大根を鹽漬にすると、矢張腐敗を防ぐもので有る。此アルコール、鹽砂糖などは水を吸取る性質が強いものゆゑ、言はゞ干物の濕氣を乾したと同じことになるので、亦一種の乾燥法と見て差支ありません。

第三の原因は永く空氣に觸れるからで有る。其れゆゑ牛肉や鮭の罐詰は、此空氣を取り去て、腐敗を防ぎたので有ります。ツマリ此三つの原因は彼の微生物の繁殖に都合が善い狀態で有るから、腐敗を退治するには以上の通り、微生物の繁殖をくひ止める手段を施したので、之が所謂文明の新知識、化學の原理が夏の臺所の上に應用される一端と信じます。

ケ様に論じますれば、腐敗と云ふことは、丸で有害無用のもの丶様に聞えますが、中々さう見限たもので無いのみならず、大に大切なもので、三千世界の有りとあらゆるものは、皆此お蔭



を崇らぬものが有りません。

腐敗の効能

少しく氣を注いで考へて御覧なさい。世界中の動物や植物は、毎年何位死滅するものであるか。十年百年を統計して見たらば、算盤の大先生でも、其死骸の高は容易に數へきれますまい。況して太古からのものでは、想像にも及ぶことで無いと思はれます。此夥しい動物や植物の死骸が、更に腐敗せずに、石や岩の様にゴロ〳〵して居たならば、ソレコソ仕末にをへたものでない。世界は丸で動物などのミーラで埋められるで有らうと思はれます。處が此腐敗と云ふ働きが有て、死だり朽たりする端から、サッサと腐敗し、分解して、甚だ簡單な物質に變つて、再び他の生命ある動植物の養を爲すと云ふ甘い仕掛に出來て居ります。斯く動物や、植物などが、丁度車輪の様に、グル〳〵と移り變るのは、實に生物自然の大法則で、吾々は此軌道を外れては、一日も生き永らへることが出來ません。（たはり）

蚊除草

マラリヤ熱の流行は一種の蚊が病毒を傳播するに因るは最早學説上明瞭の次第は現に臺灣などでは兵營の各室に網を張つて蚊の侵入を防ぎ印度あたりの兵營でも同様の設備をして居る、所で此程阿弗利加北ニゲリヤの英國駐在官ラリモーアといふ人は蚊除草（オシマム、ヴヰリデ）といふものを本國に持て歸つた、此草の葉は誠に好い香がするが奇妙にも蚊に大毒のもので若しこれを二三個の植木鉢にでも植ゑ風上に置けば蚊は一匹も室内に這入つて來ぬといふことである現にラリモーア氏がマラリヤ病を傳播さする一匹の蚊を捕へて此植物

の葉の中に二分間包つんで置いたら直ちに知覺を失つたといふて居るニゲリヤの土人は大人でも小供でもマラリヤに襲はれた時は直に此葉の絞り汁を身體に注入するが事實キニーネよりも效能が多いそうである、これに似た話は印度にもある、土人の中には遠い昔より紫蘇(バジル)を束ねて置けば蚊を除るといふて居るが同地の紫蘇には多くの種類があつて一寸其例を示せば野生ツルシ、白ツルシ、黒ツルシ、ラムツルシ、クリシヤナツルシ等であるそして此草は印度の到る所殊に殿堂の附近や花園などに生へて居て印度支那にては別して墓上に植てあるのが多い、此莖葉の煎汁は之も大變にマラリヤ藥として効驗が著しい、其中右の終りに記したクリシユナツルシに就ては一つの譚がある印度では此草を其國の守護神たるヴキシユム(日の神)のために神聖のものとしてある、それで印度人はこのツルシを美くしいツルシと呼んで居る何故そうかといへば固と此ツルシはまことに嬋妍佳麗の少女であつたのでヴキシユムの妻ラシユミ(福の神)がこれを妬んで遂に草と化せしめて仕舞つた、故にヴキシユムも致し方なくせめては此草を莊嚴の儀式の時には自分に捧げて呉れといふたからだそうな、兎に角オシマム、ヴキリデといひツルシと云ひ若し我國の風土に生長するものであつたなら繁殖して蚊遣り火などは全廢し淸風に臥して蚊に襲はれぬとになれば頗る妙であらう。

おみやげ料理

女子美術學校
講師　石井湧太郎

愈々夏季休暇も目前に迫りて最早數日を餘すのみなれば定めし諸孃も思々の豫想に驅られて種々の

考へを持たるゝ事ならんと思へば余輩も倶に何となく心勇ましく思はれて種々な考へも起るのである、中には夏季休暇を幸ひに日頃望まるゝ學科を講習さるゝ方もあらん、又は庭園の涼しき緑蔭に在つて二三の親しき友を集め樂しく一日を復習に過す方もあらんか、或は睦まじき家族を擧げて塵埃少なき海濱に遊ばるゝ方もあらん、中にも多きは遙々古郷に歸りて戀しき兩親や、愛らしき兄妹に面會して、修めたる學業の物語りなどして其の成蹟を誇らるゝもあらんと思へば、こゝに容易き料理法を二三種載せて御土産の印までに差上ることゝする。

▲牛肉どら燒の拵方

原料　牛肉ロース　半斤
つくいも　小壹個
葛粉　五勺
砂糖　十二匁
食鹽　六匁
胡麻油　少量

先づ牛肉を半斤俎の上に取りて、薄く切り之れを出刃庖丁の脊の方を持ちて充分にたゝき、擂り鉢に入れて能くすり、次に葛粉を平面き皿に入れ茶呑茶わんの外部を持ちて可成よく壓し潰し少しも凝固りなき樣になし少しづゝ右の牛肉の中に加へながら擂木を以てすりませ、之れを終りたる時つくいもの皮を去り、鷄卵の二倍大程の容量を卸器を以て卸し込み、尚充分に擂りて肉と芋、葛粉の三種全く混同たる時、食鹽、砂糖を加へ調味すべし、扨て燒鍋に胡麻の油を少しく塗付け少しく熱したる後ち、箸の先きにて、右の混せたる肉を團子程の大さに卷き取り、鍋にて平圓形に燒くべし、尤も之れを燒くには一方を少しく燒きたる

時裏返し、鍋の匙の如きものにて、圓形に押し付けるものとす、此の如くして兩面少しく焦る位を適度となすべし。

▲揚げもの菓子の拵方

原料　メリケン粉　三合五勺
　砂糖　三十匁
　胡麻油　一合

初め粉三合を丼にわけ、此の中に砂糖三十匁を加へ、兩手を以て能く攪き交ぜて後ち、水少量を注入て、追々こねながら水を加へ（水を加ふに注意すべし、餘り水氣の多からぬをよしとす、又少なきも惡しく、ねばりて手に付かぬ程をよしとす）之れを細く小指程の紐の如く捻りて種々なる形ちを作り、油を沸したる鍋の中に入れ狐色になるまで揚ぐべし、而して之れを洋紙の上に取りて後ち菓子皿に盛るべし。

▲夏季　茶事懐石料理

献立

向　白あへ　あじ　ずいき　はじき豆

汁　すまし

役味　しそ　たで　おろし

蓮めし

燒物　鮎　黄味やき

椀盛　豆腐　里いも　胡せう

肴　うに燒　しそ穗　はぜ

吸物　しらす干

湯

香もの　胡瓜　かくや

菓子　麥らくがん

（をはり）

雜録

太宰府參詣記

（東海道の續）

高瀬羽皐

五日曇窓の戸をし明て見れば金華山も稻葉山も白雲早立覆ひて秋風すゞし、新澤庵云く大阪へ直行して博覽會見物を急ぐも餘りに俗な話也、斯く風流男の打揃ふたる以上は旅らしい旅をすべし前途を急ぐ可らず、今日はゆる／＼起て近江の石山寺に參詣し瀬田の螢を見るは如何と云ふ、是れ尤も然るべき立案なり、拙者は猶修正を加へたし、今朝稻葉山の古城を見て、長良の川を見物いたし、齋藤道三が隱棲の古跡即ち崇福寺にいたり、信長公の首塚を參拜して、其より汽車にて彥根にいたり、樂々園を見物して、石山一泊とすべしと言ば、新澤庵ハタ／＼と拍手して、大賛成と叫ぶ、女中召ましたかと面を出せば拔らず、御膳を早く／＼と早速の機轉、今朝の献立

（汁）三州味噌にごぼう　（向）玉子の半熟

（皿）淺草のり　（椀）鯛切身ゆば

仕度を仕舞荷物ども帳場に預け、人力車命じて稻葉山へ赴く、市中の樣昨夜見たるは本町にあらず、東の方に本町通りあり、靜岡位の町並にて富有なる商家も少なからず、城の大手口有名なる百曲り口と云より少し登る。千疊敷の跡と云あり、帶曲輪の跡なるべし、この城は金華山と云ふ山の頂上

にあり、稲葉山は其うしろの山にて時鳥の名所なり、歌枕にもなりたる處也、其より長良川にいたる隅田川より少し小さき山川にて、是より西北の方一里ゆけば、有名なる合渡の船也、川の向ふに長良の堤あり、堤の上を四五丁ゆけば竹林あり、古松老杉立複ひたる森の中に崇福寺の山門見ゆ、極て幽棲なる境内にて本堂、方丈ともに古き建物也、本堂の廣椽の天井を血天井と云ふ、血跡あり昔し岐阜落城(天正五年九月)の時こゝにて自殺せし人多し、其床板を改造の時、天井板に用ひしなりと、寺の小僧は申すなり、この寺は齊藤山城守道三入道隠居の地なりしを、沒後寺とせしものと云ふ、堂後楓林の内に信長公の首塚あり、寺傳には本能寺の變の當時、侍女お鍋と云ふ者公の御首を取隠しこゝへ携へ來りて埋葬せしなり、お鍋の長刀とて寺の什物中にありと云ふ、御墓を拜して

苔の下にかくて在とも天か下
　君がいさほは朽せざりけり

新澤庵僕はお鍋さんへとて

　實も覆もチャンとそろふて其上に
　底にぬかりのないお鍋どの

芝居なら白裝束に白柄の長刀かいこんで大ドロドロで顯れる處、何と申ても僕の名歌に感じて、只だは居られぬ筈と新澤庵大きに鼻を高くす、併し其れほどの歌でもなし、さて停車場へ行んとする折しも村雨ハラ〳〵と落しきたる、車の母衣小さくして、新澤庵の帽子つかへて窮屈なればまた母衣を外して、

　この旅は傘もとりあへず稲葉山
　ぬるもぬれずも雨のまに〳〵

と歌ふ雨程なくやむ、是も僕の歌で天地感動せしなりと大自慢なり、十時に滊車にのる、壯士役者

の田舍廻りする者三四人いやらしい裝をして乘こむ、乘合の女みな〳〵頻りに役者に氣をとられたる樣子見苦しさ言んかたなし、彥根にて下車して樂々園へ至りしは二時なりけん、抑もこの處は昔井伊家の別業にて林泉、亭舍大かたは昔の儘にて存じ、殊に小書院の構造は家屋設計家の模範とすべきものなり、大書院は普通の拵へ也、中二階の書齋三疊敷湖水を見晴して尤もよし、庭は形式の山水なれど、今は水なく小石を敷て枯山水の體なり、こゝにて晝飯をたべる

（向）　鯉の造り身　　（椀）　鯉の濃汁

（皿）　ひかいたです

新澤庵云く鯉を二樣に使ふとは甚だ妙ならず「ひかい」の麫酢はよろし、造り身尤も佳也、女中甚だ卑陋會席の給仕には適任にあらすなと云小言は言ながら、酒のみ飯くひてこゝを出で、城を見物するやと問ば見合せる方よからん、石山へ急ぐべしとて、再び滊車に乘る、

　かくろひし鏡の山も見えそめて
　　白雲晴るゝ五月雨の空

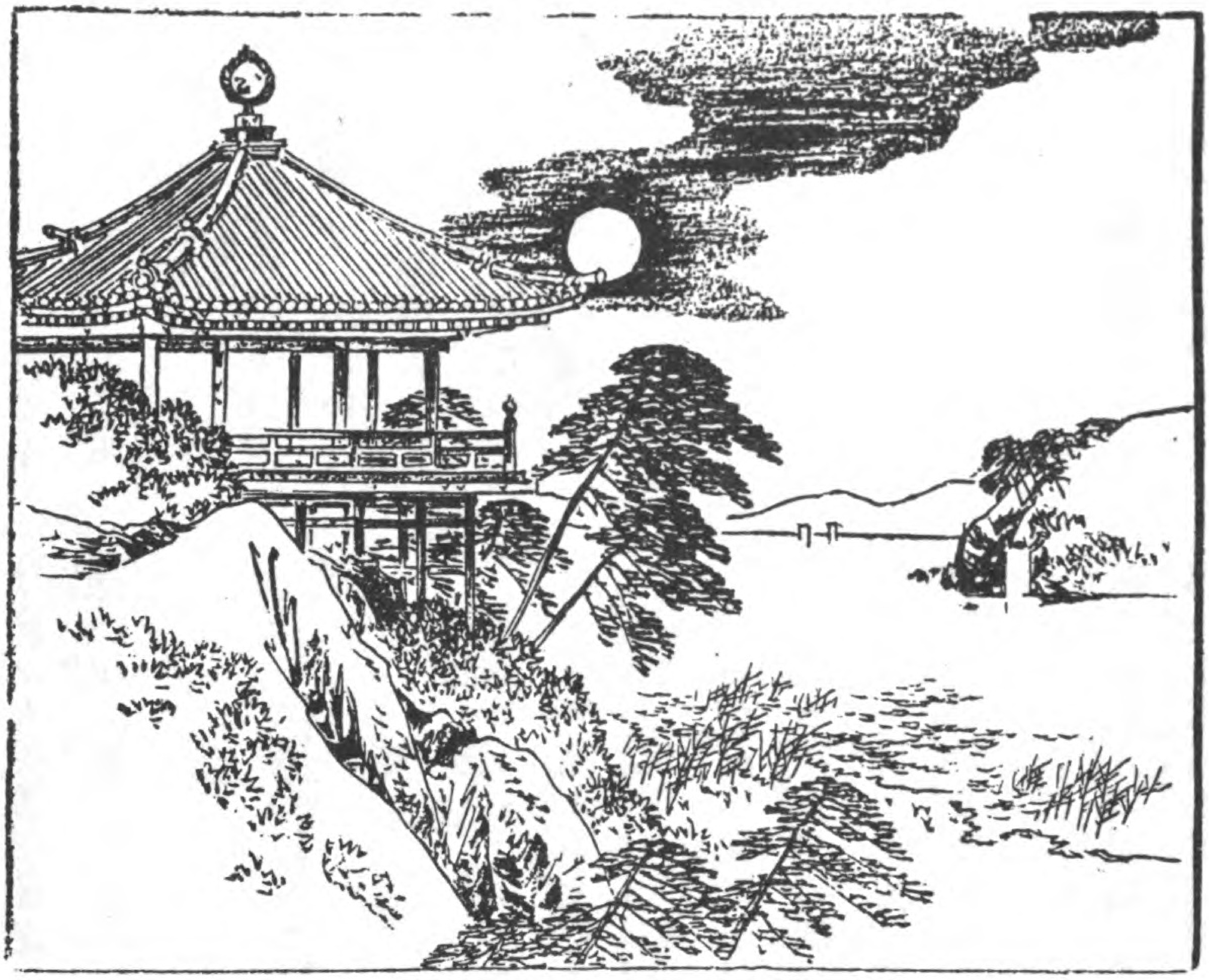
また

　さみだれの晴間やまちし早苗とる
　　菅の小笠の數ぞまされる

かゝる腰折も旅路にては一興也。

安土山は八幡の停車場の先にあり、石垣見ゆる也、さて草津にいたる、石山も程近し、新澤庵云く慶長以前の書には草津と云地名なく、いかに槻の屋どのと問ふ、答て云ふ草津は昔の野路の里なり、平家物語に野路篠原に陣をとるとあり、宗久紀行に野路のさといまは草津と呼ぶ由、記せしものありと覺えたり、また長嘯子の記にもありし樣なり其他は知らず、それで分つたり、先づ力餅買て喰

べしとて餅たべる、砂糖わろければ味わろし、石山停車場近ごろ出來たり、こゝより十四五丁なり、先づ瀬田の唐橋を見物すべしとて荷物を車夫に托し、橋を見る、この橋の擬寶子の中に、形の至極宜敷がありと、利久が話したるときに堀遠劦即座に馬を飛して見に來たりしと云話あり、どれがどうやら少も分らず、さて山の下を十二三町ゆけば、瀬田川の岸に旅店軒をつらね、聲々に旅人を



呼立る、柳屋と云が川に臨みて景色よければ、その家に至り、樓上へ登る、遙に瀬田の橋も見え、美濃路の山々も幽かに見渡されてよし、入浴のゝち手紙かきて東京へ送る、今日の御馳走は兩人とも至極氣に入りたり。

（汁）瀬田蜆

（向）源五郎鮒つくり身

（椀）鯉のこく汁

（盒物）瀬田鰻のかば燒

（皿）鷄肉ごぼう

（小皿）小倉あん

最初小皿に小倉あんを出

す、これ何の爲なるかを知す、新澤庵云ふ吾々を甘い人間と見下したるならん、イヤ是は土地の風なるべし、イヤ然らずと爭ふ處へ女中來る、之を問ば酒の肴に出す習ひなりと云ふ、大坂ではカキ餅たべながら酒を飲む、一擧兩得なり、小倉わんなめ〳〵酒のめば、上戶下戶に通じて德用なる故ならんと笑ふ、六日の朝石山寺へ參詣す、この寺の本堂より月は見えぬ處なり、山の端に月見堂と云ふあり紫式部の源氏の間と云を見て、新澤庵これは後世の構造なり、恐くは慶長時代のものならん、この本堂の內部は、千年以上の古物なれど外廻りより外陣は三百年內外の時代なりと新澤庵は鑑定せり、後に聞ば內陣は聖武帝時代、前通り一部は賴朝の普請、其外部は豐臣秀賴なりと云ふ源氏の間も無論秀賴の寄進なるべし、參詣相すみて境內を見物し、さて歸りて停車場へいたる、今日は愈々大阪着の豫定なり、明日は滯在、明後日中國へ出立せんとす。

（つゞく）

ゼローム女史の日本觀

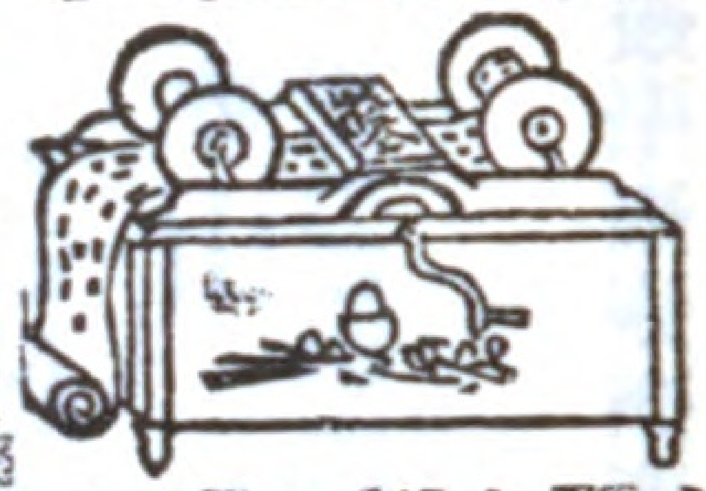
記者

濠州シドニー府のツルース新聞通信者たるヘレン、ゼローム女史は博覽會の情況並に吾邦の近狀、風俗等を取調べんとて過般來神戶に滯留せるが左に記せるは同地の社友某が女史を訪問したる際女史の談話したるものに係る

神戶の一斑を觀て、日本の全般を評せんとするは、少しく早計ではありますが、まだ廣く日本を見ないのでありますから、どうぞ御許し下さい。今日西洋文明人の眼は、やゝ穿鑿的の有樣で、日本の事物を觀察して、その發達を待つて居る姿であり

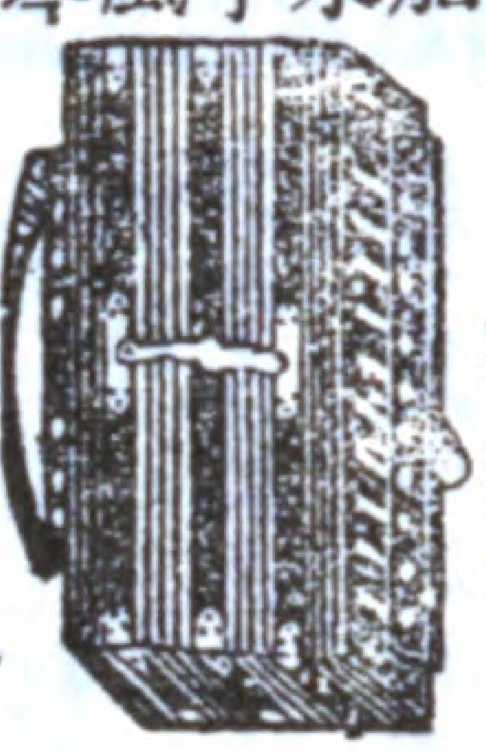
御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

無師獨奏 紙腔琴



大形上製 正價金拾五圓
大形中製 正價金九圓七拾五錢
小形上製 正價金五圓
●右何れも譜箋五卷附屬
●外譜箋數百種あり●

舶來手風琴



正價 三圓 三圓廿錢 四圓 四圓五拾錢 五圓 六圓五拾錢 七圓五拾錢 八圓 拾圓 外各種

舶來 蓄音器



拾八圓 廿五圓 四拾五圓 六拾五圓 八拾五圓 百圓 貳百五拾圓 五百圓
蠟管 淸元端歌長歌樂隊
義太夫流行俗曲種々
●無地大小蠟管あり●

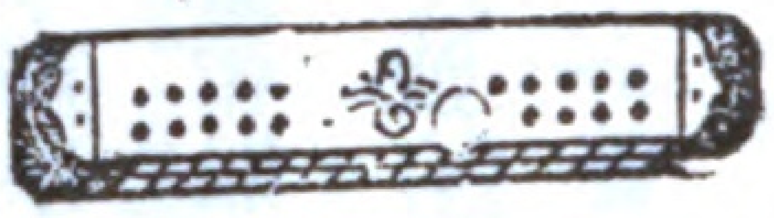
銀笛





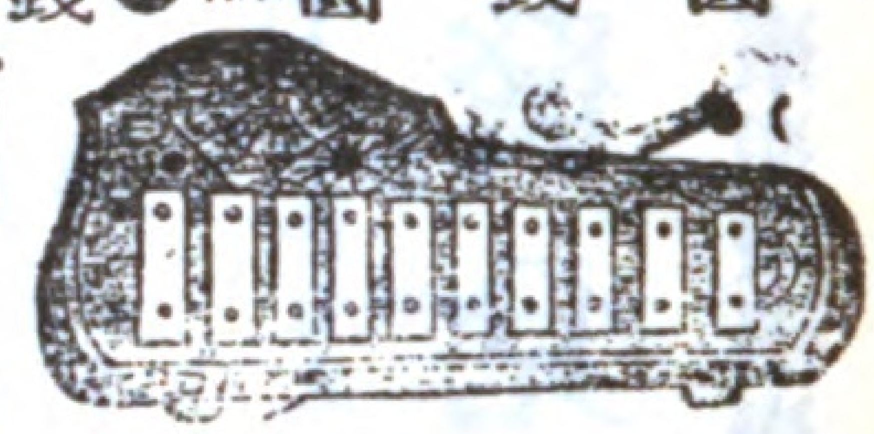
三拾五錢 七拾錢 八拾錢 九拾錢 壹圓
壹圓廿錢 壹圓卅錢 壹圓五拾錢 貳圓
音律正確
保險附き

西洋橫笛（ハモニカ）



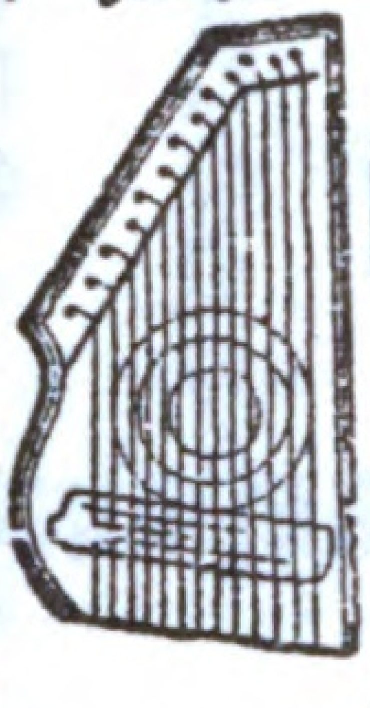
正價 四拾錢 五拾錢 七拾錢 八拾錢 壹圓 壹圓廿錢 壹圓五拾錢 貳圓 貳圓五拾錢 大小種々●

鐵心琴



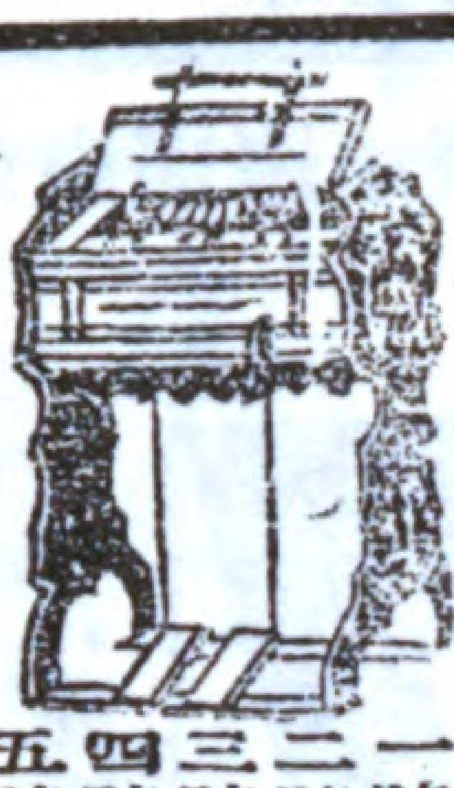
並製十音 正價金五拾五錢
中製十音 正價金七拾五錢
中製十三音 正價金壹圓
●右案內書付●

陽琴



●壹圓七拾錢 ◎貳圓七拾錢 ◎四圓五拾錢
黑塗外箱貳圓

●西川製風琴特約販賣



一號拾八圓 六號三拾七圓 十一號七拾五圓
二號貳拾圓 七號四拾三圓 十二號八拾五圓
三號貳拾七圓 八號四拾八圓 十三號百圓
四號三拾三圓 九號五拾五圓 十四號百貳拾圓
五號三拾七圓 十號六拾五圓 十五號百五拾圓

舶來ピアノ 三百五拾圓ヨリ

●高等師範學校 東京音樂學校 田村虎藏編

國民教育 新撰唱歌

全一冊 正價金三拾五錢 郵稅金四錢

見よ編者は我國兒童唱歌の改善に名ある田村先生其教材は修身的歷史的にして性情の陶冶に資すべきもの其程度は尋常三學年より高等科及中學に亘り收むる所の歌曲三十種悉く先生が東京高等師範學校附屬小學校兒童に實驗せる者なれば敎育的空前の良書なり

◎少年唱歌

初編 二編 高等科用 正價金拾錢 郵稅金貳錢宛

● 敎科適用 幼年唱歌 全十冊 一冊金拾錢 郵稅貳錢
● 新編 中學唱歌集 上中下 近刻 各金三拾錢 郵稅六錢
● 日本遊戲唱歌 全六冊 一冊拾五錢 郵稅貳錢
● 學校唱歌 全二冊 一冊拾五錢 郵稅貳錢
● 大捷軍歌 全七冊 一冊金四錢 郵稅貳錢
● 手風琴獨學び 全二冊 一冊廿五錢 郵稅四錢
● 橫笛獨學び 全一冊 金貳拾錢 郵稅四錢

◎洋琴ヴァイオリン軍樂器音樂書類販賣店

東京銀座三丁目貳番地 十字屋
電話新橋千二百五十九番

株式會社 國光社發賣書目

◎塚原澁柿園著 **山崎合戰**
菊判洋裝美本 定價卅九錢 郵稅六錢

◎堀内新泉著 **女樂師**
菊判洋裝 定價卅五錢 郵稅六錢

◎塚原澁柿園著 **小牧合戰**
菊判洋裝 定價五十五錢 郵稅十錢

◎紅塵庵俗禪譯 **獄之花**
總クロース美本 定價五十五錢 郵稅八錢

◎堀内新泉著 **少女讀本** 雪月花
各卷 菊判洋裝 定價十八錢 郵稅四錢

◎山崎忠和著 **文久物語**
菊判洋裝 定價廿八錢 郵稅六錢

◎高瀨魁介編纂 澁澤男爵 **最近實業談**（新刊）
上製七十錢 並製六十錢 郵稅十錢

◎石田鐵郎著 **水產製造論**（新刊）
總クロース美本 定價一圓二十錢 郵稅十錢

◎北海道拓殖課 **北海道殖民圖解**
菊判洋裝 定價八錢 郵稅四錢

◎中村佐平著 **銀行簿記學**
菊判クロース金字入美本 定價五十錢 郵稅六錢

◎須田每六著 **銀行利用法**
菊判洋裝美本 定價四十五錢 郵稅六錢

◎品川彌三郎、平田東助共著 **信用組合提要**
菊判洋裝 定價五錢 郵稅二錢

◎平田東助著 **商工經濟論**（全二冊）
總クロース美本 定價一圓八十錢 郵稅十五錢

◎濱口吉右衞門著 **財政と國力**
菊判洋裝 定價廿三錢 郵稅四錢

◎岡勇二郎著 **日本米穀の將來**
菊判洋裝 定價卅錢 郵稅六錢

◎**國際貿易論**
總クロース美本 定價六十錢 郵稅八錢



ます。日本人の歐洲化するのを見て、日本は歐洲のワイシャツ的高慢をまねて、その固有の繪のやうな美風を損じたと申す人もありますが、私は今回神戸に參りまして、始て日本人の風俗を見て、祖先傳來の着物や、風雅な履物などによりて、あらはされて居る日本固有の氣風が、次第に埋沒されつゝあるのを目擊して、實に感慨に堪へません。袖のある



着物を着て、木製の履物を穿き、さうして頭に歐洲の帽子を戴くなどは、不格好千萬で、感服の出來ない話であります。私の國(濠州を指す)では、進步の前途に橫はる凡ての障害物は、一切排除するばかりでなく、一方には摸倣の力によりて、今日の形勢に達したものであります。それ故他邦の文明に摸倣しやうと思ふならば、斷然たる決心でもつて、あらゆる舊物を排除してしまは

ねばなりませぬ。自國固有の舊慣を維持することも出來ず。又た他國の長所に倣うて、吾が弊風を棄てることも出來ない樣では、半信半疑の摸倣であつて、ツマリ充分の進歩は難からうと私は考へます。

日本人は本來優美であつて、また美術的に出來て居りますから、自然に高尚なる品位が備つて居りますが、若し和製の球を以て、英國の角穴に投げ込まうとするならば、恐らく失敗するであらうと考へます。此間私は某日本婦人に向つて、あなたは英國人を如何に御覽になりますかと問ひました。その御人は答へて、英人は日本人よりも遙かに智識が優れて居ると申されましたから、私はその御婦人に向ひ、日本人は英人よりも安らかである、幸福なる日本人といふ語さへありますからといふたことがあります。私はその安らかである爲めに日本を愛します、優雅なる國民、雛人形のやうな短小なる婦人、櫻の花を挿みたる花瓶、美美しい着物、臙脂を着けたる下唇は、日本婦人の滿足するところのものであつて、歐洲婦人のやうに齷齪として居ないのが分ります。日本婦人は自然の小兒であつて、その行爲も丁度コルセトを施さない腰部と同樣、自然のまゝであつて、何等の抑制をも受けて居ませぬ。世の中で自然ほど純粹なものはありませぬ。

暑中と新聞紙

（暑中に關する都下諸新聞の趣味ありて且心得となるべき記事を摘錄す）

化粧と衛生

▲入浴の注意　入湯するにも時間を選ばなければ

ならぬ殊に御婦人などは猶更の事だが滿腹の時と空腹の時は決して入浴してはなりません滿腹の時には胸が悪くなるし空腹の時には眩暈がして孰れにせよ湯氣に上る事がある之れは血行の變化であるが旅宿へ着いた時など「一風呂召して御飯を」一杯と女中から勸められたら其時ビスケット三ツか四ツ食つて夫れから入浴なさい夏は猶更の事爾うすれば湯氣に上る憂ない。

▲結髪の衛生　次に結髪の衛生法を咄して置かう一體御婦人の髪毛は日本人としては房々して漆の如く黒いのを賞美するが夫には髪毛の養生を仕なければならぬ養生すれば即ち發育が宜くなるが夫には油を付けるのが尤も適當である然るに近來束髪が流行して油も付けずに束ねて置く夫だから自然と髪が縮れて赤くなるが返つて夫れを西洋風だなど丶喜んで居るのは心得違ひではあるまいか自分の髪毛の枯死するも知らずに日本人の特質なる黒い房々した艶の髪毛を嘲るのは即ち迷心で一も二もなく西洋に氣觸れた嘆はしい女だと思ひます油は成可く梳油を用ひ油垢は清潔な油で梳取るが宜しい雲脂を落すには癖直しの金盥へ熱い湯を注ぎ盃に一杯程の酒精を入れ癖直しの布を夫れへ浸して頭をピタ〳〵打き髪毛を揉めば毛穴の掃除が清潔に出來て逆上る事もなく雲脂も奇麗に落ちる。

▲海水浴　海水浴の心得は孰れも御存じでおらうが何うも兎角興に乘じて長時間海水に浴する弊があつて困る夫れは反つて身躰に害を及ぼすので折角海水浴へ養生に往つて身躰を傷して歸る御婦人方を往々見受けます之れは第一に注意すべき事で海水に入ることは十五分乃至二十分夫れ以上は決して宜しくない朝は九時から十時迄午後は三時

半頃より五時迄の間に浴水するやうにし朝夕の二回に限り日中は必ず靜養するが宜しい又朝早く起き海濱を運動し新しき空氣を呼吸するのは海水に浴するより衛生上特効のある故之れは勉めて實行するやうに仕たい其他リヨーマチス病子宮病胃病等の持病あるもの小兒老人などは海水冷浴より寧ろ靜に海水温浴を執り朝の運動怠らぬのが肝心である。

▲手の曳き方　不圖胸に浮んだから咄して置が大人が小兒の手を曳て歩く之れは頗る危險な事だ小兒の手首や腕の關節は至つて外れ易いもの夫れを大人が小兒の手を上へ釣上げて曳いて歩いて萬一小兒が物に驚くとか躓くとかした塲合に轉だら其拍子に手首か腕の關節の外れる事が多い一度外れると夫れが習慣になつて稍ともすると外れたがり終には充分に治療の屆かぬ爲め思ひも寄らぬ不具にする事が往々ある依つて其危險を避けるには小兒の着物の袖と手首を一緒に握つて手を曳いて歩けばヨシ小兒が轉んでも着物の袖に支へられ袖がむしれねば手首の外るような事はない一寸した事だが第一に母親が注意せねばならぬ事です。

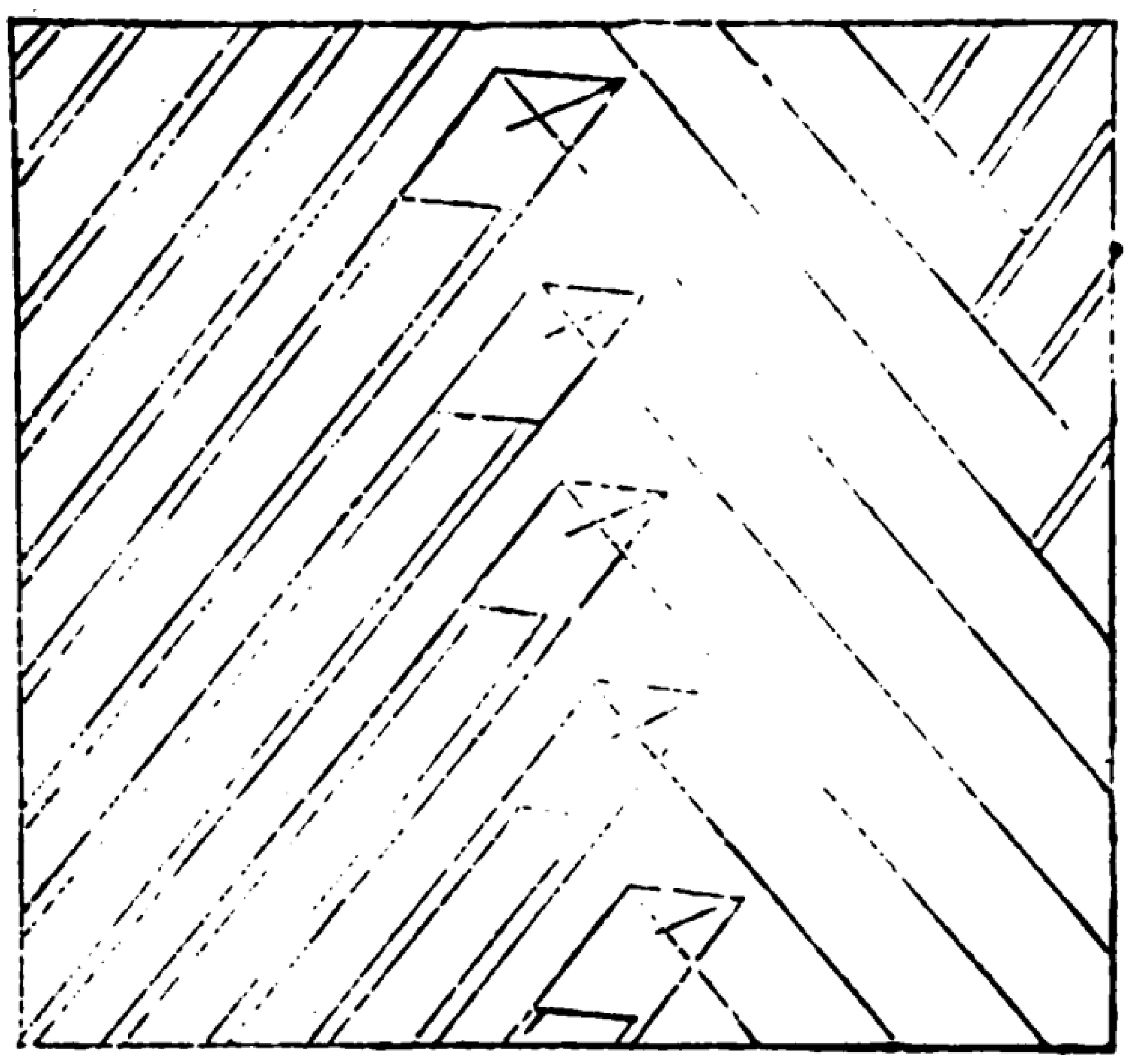
（報知新聞足立平醫監談）

歸鄉女學生と家庭

此のころ某銀行重役の妻女に會ひましたが其の人は『今年も子供等の爲に海濱に行ふと思ふて居ますが下婢は十二になる小間使一名丈しか連れて行きません、家の大抵のことは娘(高等女學校生徒)にさせる積で御座います、それから丁度私の知つて居る看護婦も近處に居りますからこの二た月許は娘に看護法を此人から習はせる樣にしてあります』と申されましたが中々思慮深い人であると感

服して歸りましたどうか母たる人々は此夫人の樣な考へを凡て有していたゝきたい、それから親たる人々の注意すべきは娘の

▲入學せる學校　に依て夏期中の注意も多少違はねばならぬと云ふことです、併し凡てが左樣だとは斷言されぬ又其娘の性質にも關係しますが、一般よりする時は官公立の學校に入つて居るものは日常規則づめにやられ機械的に養成せられて居りますから歸鄕すると其日常と正反對の動作に出ることが多い樣です恰も籠の鳥が廣野に放された樣に、それから私立學校殊にミッションスクール中にも老嬢なる外國敎師の勢力ある學校に居つたものは一般に氣位が高く封建時代の親は事によると俗の所謂へコませらるゝ事はないと限ません、こゝらが親の注意を最も要する所で親はどこ迄も親たる權利を有し決してあまやかしたり『もうもう娘にはかないませぬ』などゝ弱音を出してはなりませぬ、否な底意では自分の娘の學者になつたことをそれとなく他に披露する樣な口吻があつてはなりませぬ、次に

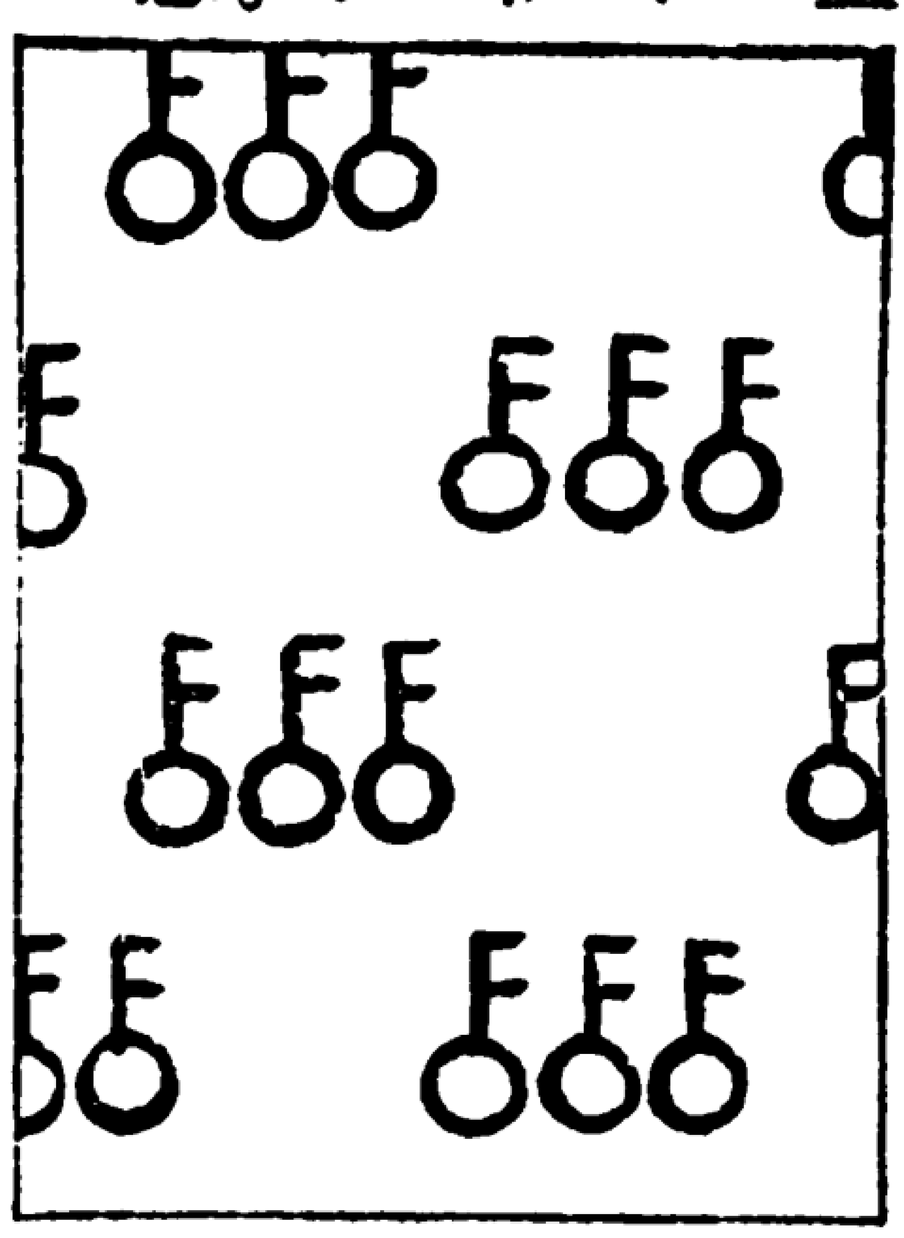


いかのぼりがすり

▲日課及讀み物　に就て一二の注意を申そう、云ふ迄もなく一日朝のうち一時間なり二時間なり必ず嚴格に規則正しく復習なり新知識なり得させる樣に仕向けることです『暫くでの歸鄕ではあるし娘もさぞ疲勞して居るだらふからまあ〱一週間位はゆつくり休まして遊ばしてから』と申さる方もあります、これは親心として無理はありませんがどうかすると此のまゝ御流

になつてしまふことがあります、ですから娘には誠に氣の毒に思はるゝこともありませうが旅の疲まだ全く脱し去らぬ折より實行せしめたいのです、兎に角始めが大切です、それから休暇中は學科の書物などはあまり好まず雜誌とか小説などを讀みたがる樣ですが是等も決して全く惡いとは申ませんが知見を廣むるに於て又人情を知るに於て必要でもありませうが、其書籍の選擇に充分の注意を拂はんと世事に疎い彼等は思はぬ危險に陷ることがあります兎に角親々は、彼等は未だ理想的(寧ろ空想か)の人である世態人情の眞想を知らないものであると云ふことを深く〳〵心にとめられたいものです。

(每日新聞)



かぎ桐

女學校卒業生と婚姻問題

數ある女學校に於て本年も亦た多きは百少きは五六名の卒業生を出さゞるはありませむ、而して彼等は『卒業せばかくせん』『社會に出でなばかゝることをせん』と在校中に於て心中に畫きし種々の計畫は今や成る時に至れるを喜ぶ、併し他に對しては立派に之を語れども其心の奧底には十中の八九迄は

▲結婚問題

の横はれるは事實なり、而して父母も亦た愛女の卒業間近くなるや頻りに此問題に就て心勞致します、今は恰ど其秋で御座いますから一二父母たるもの丶注意を申ませう、さて彼等はこれ迄學校又は寄宿舍の小天地にのみ生息し社

會の有様は如何實際の家庭計營は如何と云ふことは殆ど知らず唯々空想のみ其腦裏を縱横いたします記者芝公園に散歩し圓山の頂きの共同ベンチに休み小冊子を讀みつゝありしにその近き邊に二人の女學生が居りまして卒業後のことゞもを語合ふて居つた樣です、其物語は斷續としてよく〳〵聞えませんでしたが中に

あんなに小姑の多い家は御免よ、一生あくせくしなければなりませんもの……あれは高等學校丈ではありませんか得業生……あれじや……學士の肩書がないのね

などそう云ふ言葉もありまた黒塗の馬車とか教授とか實業家などのことを折々耳にしましたが此數語の中にも彼等は如何なる空想を抱けるかを知らるゝでは御座ひませんか、恁樣な思想は假かに彼等の多くの心を支配せりと見て差閊なからふこゝ等が父母たるものゝ第一に注意せざるべからざる所です、一つ卒業せる娘に對する父母の心得を申さんそは外ならず、少くも

▲卒業後一ヶ年　位は結婚問題の如きたゞ父母の意中に留めるのみで娘には出來得る丈家政のことを托し多年の勉强を實地に出來る丈多く實習せしむることです、而して後に徐ろに結婚問題に及ばなくてはなりません、親たる者の情として一日も早く片付たく又婚期を誤らせたくないでせうがあまゝあせりますと却て將來少からざる不幸を招きます、親たる方々願くは近來『女學生上り』てふ世の冷評に鑑み、又積年の苦學を用ふる所なくして終はらしめざる様注意せられたいもので御座います。

（每日新聞）

避暑の栞

僕の專門は氣候や空氣を利用する事の極少ない方で、腫出したり腐つたりした處を截取つて治療するだけの事だから、強て云へば此手術を施した者の經過を速にする爲めに、海濱でも山でも其人に依つて勸めるのであるが、之れは其患者に限つた事であるから廣く世間に知らせる程の事もない、こんな譯で氣候や空氣を利用して病氣を治療するのでないから、專門の側から云へば先づお話しは無いのである。

一般の衞生から云へば夏は誰も身體の新陳代謝が少ないので其れだけ一體に鈍くなつて居る、だから、遠く塵埃の市街を去つた閑靜な山にでも行けば、空氣も好し涼しくもあるから、身體の新陳代謝を促して食慾杯も進んで來るので、無論惡かろう筈はない、其れなら誰れでも山へ行くが好いかと云へば、其れは其人々の體質に依つての事だから、一概に山が好いと云ふ譯にも行かないが、先づ大別して體格の堅固した方の人は山で、虚弱な人は海濱の方が好い樣である。

山には溫泉がないと人が餘り行かないが、溫泉も隨分處に依り病氣に依つては効能のある處もあるが、強ちに湯がなくてはならぬと云ふ事は決してない、湯も熱い湯杯に入つては宜くないから、極微溫くして度數も少し入ると云ふ樣にしなくてはならない。海でもさうで、餘り度々入つては宜くないのであるのに、近頃の湯治場や海水浴に行つて見ると、餘計入る程宜い樣な考へを持つて居る者が多いのは實に困る。

山が好いとしても東京杯は適當な山が近所にないから一寸困る、山と云ふと雨が多い、伊香保も日

光も箱根も悉皆雨の多い處で、斷へず濕氣を含んで居るから大して褒められない、高く涼しくて空氣の乾いた處は輕井澤位ゐで、餘り多く開て居ない。

兎に角日本には氣候や空氣の良否を專門に調べて居る醫師が居ないから、誰れも彼れも自分の思ふ事許り云つて、眞個に何處が好いと云ふ事は分らないので困る。早く斯う云ふ事を專門に調べる學者が出て呉れると好い。云々。

（讀賣新聞佐藤醫學博士談）

室内の避暑術

心燈を滅却すれば火も亦た涼しと是れは天正の昔甲州慧林寺の老禪納が樓門の上で焚け死の時の遺偈だが是程涼しい心になれば三伏の熱はなんでもない。

扨て本年も三伏の熱になれば心機の確かならぬ俗社界では衣も體を庇ふ能はずして赤條條黑澄潑の狀態を演じやれ氷塊を額に當て後ろ鉢卷煤掃の手傳然たるあり午睡に疊の目を片頰に印して欠伸に永日を暮し兼ねる不覺悟の徒輩も尠なからぬ上方者は甚兵衛の短褐で腰卷をして街衢を歩るく暫らくはマレー人種の本色を現している。

箇樣の時候に少し贅澤な奴は海濱の避暑地や溫泉塲やへ這入つて紅粉園中に鬪牌の嬉戯をする失ふ處が多くつて得る處がない不性の金招牌を掲げて貴重の光陰を消費しているは氣の毒だ。

如何にすれば室内の避暑術があるか消夏の方があるか室内でなく室外ならば誰でも云ふ海上旅行北米の沿岸へ往きても濠洲へ往きてもよろしい是は財嚢の瘦肥次第であるから別問題として當然にアームチアヤ一脚に書籍が四五冊あればなんでもな

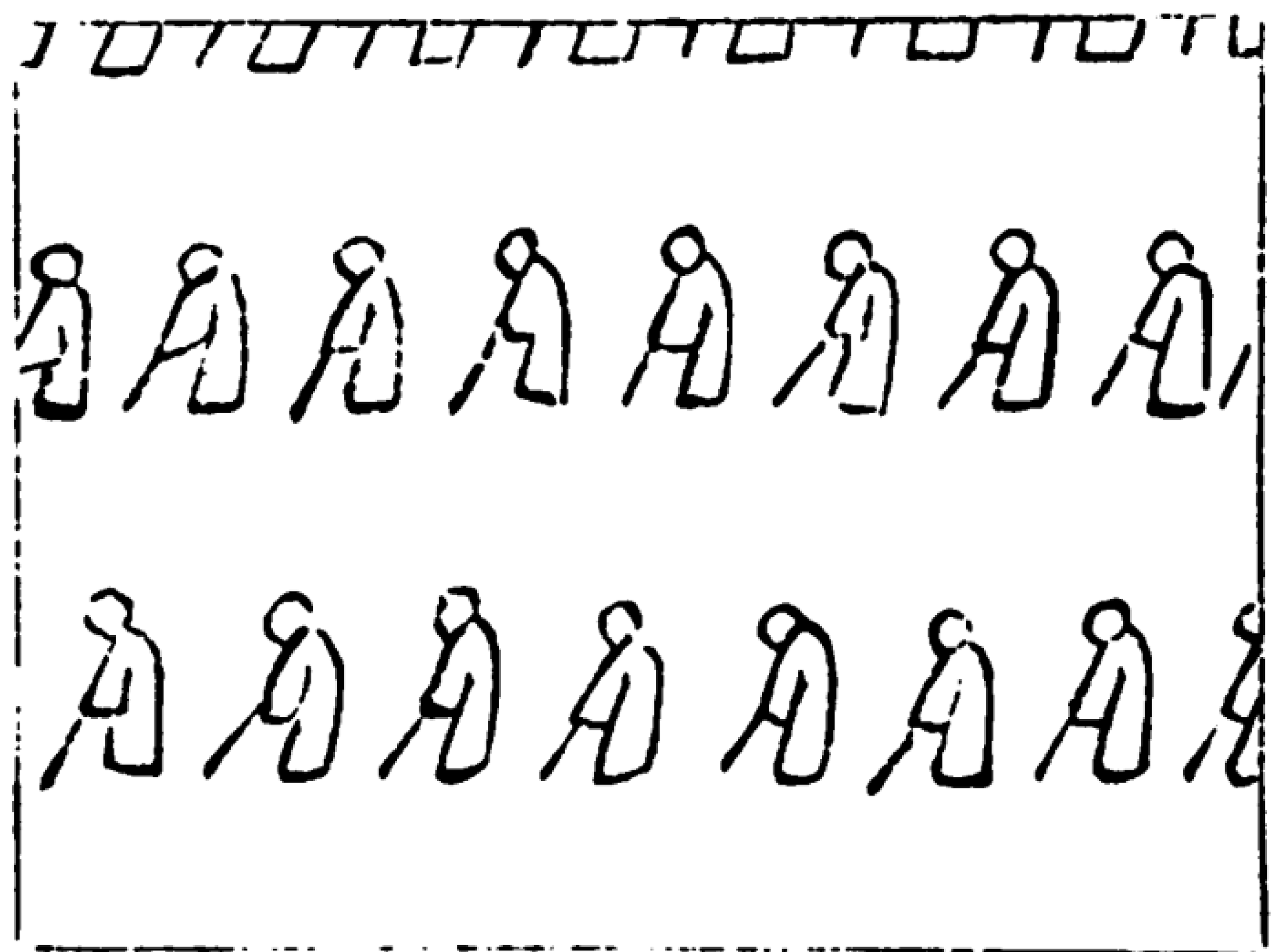
く避暑が出來る造作のないこと。

地球は殘らずの部面が夏ではない夏と冬と寒と暑とはぐる〳〵廻轉して居る今月今日赤道以南の三十度外は雪が降つている處があると思へば座遊の念を凝し心機を轉じて是等の境界に精神を馳騁さすのが第一の術である。

ナイアガラの瀧を觀すれば華巖の瀧を思ふより爽快になる富士の雪を思ふより喜馬拉の雪を觀ずるはうが清涼であるアマソン河を遡りてオリノコに達せるアレキサンダー、ホン、ホンボルトの記行を讀めば淀河の納涼船と趣味が違ふて壯絶の念が起る四五冊の書籍といつたは此の種類の名家記行をいつたのだ。

滄海は縹茫たり月光は玲瓏なり萬里の淸風は一揮の扇頭よりも和かなり銀河は露を瀉ぎ灑然として氷屑に涵せしサイホンより甘し身神定まり心氣平かなれば炎熱を感受すること薄きは請合です。

近頃の佳人才子は戀愛小説の中毒にて心神腦亂し權豪富估は黄金崇拜に良知良能を攪破し暑熱の感受更らに太甚しかるべし。(やまと新聞)



めくらじま

太平洋船中（米國通信の一）

元千葉高等女學校長　澁谷馬頭

「萬國女子風俗」稿成りたれども、顧みればこれたゞ他人の著書より材料を取りたる者、實際これ

を見て來たのでない。心甚だ不本意を感じた。依て足を海外に運んで、自ら各國の眞正の女子風俗をしらべやうと思つて、先づ米國に渡り次に歐洲各國に歩みを移す考へである。唯、貧生力之に堪へるか否やが心配の至りである。

出發

六月二日の午後三時頃横濱波止場を離れた。船は郵船會社の伊豫丸とて六千三百十九噸と云ふ大船、軍艦鎭遠定遠は當年の大船、我も人もえらい船と思つたが、今は我等の乘つた船もそれには劣らない大船、世の進歩は一時間十幾海里を走る大船よりも早いのだ。

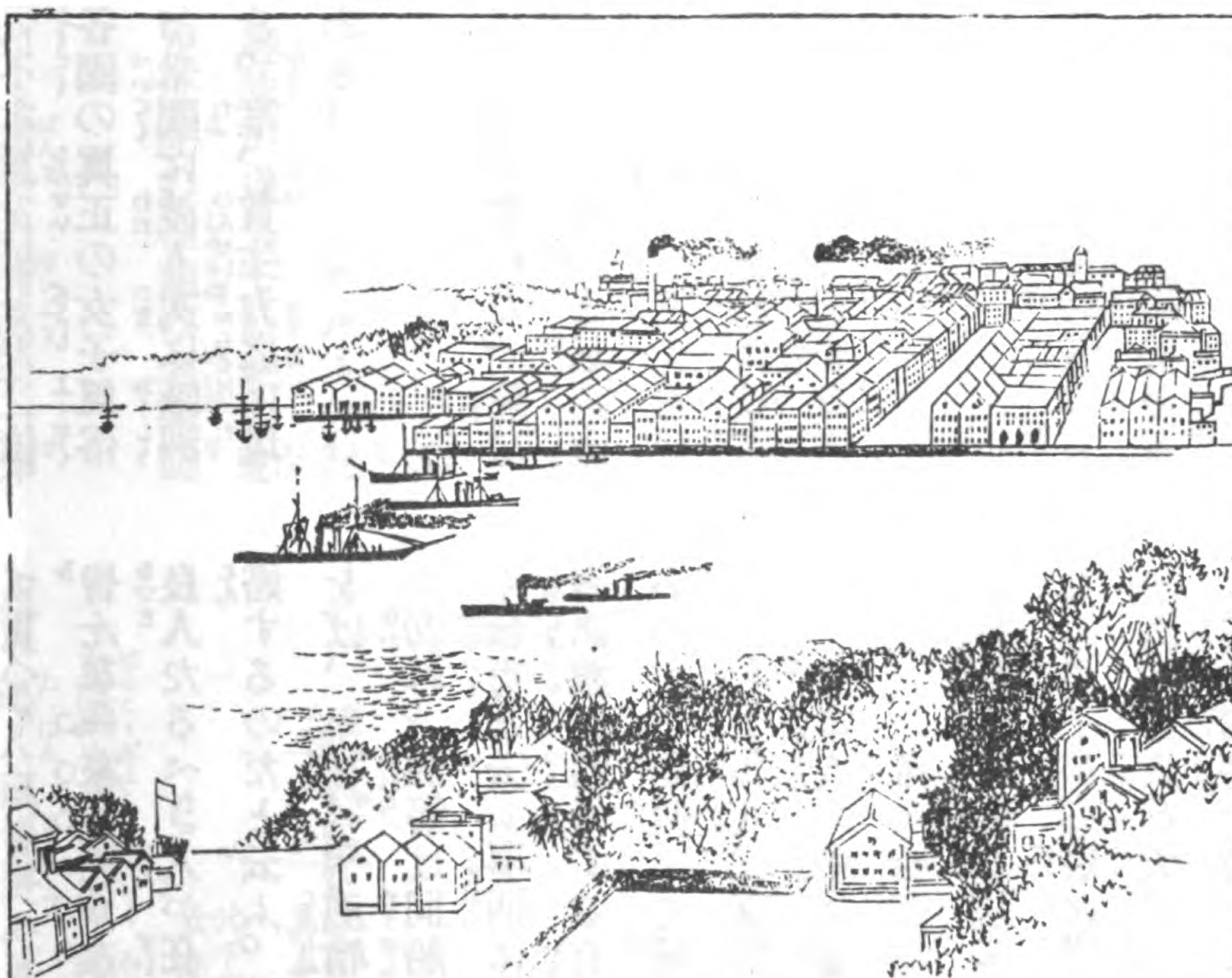
渡米女學生

と見える蝦茶式部一人居る。又洋服着た妙齡の貴女三四人居る。いきなり詞をかけては失禮であると遠慮して、種々苦心して、つてを求めて紹介して貰つて、語を交へるに及んで全く失望落膽した。皆んな○○○○○○の奥さんで、此方こそはと思つた女も、良人たるべき人が在米してゐる、そこへ行つて結婚するのだと云ふ。讀者諸嬢よ、我等の失望落膽をば、卑むべき魂情であると、一概におとしめ賜ふ勿れ。我等は同船渡米の諸嬢(否)諸夫人が、全く教育と云ふ事柄には、無關係な方ばかりで、讀者諸嬢に通信する有益なる材料を得る事の出來ないのが、如何にも殘念であるのである。乘客日本人百七十九人、支那人百五十二人、西洋人三十六人。日本人の中に婦人はすべて十六人。下等の

婦人船客

は勞働者の妻と云へばそれまでなれど、其勞働者たる男子が一般に洋服を麁末ながらも着けて居るのに、婦人が大抵和服を着て居て、常に寢衣の上に赤い細帶を締めたばかりの、だらしない姿で、

平氣に甲板の上の人中を徘徊する有樣は笑止の至りである。此婦人等は皆亭主持ちのオカミさんで夫婦づれの出稼ぎであると稱して居るけれど、中にはホントの夫婦であるか、どうか、怪い者が見える。世に所謂醜業婦と云ふやうな者が見える。醜業婦をばわが妻だと稱へて無事につれて來れば隨分男の方ではうまい儲けになるさうだ。醜業婦論は他日機を見て大に論じて見たいのである。大抵



夫のない婦人の一人旅

は米國で上陸を拒絶される、だから狡猾な者どもは夫婦だと僞つて行くのである。然らば婦人の一人旅はどうしても出來ないか。女學生で渡米を希望するにも假の夫を要するかと云ふとソンナ馬鹿な事はないのである。若し其女學生にして、行先きの學校又は敎師の名が明瞭に知れ、またこれまでの本人の敎育が如何にも學問のために渡米する者と認められる程度であれば、

合衆國又はカナダの移民館とてソンナ無法の事をする者でない。つまり、醜業婦の勝手に出入する事をとめる趣意から出たので、一人だと云へば牝猫までも近寄らせないと云ふやうな方針ではないのである。時としては米國官吏は其婦人の行先へ問ひ合せをして後に上陸を許すさうだから渡米計畫の女學生は前以て其行先の學校なり敎師なりの許へ通知してやつて置く方がよからう。渡米希望の諸孃のために、我等は委細の事の質問に應じて女鑑紙上にお答へを致しませう。世間に流布する「渡米案內書」と云ふやうな者にはトンダ間違をかいてあります。御注意。御注意。さて我等まことによい日和に出合して、却つて毎日退屈に苦んだ。十一日には申合せて日本人

航客演藝會

を催した。毎航海此種の催しがあるさうだ。併し此度ほどの盛會は稀な事だと船員は嘆賞した。見物の外國人などは拍手喝采をつづけて居た。會は、我等の開會の辭を以て始まり、劍舞、手踊、義太夫、長歌、端歌二三十番、中には朝鮮人吉岡某兄弟(これは日本名、實名は徵成文、及び其弟)の朝鮮歌、支那人某の吹笛等の飛入もあつた。此會に準備やらあと仕舞やらで三日を費した。橫濱を出てから渺茫たる天地間唯我船のみ波の間を走ること七晝夜にして曆の日重りて、六月九日と云ふ日が二日あり、それから今十六日早朝に至つて漸く陸地に近づいた。塲所は何處。北米英領カナダの

ヴイクトリヤ港

へ着いた、こゝに暫く止つて明朝に至つて、合衆國領のシヤトル港へついて上陸する都合である。ア、長かつた海上に十六晝夜をあかしくらして、やう〳〵と土の上をあるかれる。シかシ思へバ實

は便利安全の世の中だ、紀の貫之ときこえたる船醉の翁は土佐の港から大阪の川口まで僅の海上を數十日費やして、おまけに頭まで白髪にしたと云ふではないか。尚は我等は明日午前にシャトルに上陸して一兩日滯在して、それから南ポートランドへ向ふつもりである、其あとのことは見るに付け、聞くにつけ、面白い材料を集めて追々に通信する積である。六月十六日午前、ヴイクトリヤ港にて記す。(うまのかみ)

俳壇の女流

四溪閑人

(一) 緒言

和歌俳諧とおしなべて言ふ中にも、自から雅俗優劣の差別の有りや無しやに就ては、人各意見を異にすべしと雖も、齊しく是れ風流の娯樂にして、固より善惡の評を容るさず、和歌はみやびたり、俳諧はひなびといふは尚は可なり、されば歌よむは良し、發句つくるは惡しゝと言ふに至ては、肯ひ難き事ならずや、世の婦人の爲に言を立るもの、往々にして此の肯ひ難き見解の下に、發句は下品なり卑俗なり、之れを嗜み之れを弄ぶは、女の女らしき品性に益なくして、寧ろ上臈の美德を損すべしと爲し、女流と俳諧との、相逢ひ相近くを喜ばざる色あるが如し、何ぞ其の量の狹くして其の見る所の小なるや。

今日の女流界も、亦た同じく此の狹小の量見を懷けるが爲なりや否やは知らずと雖も、兎にも角にも、婦人にして俳壇に遊び俳味を掬する者の甚だ少なきは、誰が目にも違はざるべき事實なり、俳諧女性に良からざるか、女性俳諧を容れざるか、

何ぞ其の相逢ふの疎にして相距るの遠きこと斯の如きや、蓋し非俳諧者流が、發句を下品なりといひ下し卑俗なりとあざみ笑ふ所以は、俳諧の用語が必ずしも雅ならずして多く俗なるが故なるべく、婦人の俳諧に近かざる所以も、亦た恐らくは其れに外ならざらむ、然れども、言の俗なるは意の雅なるを妨げず、由來俳諧の世に行はれて、尙は且つ流行の勢を收めざる所以のものは、則ち其の用語の自由を撿束せずして、而も能く風雅の趣味を妨げざるにあり、和歌の風調の温雅流暢にして、能く婦人の性情の優美婉麗なるを相調和するは勿論ながら、其の用語には嚴重なる制限ありて、殆ど專門的に古文學を研究せしものにあらざれば、之れを咏じ出す能はざるのみならず、たとへ古學の修養を積むと雖も、固是れ前代の言語にして、時勢の變化に伴はざれば、今日の事物を叙述するに適應せざるを奈何せむ、限りある雅言を以てして、限りなき思想を言ひ表はし、舊時の用語を以てして、當世の題目を咏ぜん事の、不自由にも不可能にもあるべきに想ひ到らば、日用の言語を以て平生の感懷を漏らし得べき、自由に經便なる詩形の、將來ます〳〵必用なるは、言を俟たずして明かなり。

要するに、俳諧の用は、簡易輕便にして廣く上下に行はるゝにあり、詩とか文學とかの六ッかしき沙汰はさて置き、單に之れを遊戲娛樂の一として見れば、洵に上品にして趣味多きものと爲すべし、婦人の古學を修め和歌を咏ずるや固より大に良し、而も又た、事繁く心間なき折々の慰みに、たま〳〵氣の張らぬ十七文字を連ねなどしたらんには、なか〳〵に興深くみやびたらずや、殊に從來婦人の俳諧に指を染めしもの多からざるを以て、

婦人のこれより當さに開拓すべき俳壇の區域は、却て甚だ廣く大なるものあり、われは世上幾多の才媛名姫の、來つてこの俳壇に風雅の新樂境を拓かれん事を望むこと切なるが故に、過去の俳諧史上に於て、女流と俳味とが如何によく調和せるやの事實を討ね、以て所謂温故知新の料と爲さむとす、つたなき此の「俳壇の女流」は、實にこの意よりして筆を執れるなり。

（二）伊勢の美津女

女流の性情と俳諧の趣味とが、決して相背き相離るべき運命あるにあらずして、却て相近き相親むべき因緣を有する事は、過去の歷史上に印されたる多くの事實に賴りて之れを證するを得べし、古來女流の俳諧に遊びしもの、其の數甚だ少なしと雖も、而も俳諧の世に流行せることは、上下三百餘年の久しきに亘れるが故に、其の間に輩出せし女俳家の數も、亦た必ずしも多からずと爲さず、當時に家を成し、後世に名を殘せしもの丶みにても、尙ほ十數人を擧ぐるを得べし、其等の人々の性行を敍し作品を示すは、即ち女性と俳諧との因緣を事實的に說明する所以なるべし、憾むらくは其の傳記得て詳かならず、考證の材料も亦た多く傳はらざるを以て、こ丶に史傳としての完全なる事實を提供する能はざる事なり、ひとり女流に就てのみならず、凡そ俳家としては、其の名高く其の句聞ゆる者にして、其の傳の詳かならざるものの多し、これ亦た俳史を編むもの丶、尠からず憾みとする所ならむ歟。

口上はこの位にすべし、さて、女流にして俳壇に初めて其の名を知られし者を、伊勢の美津女と爲す、美津女は杉本氏光貞の妻にして、俳諧は杉田

望一を師とせり、望一は俳諧の始祖たる荒木田守武が死せし翌年(天文十九年)を以て生れし人なり、望一の少壯時代は天下麻の如く亂れて、群雄四方に割據せる所謂戰國時代に屬し、人の心殺伐を極めて、又た俳諧の如き閑餘の遊戲文字を顧る者なかりしと雖も、神風の伊勢の國は、彼の荒木田守武が生地なればにや、微弱ながらも尚ほ俳壇に一脈の春信を通じたりき、望一は天性文學の嗜好ある者、殊に少時明を失して、自から靑雲の緣を絕ちけるより、長じて後は專ら守武が風流を慕ひて俳諧を樂しみ、神路山の麓に優游吟哦しつゝいとも平靜なる生涯を終りぬ。

咲く花の兄は兄ほどの色香かな

それと聞くそら耳もがな時鳥

などの句あり、梅を花兄と稱する故事はいふに及ばず、時鳥の句は御撰集の、時鳥はつかなる音をきゝそめて、あらぬもそれとおはめかれつゝ、の歌より脫化せるもの、以てこの盲人が多少の學才ありしを證すべし、句調の穩かなるは、其の生涯の穩かなりしに適へり、さして名人上手といふには當らずとも、伊勢風俳諧の維持者として、俳諧史に漏らす可らざる人物なり、其の死せるは寬永八年、德川三代將軍の治世に當り、時に元和偃武後十數年を經過し、萬民泰平を謳歌すると共に、俳諧は「治まれる御代の聲」として、松永貞德翁に唱道され、一時戰國の暗雲中に包み去られし俳壇も、こゝに再び昇る旭の光を受け、所謂俳諧中興の盛運に會せり、されば望一も、晩年貞德と音信を通じ、其の作句は、多く貞門の撰集に錄され、俳人としての名を廣く世に稱さるゝに至れりき。

美津女は天正十一年伊勢の山田に生れ、正保四年七月六十五歲にして沒せり、(或は七十五といふ、

この説正しければ生年は天正元年となる）杉本光貞の妻、望一の門人にして、俳諧の上手なりきといふ外には、其の傳を稽ふべからず、良人杉本氏の事亦た知り難し、光貞といふ名の仔細らしきによりて、いづれ平人にあらざりしを想像し得るのみ、美津女の作にして、犬子集に錄されしもの六句あり、

梅がえはわが花がさやはるの雨
虎の尾の花に追ひつけ犬さくら
風袋口ぬひとめよいとさくら
はたる火を晝はいづこに池の水



あふぐ手もはねを折りぬる扇哉
我が友を雪とや見らんすくみ鷺

これなり、犬子集は、寛永十年、貞德の門人松江重賴が、諸國より到來の句を撰集せしものにて、當時の俳人は自己の作の、此の集に錄さるゝを非常の名譽と心得、入撰の榮を得むが爲めに、今の言にていふ運動を試むる者さへありし程なり、重賴が同門の友、野々口立甫なるもの、其の作句「螢火は何の脊中の灸かな」といへるを、犬子集に加入せんことを重賴に依賴せしに、重賴はこの句が、師翁貞德の「螢火は野中の

蟲の炙かな」といへると同詠なればとて、立圃の乞を峻拒し、兩人遂に交りを絕てりきといふ、編纂撰擇の方の嚴重なりしこと知るべし、美津女が作の六句までも入撰したるは、時にとりての名譽と謂ふべし、その外諸書散見の句に、

白鷺の啼かずば雪の一と丸み
天の戶のすかしもつかよ三日の月
右ひだり知れぬわらびの手先かな
たんざくに兒の手屆く花のえだ
啼くにさへ笑はゞ如何に杜宇

等あり、句の意にいづれも評釋を加ふるに及ばずして明かなり、糸櫻に風袋の口を縫ひとめよといひ、扇あふぐ手の骨を折りぬるといふが如き、女ならでは言ひ難きやさしみならむか、固より俳句として上乘なるものとは言ひ難けれども、乍然句の善惡の價値は、其の時代の風調と比較して定めざる可らず、蓋し美津女の盛時たりし寛永年中は、松永貞德一派の古調が、一瀉千里の勢を以て、都鄙上下に流行せる時にして、俳諧は只だおかしきもの、やさしきものとのみ解釋せられ、中興の大宗匠として一代の尊敬を受けし貞德の句も「鳳凰も出でよのどけき酉の年」「冬ごもり蟲けらまでも穴かしこ」の如き、緣語係語によりて、おかしみをやさしく言ひ廻はしたるに過ぎざるが多く、今日より見れば、半文にも價ひせざる俗調と評する外なきものなり、美津女が「虎の尾の花に追つけ犬櫻」の作「風袋口ぬひとめよ」の吟の如き、著るしく時風に染みたる句體ながら、尙は時代相應の秀句といふを妨げず、就中「啼くにさへ」の句、殊に當時にもてはやされき、俳諧古選にこの句を錄し、少しく理に涉るに似たり、古來之れを稱するを以て姑らく之れを錄すとの評を附

記せり、しかし、この句が世に稱されしは、句の意理に渉りて、滑稽を專一とせる時流の作品中に在つて、着想に一歩を進めたる異色の作ありしが故にもあらむが、さあれ句品の上下は深く論ずるを用ひず、美津女は卽ち女流にして俳壇に名を成しゝ最初の名珠として珍重するに足るもの、後年井原西鶴が園女に與へし書中に、光貞の妻萱原の捨など、花にしぼみて紅葉が散る世に云々など記せしを見ても、この名珠が尠からず時流に珍とされしを知るべし、或は又た、美津女が名の爾く世に推稱されしは、其の句品よりも、人品よりも、寧ろ俳壇に於ける婦人の地位が、甚だ當世に珍重されしに由らずやとも思ふ、孰れにしても些細なる事なり、深く詮索するに及ばずとして、さて、俳壇は既に女流の爲めに其の門戶を開きぬ、これ春信稍く通じて南枝先づ笑めるなり、二十四番の風吹き到りて、萬朶芳を發らくも、亦た遠きにあらざらんとす。

犬子集に美津女の良人光貞の句一を錄す「七草をたゝく拍子のすゝなかな」されば夫婦ともに俳諧を嗜みしにや、又た名家談叢に、杉本みつ女は伊勢國山田なる杉本喜右衞門といへる人の妻なり、いと眞實にして諸藝に暗からず、殊更俳諧は同じ國なる杉田勾當の門人にて、しかも名譽なり、啼くにさへ笑はゞいかに時鳥、の句は江州日吉の社へ奉納せし歌仙の内の吟なり、云々、人もよく知る松坂の園女は則ちこの女の門弟なり、とあり、右は本文の中に漏らしたる故、こゝに附記す。

山の後には必らず谷あり　　和蘭俚諺



小説 心づくし

海賀變哲

下の卷

(一)

古參の下婢のお虎といふが、お使ひにとて出行きし跡は、だゝつ廣き家の内に、忽ちに火の消えたる如く、靜まり切つたる、夜は九時もや過ぎたりけん。

奥の用仕果て三疊へ引下りしお清、丸與の豆洋燈うす暗く、朦朧と襖にうつる自己が影に、熟とながめ入りて物思はしき風情なる折、いたづらもの丶所爲にや、四邊の寂寞を破りて、ガタリとしたる物音に、思はずビクリと島田に小動ぎ打たせしが、またさらに身をすくめて、恐る丶もの丶有るが如く、部屋の隅々見廻はしては、ほつと一と息吐き居たり。

「是りやいつその事、何もかも有體に申上げて了はふかしら、斯うしていつまで隱蔽して居ても、隱蔽

し終ふせるものぢやなし、一寸逃れて、段々罪を重くするよりも、思ひ切つて申上る方がいゝ、あゝ左う仕やう〳〵、けれどもその跡は何う成る事であらふか、またあの阿母さんが………

と言ひさして、一層思ひに朽折れぬ。

「ほんに儂程薄命なものが他にあらふか、產の親には幼ない時に別れて了へば、顏も知らねば名も知らず、況して生死もなを判らず、只一人賴むは今の繼母さんではあるけれど、夫があの樣に沒義道な、拔倆がないとか、ぼんやりだとか、三日にあげず口汚ない小言ばかり、其苦を逃れて辛而このお屋敷へ上つて、僅かに一と息吐いたかと思ふ間もなく、まだ二月とも經たぬ内に、一度ならず二度までも、なんぼお慈悲深い奥樣でも、まだ氣心さへ碌々判らぬ新參物に、何うして左う度々お聞屆け下さらふ、初度の時でさへも、面から火の出るやうな思ひをして、やつとお願ひ申した處が、お金の額も少なかつたし、夫にあんな宜いお方であつたればこそ、嘸お前が困るだらふからと仰有つて、お貸し下すつたものの、餘所他の家では何うして〳〵、あんな事がお願ひ申されやう、その餘焔のさめない内にまた今度、いかに佛樣のやうなお方でも、左う〳〵厚顏しく願はれやうか、夫と知りつゝ阿母樣の難題、見す〳〵判つた虛構事實も、心の中は見え透いた、他に出來ない相談を仕掛けて置て、夫を機會にお暇を戴かせて、儂に厭がる事をさせ、左團扇で樂々とくらさう下心、三歲の時から貰ひ取つて、十七に成るまでも育てゝやつた事を、よもや忘れはしまひがと、恩を蓋に義理づくめ、夫を聞くのが辛らいばかりに、此家へ御奉公に上つたものを、今度お賴み背かれぬとあつては、新次を枷に無理往生、明日が日にもお

暇をいたゞいて、辛らい〳〵いやな商賣をしなければ成るまいが、今の僕の身では十圓はおろか、一圓もむづかしくと、言つて外に才覺の目的はなし、是りや何うしたものであらうかと、終夜まんぢりともせずに、思案をして見たけれど、只考へたばかりでは、自然とお金の出て來う筈なし、阿母さんからは火の付くやうにせがまれて、この五日の内に何とか都合が出來なくば、直ぐお暇をいたゞくのだから、其積りで居るが宜いと、膠もない詞、是りや最う他に詮方もなければ、出來るか出來ないか、物は當つて砕けろとやら、も一度奥樣にお願ひ申して見やうかしら、いや〳〵兎ても出來ないは知れた事、過日の事さへあるのに、あんまり鐵面皮しい言ひ種だと、思はれ申すのも辛らく、つい口元までは出たけれど、其儘言ひそびれて、お奥の御用をして居る内、旦那樣がお渡し遊ばしたお金をば、奥樣がお手文庫へお入れ遊ばしたのを見た時に、あゝあのお金さへある事なら、是れ程切ない思ひをせずとも濟む事、と思ふと變な心地に成つて來て、斯んな御大家では十圓やそこら、紛失つたとて、何れ程な御不自由もありはしまい、是が我身の榮耀榮華に消費ふのではなし、天道樣も、寛大に見て下さるであらふと、盜人にも三分の理屈とは言へ、勝手次第な道理をつけ、まあ大それた氣を起して、奥樣のお風呂を召して在らつしやる内に…………

今思ひ出しても慄然とする。

（二）

こんな太々しい女とも御存じなく、淸や々々とお優しい事は、恰で妹のやうにお目を掛けて下さるが、

いまにこの隱事の知れた時は、嘸恩知らず、犬にも猫にも劣つた奴と、お憎しみで御坐いませう、濟まない〳〵、旦那樣へも濟みませぬ、何卒御了簡遊ばして下さいまし。

過日も奥樣が儂をお傍へお呼び遊ばして、いろ〳〵とお雜談の内に、お前の國は何地だえと、お聞き遊ばすから、はい信州で御坐いますと申上げたら、信州と聞けばなつかしい、妾も信州だが、何の邊かとのお尋ねに、水内郡のこれ〳〵申す處で御坐いますと、夫から段々と、ほんに優しくお聞き下さるので、何だか實の姉さんにでも逢つたやうな氣がして、包まず身の上をお話し申したところ、和女もまあ、薄命な娘だねえと、涙を滾して下すつた、何うしてあのやうに御親切なのであらうか、斯ういふお方のお傍なら、五年が十年でも、成らふ事なら一生涯でも、御奉公申し上げたいと思ふけれど、あゝ最う夫も出來ないか、旦那樣も大やうな宜いお方だし、こんなに揃ふて好いお方の、お目を掠めるとは、儂は、ち、畜生、えゝ畜生にも劣つて居る。

お兩所共に、まだ何にも御存じは無いかしら、夫とも最うお氣がついたかしら、いつにない事旦那樣の御機嫌が、今朝はよくないやうにお見受け申したも、萬一やあの事からのお嫌疑ではあるまいか、夫ともまた氣の故かしら。

昨夜も鬼のやうな恐ろしい人達が、大勢で來てからに、儂を捕かまへて、さあ言つて了へ〳〵と、前後から責め立てられる苦しさに、ハイ、申します〳〵と、思はず聲を立てたのが、自分の耳に這入つて、びツくり目が覺めて、あゝ夢だつたか先あ宜かつたと、ほつと一と息吐いて見れば、脇の下から背中ま

で、びつしより汗に成つて居た。

斯う成つては兎ても〳〵、隱し切れるものぢやない、跡でお吟味受けてから申し上げやうよりは、今の内に包まず言つて了つた方が、少しは罪も輕からふ、あゝ夫が上分別、

何うも〳〵濟みませぬ、只今まで隱藏立てをして居りましたのは、妾が一生の過失で御座いました、明日は乾度申し上げて、何のやうな御折檻をも受けまする、奥樣、情願御勘辨遊ばして下さいまし。

さあ左うなれば明日限りで、お暇の出るは知れた事、こんな時に眞實の阿母さんでも、居なさるならば、何とか相談も出來やうものを、少さい時に別れた姉さんは有つても、其居所さへ知れないとは、…

…………

あゝこりやいつそ、死だ方がましかしら。

首垂れしまゝ、ほろりと滾す膝の露、まだ下町は宵ながら靜まり切つたる山の手住居、夜は闃として音もなく、一と間を隔てゝ柱時計の、卷き忘れしか音ゆるく、時を刻める響戞々物淋し。

（三）

「清、清…………

と奥方の呼ばるゝ聲に、愕然として身住居直し、はい、との返辭もおのゝかれ、犯せし罪科の暴露はれて、嚴正しき法庭に引出されたらん如く、恐る〳〵まかり出れば、長火鉢の前に兩手をかざし居玉ふさまの、思ひなしかや日頃には似給はで、乾度せられし有樣に、萬一やと胸先づ躍りつゝ、おづ〳〵と

跪づけば、

「今夜もまた大層冷える事ねえ、背後を締めて、最つと此方へ寄つて、おあたりな、」

といつに變らぬ優しき語調に、お淸ははつと一と安堵。

奥方の一句〳〵、胸さゝるゝ思ひに、今何とかのたまふか、知り玉ひし上ならば、何とて斯くまで打解けての物語はし玉ふべき、いや〳〵知り玉はぬ筈もあるまじきに、氣振りにも見せられぬは、一筋にては白狀も爲まじければ、左あらぬ體にて口裏を引かんとの思召か、など心一つに思ひ惑ふて、さながら針の莚に座れる如く、安き思ひもあらざりしが、話好きなる奥方は、殊更に打ち解けて、和女は何が好き、劇場か寄席か、此の邊は山の手なれば、寄席と言つても近い處にはあるまいけれど、好きな道には、遠い近いの苦もあるまい、其内に虎と同伴に行つて見るが宜い、と、夫から夫と、話の蔓は延び行くに、果はお淸も胸落付きて、答應におのづから膝進むる時、奥方は詞を改めつ、

「時にね……

と言ひさして、傍への烟管取り上げ、心にもなく烟草一と吹き吹かれしが、やがてまた

「斯うしてまあ、折角馴染にも成つた事ではあるし、成らふ事ならいつまでも、勤めて居て貰ひたいのだけれども、據ない事が出來てね、お前にも、下つて貰はなければ成らないやうに成つたから……

スワこそ最後の宣告は下れりき、お淸が耳には百雷の響なるべく、ハイ、との答辭も口の內、身を震はしたるまゝ、はづませたる呼吸呑込みて控へたり。

「あの旦那樣はね、今度前橋の方へ御轉任に成つて、遲くもこの月末にはお出發で妾達も御同伴に參るのだから、」

と思ひ設けぬ其詞に、お淸は只平伏したるまゝ、兎かうの答辭もあらざりし。

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

事斯う成つては最う是非なし、明日にもお暇の出る此身、吾家へ歸れば阿母さんは目の敵、その苦しさよりも差當つたかの一條、申上げた其上は、何うなつても直ぐさまお返金し申さねばならぬけれど、左うせうには此身を汚穢の淵に沈めねば、兎ても〳〵、右から左りと、調へ難い十圓の金、最う否應は言はれまい、末始終こんな事に成らふとは、思はなんだでも無かつたが、是はまた降つて湧いて來たやうな、旦那樣の御轉任、成らばお兩所樣にお縋り申して、是非にとお供を願ふたら、彼方の事ゆゑ、お許容下さらぬ筈はない、左うさへなれば、辛らい〳〵阿母さんの難題も聞かされず、心配もなく、樂しい月日が送れやうものを、大それた罪犯した身では、そんな白々しいお願が出來やうか、あゝ今一日早くこの事が判つたら、夫こそ無理にもお縋り申し、その序にお金の事も願ふたなら、屹度出來るに違ひなかつたものを、えゝ儂の身には神樣も佛樣も、ついて居ては下さらぬのか、思へば昨日の我身が怨めしやと、お淸は獨りわが部屋に引下りつ、疊の上に俯伏して、喰ひ入るばかりに泣き居たり。

今宵は旦那樣もお不在なり、奥方は風邪心地とて、早うより臥蓐へ入られしに、馴れしお清は近う侍りて、腰揉しつゝありけるが、あゝこのお腰揉むも、最う僅かの間か、今まで隨分と來た中で、年齢の割には、按摩はお前が一番巧手、さうやつて揉んで吳れると、宜い心地に成つて、ついうと〳〵と眠て了ふ、とその度每有仰つた、お優しい溫かなお詞も、最う聞く事は叶はぬか、お名殘惜しや悲しやと、心に泣きて居る折から、奥方はふと心付かれけん、いと笑まし氣に、

「清、お前だけは今度前橋へ連れて行く、實家の方へも左う言つて遣つて置たから、お前も其つもりで、」

と思ひも寄らぬ慈情の詞に、お清は嬉しさ難有さ胸に溢れ、頓には答辭も出ざりしが、勿體なや奥樣の、何事も知り給はねばこそ、今のやうなる思召を、いかに身の安樂を願へばとて、口を拭ふてぬけ〳〵と、假面も冠らで何とお供が願はれやう、此儘お受けを致しては、罪に罪を重ぬる道理、事殘らず打ち明けて、お謝絶申すに若くはなし、晝は何かと人目多く、言ひそゝくれて居たりしが、幸ひ此方お一人なり、好い折柄、今申さでは、と屹度思案の面を上げ、さすり居たりし手をとゞめ、おのゝく聲音漸くに、

「奥樣、奥樣、折角の思召は、誠に難有う御座いますけれど、妾は、………妾は、も、大變な惡事を致しまして………」

と言ひかけて、末かすかに口籠りつ、御氣色いかゞと伺へば、聞こえしや聞こえずや、詞はなくて其儘に、くるりと寢返へり打ち給ひて、早やすや〳〵と眠り給ふ有樣の、お清が眼には、神の如くや拜まれし。

（終）



文林

新井白石　東久世通禧

唐ひとのわらきも折しきみこそは
まこと大和のますらをにして

夏燈　宮地嚴夫

なく蟬のこゑしつまりて涼しくも
見えそめにけり森のともし火

短艇競漕　小杉榲邨

さきかけてさかりわらそふ隅田川
舟にもなみのはなちらしつゝ

窓　遠山英一

うみ山もわかたかとのゝ物にして
窓に見るこそたのしかりけれ

夏田　加藤義清

雨おほきことしのなつは野田山田
みつをおとすにひまなかり見

夏海　鍋島榮子

水無月のてる日さかりも潮わみに
ひとのつどへる大いそのはま

禁苑新樹　岩崎寧子

おほにはのわか葉の蔭を去かねて
夏になりてもうぐひすのなく

沙月涼　日野西廣子

しほわみし晝のあつさは夢なれや
月夜すゝしきうらのまさこち

夜水鷄　南鄉柳子

月かけも水にうつりてせきいれし

文林

にはのながれに水鷄なくなり

水道　北島以登子

開けゆくみちもしられて家ことに
みつひく世とも成にけるかな

竹徑通幽處　大谷章子

茂りあふたけの下みちわけ入れば
こゝにも見ゆるしつかふせ庵

筍　常磐井文子

竹の子はあさな／＼に數そひて
ゆひも折られすなりにける哉

水族館　小川直子

網おろすあまもみえねはすむ魚も
心やすしとひれやふるらむ

淡海公　鈴木小舟

位山みゆるたかねもこえすして
にほふかゆかし藤なみのはな

夏池　土井榮子

なつこたちみとりも深き大いけに
遊へるうをもすゝしけにみゆ

草螢間　山岡良旗

二つ三つ見ゆる光は露ならで
くさ葉にすだく螢なりけり

都夏月

故郷の清水にやどる月かげを
都のそらにしのびつるかな

山家友

足曳の山は夏こそたのしけれ
涼みがてらに友もとひきて

遠山雲

唐土の山かあらぬか松浦かた
浪路はるかに雲の立つ見ゆ

敎の庭

八月一日兼題

樞密顧問官 正三位子爵 黑田清綱先生撰
（門人山岡超舟子評）

海邊螢

天　東京赤坂區靑山北町三丁目六十八番地　山本梓子

なにはかた夕しほこゆるあしのはに
　すかりかねてやほたるとふらむ

評、着想新らしく言葉はなやかに、うつし得て遺憾なく、實景のあたり見る心地せらる。原作初句及四句（なにはえや。すかりかねてか）とありて、いたく調を欠く心地せらる。

地　神田駿河臺南甲賀町八番地　金原玉城子

岩なみのたまちるいそのゆふかせに
　ひかりすゝしくとふほたるかな

評、流調にして然も餘韻ふかし。原作初句（白浪の）とあり。只白浪とのみ言ひては二及び三句活動せず。

人　東京下谷區谷中清水町十九番地　河合象子

よるなみもしつけき浦のゆふなきに
　みるめすゝしくとふほたるかな

評、鏡の如くすみ渡りたる浦わの夕螢とびかふ樣の如何ばかり涼しからずや。

甲　攝津　大岡はな子

なにはえのなみにすゝしく影みえて
　あしの葉かくれほたるとふなり

評、かざりなく自然の樣うたひ得て、調べ高きを覺ゆ。

横須賀　上田雪子

つゆふかきくさの宿りやあきつらん

わらいそつたひほたるとふなり　　　三河　河合ぬひ子

評、原作三句（あくかれし）とは無意味なり。されど露深き草の宿りやと言ひ起したる處、下の句に對して大によし。

あらいその岩にくたくるしらなみの
たまにまじりてちるほたるかな　　　水戸　酒井壽惠子

評、たまにまじりての詞岩にくだくる白浪に對して最も力あり。

かきりなき大うなはらのなみ路とも
しらてほたるのもえわたるらん　　　東京　椎野鋭子

評、原歌（海原のかぎりもしらぬ浪の上にこゝちよげにも螢とびかふ）とあり。かくて螢が虫らしく見ゑず、心地よげにもの詞、最も耳障なり。

わかそてにすかりもあへすはま風に
ふきやられてもとふほたるかな

評、原作二及び四句（つゝむとみしも。浪路はろかに）とあり。

かくては切角の思構も却て平凡に失する愁ひあらずや。

貝ひろふ子等はかへりてなにはかた
ほたるのみこそもえわたりけれ　　　攝津　鹽見文子

評、原作三句以下（磯近く心やすけにとぶ螢かな）とありて、調べとゝのはず。

いさり火のちかく見ゆると思ひしは
なきさとびかふほたるなりけり　　　肥後　德永廣子

評、原作二句（つどふ光りと）とあり。四句（きしに亂るゝ）とあり深く味ふべし。

なにはがたいそ山かけてとふほたる
まつの葉こしにみるそすゝしき　　　東京　山口みな子

評、原作一及び二句（月かげのさし出のいそ）とあり、故人もさし出の磯を海邊の如く詠み誤りたれど、我が師黑田先生嘗て甲州に遊び玉ひしなり、其の海邊にあらずして河のほとりなる事を探究せられたれば、今はとらず。

乙

貝ひろふ子らはかへりしおほもりの
うらはしつかにほたるとふなり　石狩　阪本榮子

あまの子におはれ〱ても鹽やく
けふりのなかにゆくほたるかな　上總　高　代子

魚あさる海人かたく火とおもふまて
あしまにひかるほたるなりけり　東京　横井勝子

なには江のあし間すゝしきゆふ風に
つゆとみたれて螢とふなり　横濱　石川ひろ子

いさり火のかけはうすれてうなはらの
なみのまに〱に螢とふ見ゆ　遠江　比良古代子

いさり火の風にきゐたる波のうへに
のころは夜半のほたるなりけり　東京　三好珍子

あらいその岩うつなみのくだけちる
玉とも見ゐてとふほたるかな　築北　つま子

よるひかる玉かと見ゐてこよろきの
いそやまほたろすたくなりけり　東京　三上誠子

あまのたくいさりひならて飛ほたる
もゆるもすゝしすみの江のうら　秋田　佐藤かつ子

波よするいそのいはやのくさむらに
はやところ得てすむほたるかな　埼玉　横田音羽子

つくしのうみ人しらぬひとみるはかり
うなはらとほくとふほたるかな　東京　山口琴子

よる波のおともすゝしきいそやまの
まつなてらしてとふほたるかな　東京　佐々木八重子

しらなみのよるもみよとや松しまの
數なてらしてほたるとふらむ　三河　永井さい子

うら波のいはにくたくるしらたまに
ひかりなそへてとふほたるかな　東京　杉田繁子

なにはかた月もいり江のあしのはに
のころひかりはほたるなりけり　埼玉　前野滋賀子

かゝり火の影もあとなくなるみかた
ひとりほたるのもゐわたるらん　肥後　田代艷子

いさり火のかけにまじりて海はらの
なみのよる〱とふほたるかな　東京　山本茂子

磯つたひなみのよる〱來てみれは
かたすのあしにほたるとふなり　埼玉　横田秋子

ともし火もきゐぬはかりの濱かせに
けちぬは夜はのほたるなりけり　肥後　岡山登滋子

海のおもにおちやしぬらむほし陸の
うかふとみしはほたるなりけり　福岡　武田外代子

なにはかたあしの末葉もうちそよき
すゝしきかせにほたるとふなり　東京　大町律子

さす汐のいりくるいそのしらなみに
かけなうつしてとふほたるかな　肥後　田代綾子

くらきよの燈しとなりてなきさこく
海士の小舟なてらすほたる火　札幌　山田靜子

たまもよる玉の浦わのゆふかせに
たまとみたれてとふほたるかな　熊本　日高かず子

あまの子のとらんとすれは磯さまの
まつよりたかくほたるとひゆく　香川　大山豊子

いさり火もきゐてさひしき海原の
あとにもゆるはほたるなりけり　東京　久澤鈴子

秋の螢

もしほやくけふりは絶ていせの海の
みるめすゝしくとふほたるかな　東京　大枝康子

沖とほくこきゆくふれも見ゆるまて
やみをてらしてとふほたるかな　山口　村上操子

うらなみにうつるほたるも星かけも
ひとつに見ねてすゝしかりけり　東京　大江春子

時ならぬはなと見るまていそやまの
まつにかゝるはほたるなりけり　松山　上原のふ子

しほけふりなひきてかゝる螢かやに
ひかりかはしてとふほたるかな　肥後　佐々木小擧子

とらへんとすれは螢のいつしかも
なみはるかにとひてけるかな　京都　植松春子

よるなみの岩にくたけてちる玉と
見ゆるはいそのほたるなりけり　札幌　山田婦美子

潮あみしひとはかへりてすみよしの
うらさひしくもほたるとふなり　河内　辻本ひさ子

いさり火もきねてさひしき海はらに
ひかりすゝしくとふほたるかな　東京　永井さき子

いさり火とみゆるはかりに夕されは
はまへつたひにほたるとふなり　日向　紀藤榮子

夕なきにうらのまつはら見わたせは
なみ間てらしてとふほたるかな　陸前　前田河みさを子

いさり火はまたみねそめぬなには江の
あしまてらしてとふほたるかな　大隅　稲恒政子

しほならぬあふみの海にところねて
なにをほたるのもねあかすらん　肥後　佐々有鄰子

しらなみのよするみぎはの蘆の葉に
すたくほたるのかげそみたる　但馬　田尻保代子

見渡せはあをうなはらのゆふつく夜
たまかと見ねてとぶほたるかな　東京　荒井滿武子

夕やみのこゝろあてなるあまをふれ
よれはあしまのほたるなりけり　肥後　德永萬壽子

かひ拾ふ子等はかへりてゆふまくれ
なみうつきしにほたるとふなり　秋田　小島いわ子

すみの江に星のひかるとおもひしは
きしにとひかふほたるなりけり　肥後　德永多瑠子

うちよするあらいそ波もしつまりて
ゆふへすゝしくほたるとふなり　三河　白井よし子

うら風にたまとみたれてほたる火の
あし間かくれにひかりけるかな　下野　川連美留子

いせのうみ滴きなきさにとふほたる
たまとちりしくこゝちこそすれ　伊豫　小松千代子

浦かせにつゆとみたれていそやまの
まつはらこしにほたるとふ見ゆ　下野　川中子てつ子

舟ひともかへりしよさのうなはらを
ほたるのみこそもねわたりけれ　伊豫　吉良眞子

あらいその岩うつなみのたまかとも
見ゆるはかりにとふほたるかな　長崎　岩田春子

うき沈みかけをなみまにあかしかた
みきはすゝしくほたるとふなり　宮城　大槻慶子

海士の子かむらかる方をなかむれは
うらめつらしくほたる飛ふなり　下野　佐藤たか子

焚き捨し海士かかゝりと見ねつるは
あしまをてらすほたるなりけり　秋田　和田りつ子

よせかへすなみの花とも見ゆるまで
　ほたるとひかふいそへ涼しも　鳥取　大塚信子

しけりあふ蘆のはわけのうらかせに
　ほたるみたるゝかけのすゞしさ　陸前　鈴木千代子

なにはかたあしわけ小舟こきゆけは
　よそにみたれてとふほたるかな　宮城　大槻初音子

なにはかたあしまこきゆく釣ふねの
　かすさへ見えてとふほたるかな　陸前　豊原つる子

住の江のきしによるなみくたけては
　たまかとはかりほたるとふなり　出雲　岩宜より子

とらへんとすれはいつしか海の面を
　きえつひかりつほたるとふなり　神戸　井上品子

なみよするみきはの芦の葉かくれに
　見えみみえすみとふほたるかな　信濃　山本基子

波のうついはよりいてし火とみしは
　なきさにすだくほたるなりけり　下野　佐藤おき子

なにはかたさゝ波よするあしの邊に
　かくれあらはれほたるとふなり　若松　高橋久子

うちよする浪のしふきかあらいその
　はなと見るまでほたるとふかな　若松　高橋泉子

藻しほやくけむりは絶てはま松の
　かせのまに／＼ほたるとふ見ゆ　若松　川島謙子

丙

うなあさる船のともしにまよひきて
　こゝろもそらにとふほたるかな　羽後　三浦さわ子

かせそよくあしの葉末にあらはれて
　うらまつかけをとふほたるかな　大隅　山田よれ子

あまの子は母かむかひに出るまで
　ほたるにくらすゆふやみのそら　三河　宇津野代牟子

うら風にみきはのあしのなひきつゝ
　なみますゝしくとふほたるかな　東京　積山鏡子

海士の子かまねく團扇のひまもれて
　うなはらとほくゆくほたるかな　美濃　吉村せむ子

あめのよもきえぬ浦わのいさり火は
　すたくほたるのひかりなりけり　三河　服部正子

なかめとてはなも紅葉もなきうらの
　とまやすゝしくほたるとふなり　三河　本多きさ子

しらなみの龍のみやこにすゝしくも
　よるさくはなはほたるなるらむ　三河　服部茂子

磯なれのまつのひゝきもおとたえて
　うみつらゆるくほたるとふなり　東京　牛山棠子

みちしほにかけを浮へてあしの葉の
　かせもすゝしくほたるとふなり　東京　牛山棠子

よる波のおともすゝしきゆふやみに
　ほたるとふなりちぬのうなはら　和泉　福原すみれ子

うちよするなみにすゝしき星かけは
　もにあらはるゝほたるなりけり　東京　椎野ぬき子

はま風になひくあしまによるなみを
　あらはにみせてとふほたるかな　東京　椎野薫子

すまの浦やきよきみきはの夕なみに
　のこせしたまはほたるなりけり　東京　椎野秀子

ゆふ月のかけまたくらきうみのへに
　ほしと見るまてとふほたるかな　安藝　和住千鶴子

歌の園

さゝなみのよする海へのゆふくれは
　ほたる火さへもすゝしかりけり　安藝　和住千鶴子

海士の子かすてやしつらんさゝ小舟
　なみのよる〳〵ゆくほたるかな　伊豫　山崎匡子

なには江のあしの葉そよくさよ風に
　たまとみたれて飛ふほたるかな　伊豫　梯たけ子

見わたせは三保の浦邊のゆふなきに
　ほしかとはかりほたるとふなり　信濃　小泉みつじ子

なつの夜をあかしの浦のうらなみに
　ひかりかはしてとふほたるかな　信濃　山本直枝子

よな〳〵にあまのいさり火數そふは
　おもひにもゆるほたるなりけり　栃木　斉木たま子

海のへにゆきつもとりつとひかはす
　ほたるはなみにひかりそへけり　陸前　三浦ゑん子

海はらにうつれるほしと見るはかり
　いそやまかけてほたるとふなり　北見　中川伊代子

見渡せはなみのまに〳〵しらぬ火の
　それにもあらてほたるなりけり　東京　安井みし子

も汐やくあまのとまやのともしびと
　みしはとびかふほたるなりけり　羽後　三浦ふさ子

濱まつのひまより見れはうみのへの
　ほたるはなみのしふきなりけん　東京　岡田春子

松かせのおともすゝしきすみよしの
　木の間もれつゝほたるとふなり　東京　松村あさ子

いせの海なみのよるよるさくはなは
　ひかるほたるのかけうつるなり　福岡　武田龜子

海のおもにもえてもかけのすゝきは
　たまとみたれてとふほたるかな　筑後　鏡山増代子

すまのうら舟さへみえぬゆふやみに
　もえてきゆるはほたるなりけり　大和　栗山けい子

なには江の芦まにのほるほたるひは
　つゆにやとかるつきとこそみれ　三河　石川代志子

白なみのよするまに〳〵ほたる火の
　たまとみたれていそへすゝしも　三河　石川さち子

ほたるひのもゆる限りはあまがやく
　もしほのけむりたえしとそおもふ　三河　石川たち子

こゆるきの磯へにもゆるほたるひは
　あまかとま屋のともしとそみる　三國　石川ます子

月はいりてなほもおくらき夏の夜に
　すみのいり江をてらすほたる火　宮城　鈴木すき子

いさり火と思ふはかりに見えつるは
　すたくほたるのひかりなりけり　若松　高橋操子

しら波のよせてはかへすいそのへに
　みたるゝたまはほたるなりけり　水戸　富田千代子

すみの江のよ風につゆのたまのこと
　みたるゝものはほたるなりけり　東京　柏村白ばら子

よる波はいやしつかにてなにはかた
　あしまにもゆるほたる火のかけ　東京　林環子

夕されはひかりまはゆきほたるひに
　おきのしらほのかすもよまれつ　遠江　夏目一枝子

磯のへにほせるもくさにつゆおきて
　夜ことひかりをそふほたるかな　愛媛　黒川亘子

はま風のふきてもちらぬしらつゆは
　あしまたつとふほたるなりけり　松山　水木とも子

うちよするなみのしふきかそれならて
たまそちりかふほたるとふなり　東京　中林英子

わたのはら渡るふな路をてらすまて
ひかるほたるのかけさやかなり　靜岡　夏目まつゑ子

さゝなみやゆふへ涼しきほしかけの
よするみきはにほたるとふなり　東京　井上よし子

難波江のあしの葉かけにほたる火の
もゑてもすゝしいそのゆふくれ　福井　平田そう子

いそつたひ二十日の月のかけふみて
ゆけはみきはにほたるとふなり　三河　石原逸子

舟たにしすまのうらわのなみの上を
わたるはよはのほたるなりけり　奈良　栗山たか子

なにはかたよりくる浪のしらたまに
ひかりかはしてとふほたるかな　攝津　駒井登雄子

かせなきて浪しつかなるゆふまくれ
とふやほたるのふたつ三つ四つ　横濱　米原琴子

なには江のあしまによする夕なみに
たまとみたれてとふほたるかな　埼玉　前原ふさ子

漁り火のそれかあらぬかうみの面に
かけすゝしくもとふほたるかな　相州　笹子茂子

いそ近くいさり火來ぬとおもふかな
ほたるのかけの見ゑかくれして　相州　笹子歌子

夕なきにうらのめなみのおとたゑて
あしの葉かけをとふほたるかな　三河　堀田伊勢子

あしのはの露にひかりをさしそへて
なにはのうらにとふほたるかな　兵庫　森本芳江子

うなはらやかせもなきさに音たゑて
ほしともまかふほたるなりけり　東京　荒井きく子

いさり火のかけもいつしか消はてゝ
なみちはるかにほたるとふなり　愛知　後藤信子

ゆふつく夜かけほのくらき磯やまの
こゝにかしこにとふほたるかな　伯耆　樋口つる子

吹く風にたもとふかせてよるゆけは
いそへはるかにほたるとふ見ゆ　東京　荒井千代子

うなゐ子のさわく海邊のゆふつく夜
ひかりのこして飛ふほたるかな　出雲　藤原精子

海の面になかるゝほしと見ゑけるは
たまとみたるゝほたるなりけり　伊豫　小野末子

あら磯をわたるなみまに影見せて
ほたる飛ふなりゆふやみのそら　伊豫　山本鶴子

海はらをふくや涼しきゆふかせに
ほたる飛ひかふいそのまつかけ　伊豫　山本さとみ子

さらぬたにいそへ涼しきまつかけを
ほたるとふなりゆふつきのそら　伊豫　小野文子

ゆふされは海人の子供もつとひきて
いそやまかけにほたるおふ見ゆ　三河　石川親子

吹あけのはまによせくるゆふなみの
たまとみたれてとふほたるかな　東京　安井あや子

難波かたしほのみちくるなみの上に
かけをうつして飛ふほたるかな　東京　川村松子

はりまかた舞子のはまの夕まくれ
かせにみたれてゆくほたるかな　東京　川瀬たき子

山邊なるほたるはかせにさそはれて
うみへのくまにひかるなりけり　東京　中野昌子

敎の庭

あしわくる舟にみたれていそちかく
すゝしけにこそほたる飛ふなれ　東東　内田きみ子

ゆふ月のかけはかくれていそやまの
まつのはこしにほたるとふ見ゆ　東京　安井じゆん子

あまかやくもしほのけふりすゑくれて
はまへすゝしくほたるとふなり　東京　安井きやう子

海士の子かあそふ磯邊のゆふつく夜
ひかりもきよくほたる飛ふなり　下野　岩間きよみ子

網引する海人のよひこゑしつまりて
いそやまかけにほたるとふなり　栃木　岩間壽子

あまひとか釣するかたのいさりひと
見ゆるひかりはほたるなるらん　長野　岡田千穗子

鏡なすあなうなはらはほしかけの
うかへるはかりほたるとふなり　やゑ子

うら松のかせそすゝしきいそのへに
ほたる飛ひかふゆふまくれかな　東京　篠岡もと子

なつの日のあつさなかして夕たちの
過きしいそへにほたる飛ぶなり　東京　篠岡まさ子

華族女學校教授　井上賴圀先生撰

海水浴日記（三日間）

熊本市光琳寺町　日高かず子

七月二十五日　天　堪へがたき暑を、赤瀬の浦にさけんとて、やから打連れ出立ちぬ、名に高き有明の海につゞきたる處にて、遠近の景色いはん方なし、大方の人のものする爲に、波打際にしつらへたる家居清らかに、風は海山を吹通ひていと涼しう、夏は皆から此處にてとそ思ふ、心も廣き海面を我は顔に汐あめは、齡も千年に延ぶらんと覺えて、暑は何處に流れけん、白波のよるひるなく涼しき。

二十六日　晴れたる空早う海に入る、我より先なる人も數多ありて彼方此方に泳ぐも面白し、手取り參らせんなど人のいへるも、おぢて淺き方にのみあるを、子等の笑ひて沖にゆくが危ふけれど、よせ來る仇波をやがてふせかん日の本のつはものゝ樣みえていと勇まし、出つ入りつ終日かくてくれぬ。

二十七日　曉より雨降り出てをやまぬ空かこちしか、晝すくるよりやう〳〵晴れて夕日波の上にき

ら〳〵しうかゝやきたるいと嬉し、例の汐あみす、暗うなるまゝに波のうね〳〵見えかくれする漁火の影、時知らぬ不知火かとうたがはれいとをかし、後よりと殘り居給し母君に、昨日今日の事かひつけとく來まさん事をそゝのかしきこえやりてふしどに入る。」

地

東京神田區駿河臺袋町　平田百合子

五日　けふは暑き日なり、海原なぎ渡れり、日盛りなる頃となれば、皆々海へとて走りゆく。麥藁帽子まぶかに被り、手に手をとりかはしていざとばかりふみ入る、初めは水ひや〳〵として縮み上るやうおぼえしが、やがてなるゝ程に心地すがすがしくなりぬ。持てる板をば命の楯として、龜子のやうもがきやれど進みもやらず、また沈みぬ、終には足とみに勞れてよくも上らず。夕つかた湯に入れば、細き腕の日にあたりて櫻色に染りしが、ひり〳〵といたみぬ。海邊に立ちて蟹追ひ居れば、都より叔母樣姉樣來ませり。

六日　又南の風そよ〳〵と吹く、うちよする白波に追ひつ追はれつ、袂にはふ梅の花貝櫻がひ拾ふ、高く漁網曝したるほとり、島いくつもありて、白鷗むれたつ、呼べば答へなんばかりに江の島近く、うすく富士のしば山ぞ上にあらはれたる。今日は上手になりて、足ばた〳〵とやれど直には沈まず、かの機械もて作れるおもちやの金魚程には游ぐやうなりぬ。

七日　けふは板子持ちてもつゆ恐しと思はず、板なくて浮く時のひたに待れて。いつか夕陽きらきらと輝きそめぬ。

人

安藝國吳市二川町　和佳千鶴子

一日、つりしのぶの、葉さへゆらがぬ夏の日の暑

さ、いと堪へかぬるまゝ、音に聞く舞子海水浴にと立れぬ。陸ゆく舟のいち早く驛夫が呼ぶ聲に降りぬ、衣更ふるまも待ちあへず、浴せし後のすがすがしさよ、夕け食べて端居せし程に、新月さし出ぬれば、一度は暗うなりぬる海山のまた明らけく、かしこ淡路島と云ふに、通ふ千鳥と詠じけむ、そのかみのいと忍ばれてなむ。かくて、さよふくる程に、空いよゝすみ渡り、月影波に漂へるを見るにつけてもこの景色わが妹に見せてしがなと思へど詮なし。

二日、須磨の浦わにつゞく松原の梢にさはぐ鳥の聲に、ほの〴〵とあけゆく頃、みるめ刈る海士が汐路を浦づたひせしに、東雲の空紫立つよと見るまに旭の影、匂ひ出でたるが、淡路の山に移ろひたるに、白き舟の緑の波の上に泛びたる、いはんかたなし。終日浴しては青き松影のまさごぢに休ひなどしてたのしむ。

三日、日和よかりき事繁き身は本意なくも、あす歸るべく定りぬ。名殘と思へばいと惜まれて今日は幾度となく浴しぬ。やがて夕になりぬれば、海士がたくやの夕烟、磯うつ波になく千鳥も別を惜にや、あなあはれ。

出雲　吉田ちさ子

初の日　車に引れつゝ、やう〳〵、宿に着きぬ、愛嬌ある、下女に導れ下座敷に打通れば、こゝは海に面ひければ、一艘二艘と歸り來る、船も見ねて、いと樂し、茶など飲みつゝ、眺めけるなり、とく出給はずやと、妹にせかれ、後は母君に賴み參らせ、乳母ひきつれ立出見れば、はや浴する人々、こゝかしこより集りて、浴衣の袖かろく、海風になぶらせつゝ玉歩をうつさるゝ、姫君、さては、軍歌いさましき少年、髯むくつけき漁夫の、今日の得物を取り入るゝなど、目新しく眺め居れば、是れなんと、此貝にやと、妹の問ふに、藤壺、是はまて貝と、敎へやれば、夕日貝もひろひましたから、歸りましよふと云ふ、はや夕げの膳も運ばれて。右り樂しく終りて、日記などな書き、終れば、月は中空高く登りて、ねも云はれぬ景色なるに、あかず眺め居れば、はや、い寢れじやと、母君の聲に、驚きて、蚊帳に入りぬ、

中の日　今朝は妹のいつになく、とく、目さめしと、乳母の云ふに、我も母君とともに、浴衣きつゝ、濱邊に立出れば、沖の方に、

泳ぐあり、頭のみ出して浮ぶあり、皆男子なるらん、なぎさの方は、女子多く、白砂の上に髪とくあり、裾しぼるあり、兎角して、歸りくれは、濟子ぬし、先刻訪はれしも、留守なりし故、歸かれしとの事に、話したき事も有りしなと、口惜しきに堪へかね、使してむかへ來らせ、今宵ら、月をめでて、綏に附きぬ。

後の日　例の事終て、昨夜の月、又は今朝、浴せし時、妹の少し許り泳がれしと喜びし、時のなかしかりし事など、かたり合居りしに、郵便と云ふ、例の下女手紙もち來るに、妹のはやなれて、京ちやん有難ふと云ふ、いとなかし、開き見れば、兄上の、一年ぶりに、來給ふべし、とく歸れとの事に、うれしくもあり殘り惜しくもあり、今日は近きあたりの、名所など見てと思居りしを、濟子ぬしにも、知らせ參らせ、又こん年を、ちぎりてかへりぬ。

肥後　佐々有鄰子

明日は八月の一日なれば。夜行の滊車より。友人兩三名と長洲の海水浴にと思ひたちぬ。終夜車中にねふり。夢のまに數里をはしり。時針器の六字をさすころ。長洲々々と。車掌がよぶ聲に。友人よりそゝのかされて。まくらの夢を破り。くろまを下りぬ。驛の停車場の。茶店にやすらひ。姿をとゝのへ。ほどちかき海水浴場につきぬ。こゝは南面の旅館なれば。有明海は池水のごとく温泉嶽は島山のごとく見ゆ。浴場は濱の白砂の中にしつらひあれば。浴客西よりひがしより。馬をはせ。自轉車をきしり。小舟に棹さし。歩行するも有て。老若つどひぬ。内日刺京人も。あまさかるひな人も。おなじ白妙の衣きて。天幕のしたに。うづくまりぬ。妾は始めての浴なり。心のあかも洗ひすてゝすがすがし。

二日　朝日影うららかなり。友だちと。水浴にいでぬ。昨日よりも浴になれつれば。歌曰。「白妙の衣きよそひ游人。おきのくらげにるもにたるかな」と。潮をふきてうめきければ。京都人も。田舍人もほでうちて笑ひとよみぬ。

三日　起床して。海路七里といへる。温泉嶽にわきいづる。温泉浴にものす。こゝは海水浴よるもかはりて涼し。夕汐に舟より長洲に歸水浴す。明日は慈善會なれば夜滊車より歸る。

日向　紀藤榮子

八月一日　此頃の暑さ避けばやと、母上及び弟姉と三人、外にはした女一人をつれつゝ螢過ぐる頃、鐵道唱歌の一節口すさみつゝ新橋停車場より出で立ちぬ。空晴れ渡りたれば、暑さいよゝ堪へ難し。行く〳〵車窓に映る四方の眺め、日頃見馴れし處なれど、今日は、わきてあかぬ心地す。變り行く海山の景色など語らう中に、いつしか大磯の地に着きければ、停車場より直に車して、磯邊のとあるかり住ひに行きぬ。早たそがれぬれば海邊にも出でやらず。

二日　朝まだき、妹などゝつれ立ちて、濱邊逍遙ひて、名も知らぬ小貝數多ひろひつ、晝頃母上と共に入浴す。

三日　朝つかた、親しき、春子の君、訪づれ給ひ、種々有し其日の事など物語り聞かせ給ひて、晝前君と共にふりはへて磯邊へと出で、しはし寄せては返へし、返へしては打ち寄する波に裳裾をぬらすも知らで、濱の眞砂の數多き色々の小貝拾ふ折りしも、海水浴せんとて、つどひ來る人の多かる中に、過ぎし年數への庭にありし頃の、友垣などゝ逢ひ參らせたる、いといみじうなつかしうなん有りける。

大阪　桝田登子

朔日　黄梅逆旬の雨霽れて、炎暑瓶に蒸るゝが如き、日頃の思ひ、如何にかせまし、深山幽谷にや避けん。白砂清き海濱に、綠陰の涼味をや賞せん。何處宜けんなど、はゝ君と言ひしらふを、父君

の狹く聞せ給ひて、遠く求んには、何處にもあれど、近き須磨の關屋の、昔を偲ぶも宜からんと、やがて某の別業に物しぬ。白きまさごに、汀の松は、靑海原の翠をかされ、波の音靜に、明石の洲先、淡路島山、燈臺の火影は、淸き海面に映じ、夜網をや曳くらん、漂ふ海士の漁火、打しきる波の音も、景色有に、月の光凉うさして、夜は殊にみるめ、あはれ深うなん。

二日 海人の呼聲に、ふと驚けば、有明の月はかなうしらみて、渺茫たる靑海原は、雲井に續き、波間に輝く朝日影、見るからに心身の爽快、言ひ知らず、沖遠く網曳やすらん、喧しき物から賑はゝし。網なる章魚は、うきめを遁んとす、やがてそを得んと、めざし共のもて騷ぐ、いと面白し。からき世を、うみ渡る物から、中々に浦安げなり。午後海水に浴し汀の小貝拾ひつゝ遊ぶ、沖つ汐風凉しうていと心地よし。空晴たり。

三日 雨降る、漁りする海人もゐず、海面いと靜なり、風凉やかに吹て、波の音高し。心盡しの秋ならねど、關吹越ると言ひけん、浦濱松風の聲、いと近く聞ゐて、拝納の哀添にけり。雲のだゝずまひ、空の亂のいと覺束なうて。

東京 中林英子

一日 葉月はあつきならひと、知りながらつひにまけて、鎌倉なる伯父のもとへとて、朝まだき、新橋發滊車にて立出でつ。車中は人多くて、常にもまして苦し、やがて滊車よりおりて、しばしあゆめり。家につけば、伯父君伯母君、悦ばしげに出で迎ゐたまふ。嬉しさ限りなし。先づくさ〳〵の物語して後海水に身を摩擦して、其夜はいねつ。」二日 朝とくなき、近きわたりの海邊に行海 水を しつ、岩上に立ちて四方を見れば、空は淸鮮にして、大島は心地よきこと云はん方なし。富士山の見ゆるもうれしく、遙の彼方に影をとゞめて、行きかう眞帆白帆の、影すゞし。下りて濱邊迄歩めば、岩間には、名も知れぬ、貝の白き赤きなどありて、其樣恰も花の散り落ちたるが如し。實に海の、景色はかり、心地よきはなく命さへのひたらん樣思はるゝ、午後より鶴岡八幡宮、鎌倉宮、及び長谷の大佛等、見物して歸宅す。三日けふは、橫須賀見物にと思ひしに、あやにく雨なり。せんかたなければ、鮮魚取寄、料理などす。窓を開けば、岩上の磯馴松、雨にうたれて、いよゝ、ゆかしき樣に見ゐけり。

東京 高橋しも子

十五日 東の空白み渡り、玻璃の戶通す、明方の色に、夢破れぬ、朝まだき、人なき間にとて、海邊ちかく下り立ち、細波に足洗はせつ、海原の空につらなれる邊薄紅の、彩雲橫に棚引きて、海面たちこめし、霧やう〳〵、うすれゆくまゝに、沖津島山影見ゐて、現れ出づる眞帆片帆、今日の獲物や多からん、船漕ぐ音のいといさましゝ、日の光照りそうまゝに、人々群れ來つれば、歸さたどりぬ。

十六日 夜もすがら。風いと荒れて、波枕の上に、立ちさわぎ、とく目醒む。海面には、釣舟も見ゐず、世に海邊の雨の日程つれ〳〵なるはあらじ。見るものもなく、たゞ波の音のおどろ〳〵聞ゆるのみ。うれしくも、午過ぐるころより、日の光、雲間を洩れ來て、夕つかたには、いとよく晴れ渡り、西の端ちかく、茜さす夕映の色。いとうるはし。昨宵は。夕月望の夜なりしも、あやにくに、曇りし空の、うたてかりければ、十六夜の日に心を晴さばやとて、磯へと志しぬ。夜の暮やう〳〵廣くなり行くほどに、光淡かりし月影澄み渡り、花とみだれて。雲とちる波間に黃金の、花を添へ。隅なき月の光浴びつゝ。矢を射る如く。行く舟の。さゝやく。波の間に〳〵、聞ゆる船の音等此の世のものとも覺ゐず、

折しも、何處ともなく、「四百餘州」と聲いさましく、ひゞき來りぬ。あはれ此の地に、縁も深き、此の歌よ、心ありてや、歌ふらん、其かみ由井が濱邊の藻鹽たく浦の煙と、消え果てし唐人の、魂もしあらば、如何に聞くらん。實に勇ましくも、潔き日本男子の、振舞よな、と心も空に佇めば、磯馴の松の琴の調の、絶え絶えにまた聞ゆる、一節は「玄海灘月淸し」餘韵、はるかに、ひゞき渡りて、得も云へぬ思なり、夜や更けぬらん、月は中空高く照そひて、遠近に、とぶ螢とも、あやしまれし、海人が家の燈とも、草の葉末に、かくれしが、殘るは、あはれ二つ三つ。

十七日　時告ぐる雞の、聲諸共に、起き出でぬ、涼しき間にとて、文綴り居しも、暑さいとはげしう、堪えがたかりければ、しばしとて、後の山へ赴きぬ、木立いと深う、日の光もらさぬまでに、茂りあへる下に、息ひ眺むるに、さしもに荒き鎌倉の海も、御空の神の炎の滅にやおじけゝむ、たゞ靜まりかへりて、人影だになく、いと物すごうこそ覺ほゆれ、かゝる中にも、ひとり潔よきは、稻村が崎の、みどりの、裳裾ひろがへし、淡く粧ひし富士振よ、三伏の夏も、しらぬ顏なる神々しさ、いひしらぬ思にうたれ、暑もとみに消失せつ、常には喧しき蟬の聲もいとすが〳〵しう、時たつも知でありつるに空かきくもり、富士の根も、雲のとぼそに、身をかくし、はるかに鳴神の音さへ、聞ゆるに、あかぬ眺に心をのこし、家に入る程もなく、篠つく夕立おそひ來ぬ、あな恐しのさないゝ

東京　柏村まさ子

今年も亦磯濱に遊びぬ、あけくれ友となりたる波のこゑ、山のすがたよ、いとめでたくて、忘られず。

一日　朝とく起出でゝ、渚に出れば、浪高くよせて、勇ましさ、やる方なし。うら〳〵と昇る、朝日の影、えもいはれぬ、心地こそすれ。こゝは人氣うすき所にしあれば、心細き迄なり、海士の子は、己がまゝに、波と戯ひ、はた波に、おそはれなどして遊ぶ。世に物思ひなきは、斯る境界にやあらむ。邪なく、慾なき樣のいとをかしくて。

二日　沖の片帆に殘りたる、夕日の影のいつか、くれゆきて、松のひまよりみゆる、月かげいと心にくゝ、ハンモツクかげてみんには、如何に〳〵。波の所々、銀をちらして、たゞ白き所に、螢火の、赤く、凡て思ひすてがたき夜半を、同じ心か、松原がくれ、詩吟のこゑも、いとほがらかなり。

三日　今日は、釣せんとて波間に小船浮べて行ほどに、なれぬ妹は、打返す波、はた、網引する蜑が呼び聲に驚きて、むなしう、立ちかへりたる、いとにくかりき。しばし淸き氣吸ふとて、かたへの小岩に腰うちかけ、かの君ならねど、はる〳〵都。こひしう、思はるゝ時、あな、をかしや、小松の下に、臥したる牛の、何に驚かされてか。

岩代　川島いな子

七八月は暑の、盛りにて此頃はもつとも海水浴に宜しき時節にてなんと。思ひ居りしに、丁度小川おすみ樣朝より遊び來給ひて。此頃の内に海水浴には如何にやと、とはれければ、喜び勇みて、兄妹にも相談せしに、兄は喜び妹は勇み立ちぬ。さらばとて、七月九日の日に出で立たゝんと。約せしかば、さて、今宵の空模樣は如何にやと空打見れば月はくまなく晴れ渡りき。一と寢入りてとく起出で朝飯を了りて出立つ、日輪の中天に輝く頃は、土焼け瓦燃ゆるばかりにて皆々の足もおそうなりけり、斯くてやうやう須磨に着きて旅館に入る。

十日　には朝早くより海水浴場に行く、波強からず弱からずして甚だよし。濱べに上りて、貝などを拾ひて居りしに、遙かの向ふより漁船は烟を放ちて、往きかふを、見居りしに、もはや日暮れに

けれ早々旅宿にかへる、こよひは樂しく皆々とけふの事などを話しつゝ居りしに、妹のせつ子は今日のつかれに、話の中にねむりしすがたいとかはゆくも又をかし明くれば十一日とはなりぬけふは、我が古里にあるべき日なれば須磨の濱の名殘りにと兄妹打ち連れ風涼しき海邊に遊びぬましてや親しき、おすみ樣と引合ひて唱歌をうたひしこと如何に愉快なりしよ。

長野　松澤まつ子

八月一日　あかつき告ぐる雞の聲に、起きいでゝ支度とゝのへ、伯父君に伴はれ弟と、從妹さと子と共に、「ステイション」へといそぎ、一番汽車へと打のる、有明の月、かすかに殘りつ、青き山、白き川などほんのりと見え初めたる、まづ行く先のすゞしさ思ひやられつ、とかくする程に、汽車は、志す處に、とゞまりしかば、其れより、車をやとひて、午後一時、海にのぞめる某となんよべるに着きぬ。見渡せば、與謝の海原はてしもなく、よせては返す、白波は、床を洗ふてすゞしさいふばかりなし。さて打つれだちて、海水にと入り、身も心も清め終へつ。おばしま近く打集ふ程に、海面波を燬くかとばかり紅さしたるに、おどろき、簀の子にいでゝ見れば、夕日の光さしたるにて、その中を、白帆あけたる舟の三ツ四ツ、歸路いそぐ樣、げに、例へつべきものもなし。

二日　つとめておき出でゝ袖ひるがへして、海邊にといでたつに、未だ明けやらねば、霧深うたちこめて、浦々の景色おぼろなるぞ中々におかし。さて、海水浴終へて、いそ邊に遊ぶに、弟の海の歌うたひつゝたくましきはぎどもあらはに、彼方此方とはせまはるを見て何となう頼母しくて「あはれ世の玉も金ものかは」、とこそ思へりしか。午後さと子の君と海水浴せんとていでたつに、美しき小貝足もとにありければ、いと嬉しくて、かたみに、拾ひとりつ、さはれ、腰折一ツいでざりしぞ、なか〳〵に貝のおもはん事もはづかし今よひ、さやけき月影に、海面くもりなく見え渡りたるに、いとゞ、古里の、池水に見まがへられて、やるせなく其方の空なつかし。

三日　いとよう晴れたれば、富士の嶺みんとて、いそ邊傳ひにゆき、やゝ小高き丘にのぼりて、右手の方、はるかに望めば芙蓉の姿のそびえたる。あまりにめで度き景色なればと伯父君寫しとり給ひぬ。それより海水浴をへて白き「リボン」風にふかせて何くれと物語りしつ、そゞろありきするに心ゆく事限りなし。夜伯父君に從ひ參らせ月にあくがれ海邊に下りたち巖をかむ波のしぶきをあびつ、たゝずめば、物思ふ事もなくて清き理想を歌ひつゝ、いつしか夜や更けぬらん、ともやの燈、消え失せて、月影やう〳〵をぐらくなり行くにおどろきて、歩を返しぬ。後には、松の聲、波のつゝみに通はすが如く、水鳥の友呼びかはすこゑいとあはれにきこゆ。

伊豫　並木みさを子

あな暑やと日々煩ひてのみ、暮せしが、ふと思ひ立ちて、八月一日程遠からぬ濱邊にものしぬ、海上遠く見渡せば、雪と碎け玉とちる浪は、興いと深く、白帆の行き交ふ樣は、鷗の遊ぶにも似通ひていと面白し、況して涼しき汐風は絶えず我袂をひるがへす心地よさに、おのづから、心浮き立ちて、衣を脱ぐや否浴すれば、げに夏さへも流したらん如く感じぬ、やがて岸に出でゝ暫し息ひ、又海水に身を入れつ、幾度か斯くする心地よさ、そも何にかはたとへん、二日いとよく空晴れたり、幸ひ日曜日なれば、幼き弟を伴ひて來りぬ、さて昨日の如く浴しならが遊びぬ、あないつの間に習ひたりけん、弟は是れ見よがしに泳ぐ樣いとをかし、折しも空俄に曇りて、鳴神の音すさましう降り來りし夕立に、濡るゝは

中々心地よけれども、寒さを覺ゆる迄に、風吹渡れば、急ぎ家路をさして走りぬ。

三日　友なる玉子の君を誘ひ來りて、例の如く海水を浴びながら、小さき魚等を追ひめぐる、中々に興深きわざなりや、あはれ氣も心もさやかに成りもて行き、身は殊更に海水浴の効めを覺ゆて嬉しとも嬉しうなん、僅に三日の間なれども、汐風にあたりし我顔は色黒く成り果てしとて、歸りしのち、母君姉上の、笑ひ給ひぬ。

筑前　三木ふさ子

母上の海水浴とて行き玉ふに我もともなはれて海より深き山より高き親のめぐみのあさからぬ大海原の天舟、夕べの風にさそはれてなぎさにつどふ少女子ら、空ゆく鳥もねぐらに歸る有明月東雲のからすと共に、あまの子がすなどるこゑと共に妻戸あくれば朝風心ちよくふき渡りける、おりしも郵便の聲きこゆ。我が愛せる友より寄せ玉へるにてひらき見れば其友の明日姉上と共に一番汽車にてきたまへる三日間の内今日ほどうれしき日はなし文くりかへしくりかへし空うちながめ、氣笛の音をまちうけぬる。

◎夏季料理

ギセイ豆腐　豆腐を布巾に明けて水氣を取り夫より鍋に入れてザット沸立ちたる後又候前の布巾に明けて湯氣を絞り更に別鍋に移して煮出し醤油砂糖をよく混じ豆腐を攪交ぜながら汁を煮詰め鍋をおろして冷めたる時を見計らひ其中へ雞卵を割りて攪交ぜ之を胡麻の油を敷きたる玉子燒鍋に入れ緩火にて燒くなり

八月以後　女鑑兼題豫告

歌　文

八月十五日　朝顔　歸省

九月一日　初秋虫　思ひを記して女鑑に贈る

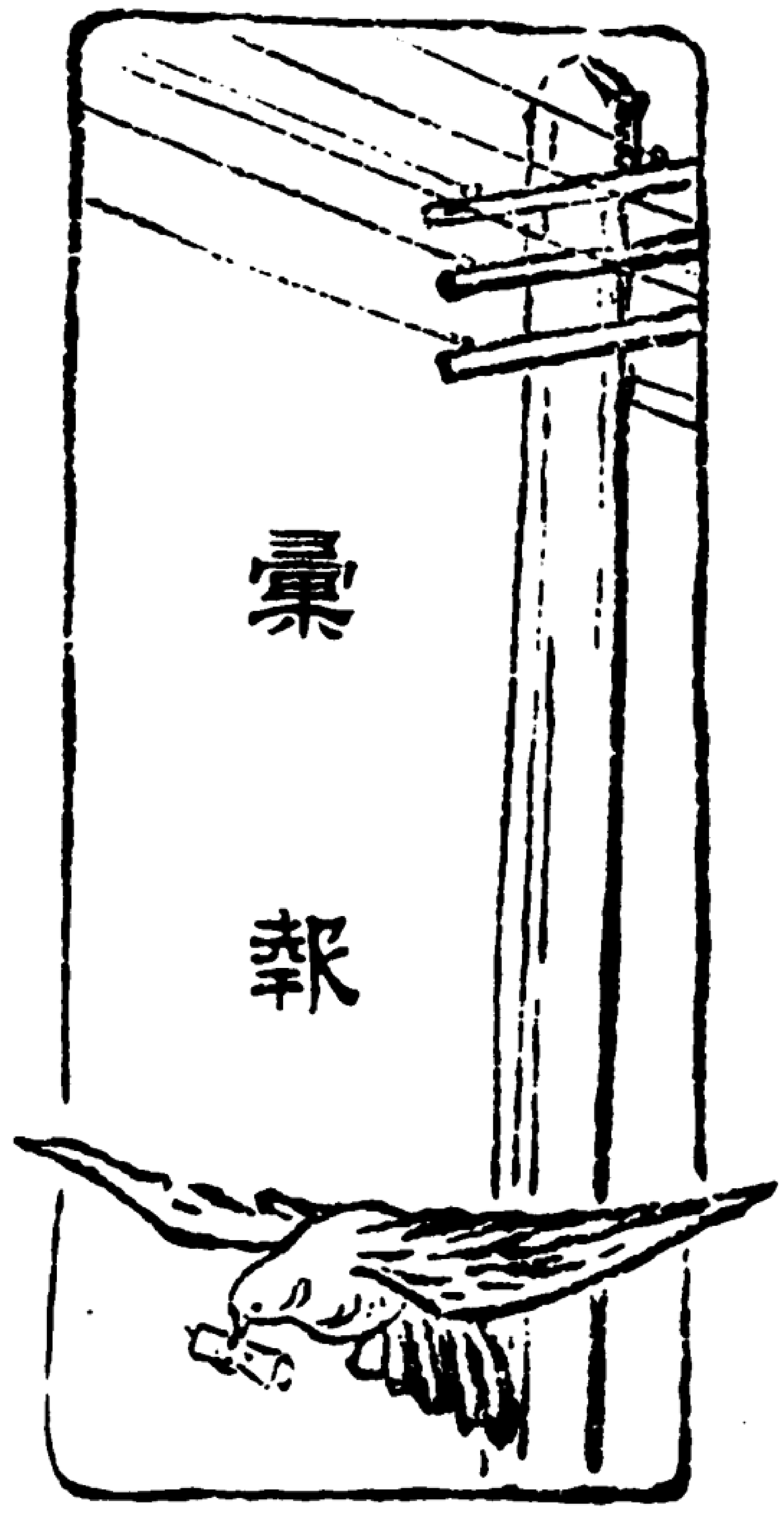
九月十五日　殘暑　山家に月を觀て記す

注意

一　歌は題毎に用紙を別にし一題に付一人一首若くは二首を限りとす上句に一音の漢字一字入れ其他は悉く平假名又は一音の漢字にて認むべし書式に違ふものは決して採らず

一　文は毎行十五字詰三十行以内を限りとす必ず楷書を用ゐ字體は鮮明ならむことを要す

一　其他從前の投稿心得を熟讀詳知せらるべし



○華族女學校行啓

皇后陛下には同校生徒卒業證書授與式臨御の爲去月十六日午前九時三十分御出門、柳原典侍御陪乘、香川皇后太夫、山内皇后宮亮、岡侍醫局長、小池掌侍、藪權掌侍、大東權命夫供奉し參らせ御順路を經て同校に行啓あらせられたり之より先き同校にては細川校長、下田學監、淺岡幹事以下職員幷に生徒一同は午前八時頃より續々參校し田中宮内大臣夫人、徳川家達公、島津忠濟公、三條公美公、同夫人、鍋島候、同夫人、土方伯、佐々木伯、井上子爵(勝)、渡邊内藏頭、長崎調度局長、同夫人小笠原主殿頭、勝間田圖書頭、神田學習院教頭、三宅醫學博士幷びに先着の萬里小路式部官其他貴婦人數十名は前後して參集同九時四十分頃より玄關横に出で御着を御待ち申上げしに　皇后陛下には奏樂の間に九時五十五分を以て御着あり直に細川校長の御先導にて樓上の御座に臨御あらせられ同校職員高等官に拜謁仰付られ校長より第十八學年生徒成績表を奉献し次で校長及び下田學監の御先導にて卒業生徒の圖畫、習字、裁縫、挿花等を御覽の後(此間に生徒參觀人來賓式場に着席)式場なる講堂に臨御あらせらる此時生徒一同は　皇后陛下御製の唱歌「金剛石」「水は器」を唱へ畢つて校長より全科卒業生徒別科卒業生に順次證書を小學全科初等中學、高等中學各級卒業生總代に證書

を授與し次に北白川宮武子女王殿下に初等中學第二級御卒業證書を奉呈し畢つて校長は卒業生に向つて左の告辭を朗讀せられたり

諸子が今日卒業證書を獲得せるは多年勉勵の報酬にして當然のことなれども諸氏が疾病其他の事故に妨げられずして力を學事に專にすることを得たりしは諸氏の幸福にして余輩の欣喜する所なり

諸氏の學業は本校職員の保證する所にして今より後遭遇すべき尋常の事務を辨ずるに十分なるべきことを信ず然れども人に接し世に處するに當りては平生學びたる所の不足を感ずることあるべし此の如きことは變化窮りなきものにして學校教育の力の及ぶ所に非ず此れ即ち實地の學問なり此れ即ち人生の經驗を貴ぶ所以なり諸氏旃れを勉めよ

右畢つて全科卒業生總代伊東千代子の答辭あり次に生徒一同は唱歌「秋の宮居」を唱へ畢るや　皇后陛下には細川校長、香川太夫の御先導にて便殿に入御あらせられしは十一時十五分にして暫時御休憩の後着御の時と同じく前記諸員の奉送を受けさせられつゝ還御遊ばされたり此日亦例の如く同校職員幷に生徒一同へ御土産として御下賜品ありし由にて卒業生は左の四十七名なりといふ

全科卒業生姓名（イロハ順）　岩原慶　岩崎奈美子　伊東千代子
市來　子　池田鐵子　池田吟　石川その・庭田鈴子　西邑伸子
新山婦美子　堀江登志　豊住しほ　土岐靜子　千頭たか　太田
蕣々　小川しげ　長田絹子　渡邊鶴子　川田鈴子　吉川聖　吉
田浦子　高木寛子　津田富子　中田登美　中野文　上野笑　桑
原きみこ　山脇鏗　山本きよ子　安井紫江　松平經子　久我靜
子　小坂はる　阿部織羽　佐々木康　坂田清　四條孝子　首藤
さわ　平山清　本尾芳子　守屋きく　毛利花子　毛利すみ　鈴
木操
別科卒業生　大山久子　立見もと　島田榛子

○獨逸皇族日本を懷ふ　去月十七日加奈太へ御到着相成りたる獨逸皇族ルプレヒト殿下並に妃殿下は同地より在本邦同國公使へ電報を以て然るべき方法に依り御滯在中に於る本邦官民鄭重の歎待に向て熱心なる感謝の意を表すべき旨御下命あり

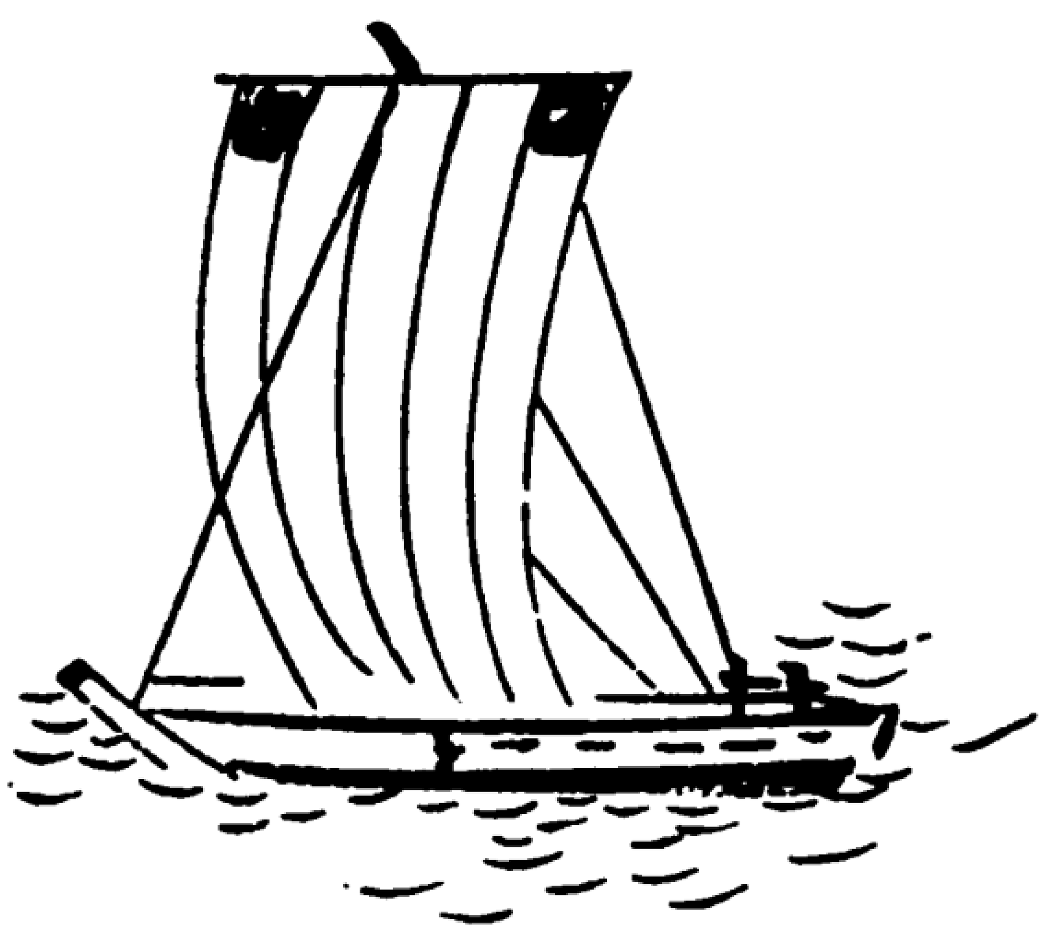
尙妃殿下には優美高尙なる我國婦人の風俗今尙は眼に映じて消ゆることなきを以て御携帶相成りたる和洋折衷の婦人裝飾品指環袋物類六十餘點は殊の外御意に叶ひ同一のもの各五種宛を玉寶堂に命じて本國へ回送せしめ置くべき旨御依囑相成りし由

◎興風會の善行表彰(つゞき)　大阪市東區北久太郞町二丁目三河彥治(五十三年)は三州渥美郡牟呂村に生れ資性溫厚にして義俠に富み意を公共の事に注ぎ勤儉にして且至孝家に相當の資產を有し始終眞心を盡して父母の意を安じ居たるが田舍にては思ふほどの事爲し難きを知り二十七の年初めて大阪に出で實業に從ひ爾來四時必ず家に還り老親の安否を問ひ專心公私の事に務めたる行爲は皆人の嘆賞する所となり故鄕に於て子弟敎訓の龜鑑とせられしことあり殊に公共心に富める忠愛義俠の至情赤十字社事業に盡瘁せし功果の如き其一斑を見るを得べく常に事業の良否を選擇し進んで其發達を補助する等枚擧に遑あらず眞に得易からざる人なればとて興風會は白絹一卷を贈り其善行を表彰したり

◎大阪市南區田島町谷口とみ(三十七年)は貧家に生れ常に父母勞苦の有樣を見て幼心に家計の豊かならざるを知りけなげにも一つの職業を習ひ家計を助け終身父母の左右に侍し孝養を盡さんと心を決し袋物職工となり寒暑風雨の厭ひなく夜を日に繼いで職業に勵み一絲半錢だも漫りに費すことなく節約を守り母の精神病に罹りたるより夜もすがら眠りに就かず職業を勵みしが父が去年の夏七十六歲を一期として歸らぬ旅路に赴きて後は七十二歲の老母に孝養を怠らず僅かに生計を維持し今に夫を迎へず身を愼み只管職業に勵みて老母の心を慰むる

をこよなき樂みとせり其勤儉至孝なるは世の龜鑑とするに足れば興風會よりは金一封を贈り其善行を表彰せり

◎南品惠美須町二丁目廣瀨辰次郎(二十五年)は十歳の時家運傾きて父母困苦の狀を見て家運回復の志を立て中途學を退き當時父の辛うじて營める湯屋業に從ひ日夜勞働殆ど寢食を忘るゝに至り誠實にして禮儀を重んじ自ら客の意を滿たさんことを勤め母重患の際には自ら醫師の許に通ひ投藥を受け或は神佛に跣參りを爲し快復を祈ること數年一日も怠らず傍ら營業に勵む等他の企て及ばざる所にて至孝勤勉の功空しからず母の病癒ゆる頃家計も亦稍挽回したり獨立自活の躬行賞するに餘りあれば興風會は白絹一卷を贈りて其善行を表彰せり(をはり)



◎隱れたる敎育家　此に隱れたる敎育家として奇特の老媼こそあれ其の名は中村お春(六十六)とて幕臣中村冬太郎なる人の妻なりしが明治六年夫に死別れし後は芝櫻田久保町四番地に寡居して偶々再嫁を勸むる者あるも之に應せず只管婦人の貞操を守り賃仕事をもて其日の活計を立つる暇同女は幼年其父より漢學を授けられて一通りの經書は學びたれば其界隈の貧民の子弟が學資なくして就學し得ざるを憐み去廿六年六月以來近傍の貧子弟を集めて每日午前七時より午後二時迄無報酬にて習字作文等を授け目下現に六歳以上十二歳未滿の男女二十人を集めて親切に敎導し居るとぞ左れば其筋にてもお春が篤行を嘉し近々行賞の沙汰あるべしとなり感ずべき老媼にこそ

○感心なる寡婦　鹿島縣出水郡下出水村字脇本濱に移住する清川ミツ(三十二)は熊本縣川尻のものにて七八年前夫に從ひて下出水村に來たり共に日雇稼を業となし可なりに生活し居りしが其の杖とも柱とも頼みし夫の某は未だ二年を經たざるに不歸旅に門出したり其以後は家計向き困難となりて常に不如意勝なりしされどおミツは能く節を守り義を盡して少しも不義の道にふみ迷ひしことなく只管織物製糸等の日雇に身を委ね辛くも女一手にてカメ(十二)清二(九ツ)の二子と外に今年七十三なる老母とを養ひつゝあり殊に老母に對してのいたはりかたは至れり盡せりにて常人の企て及ぶ處にあらず貧しき中にも亦た子女の教育の大切なるを知りて今は二子共學校に通はせつゝあるが目下カメは尋常三學年、清二は二學年となり何れも學力品行他兒に優れ級中の最上たれば級長の任さへ負ひ毎年優等賞を受けて學校あたりの褒めものと成り居れり實に此の母にして此の兒あり感ず可き寡婦と云ふ可し

○千島同情婦人會小集會　同會發企人谷夫人、寺垣海軍大佐夫人其他は十四日午後三時より赤阪靈南阪齋藤海軍總務長官邸に小集會を催し過日千島より歸京したる報効義會員吉田正平氏を聘して報効義會員の現況を聞きたりと

○乳房六個を有する婦人　横濱市北方町四百八十番地士族二本柳ちか(三十一)は尋常乳房二個の外更に副乳四個を有し居り是迄三人の兒を擧げしも此事を秘し居りしに今より二十日前帝國大學婦人科へ入院し男子を分娩したるより醫師に發見せられたるものにて現に此六個の乳房よりは乳汁を汾泌し居る由にて同院に於ては之れを寫眞に取り參考の材料とし居れり一般醫學社會に於ても生理的研究

○子供と音樂　モンローと稱する學者が近頃子供の音樂に對する關係及び其男女の差別について研究したる所によれば、音を學び得る力は三歳にしては最も弱く六歳に至つて十分に強くなる由なり、總計百六十一人について研究の結果を見れば未だ三歳の頃は男子は廿九パーセント女子は四十七パーセントのみなるが又六歳に至れば男子は四十パーセント女子の七十一パーセントは種々の音階を歌ひ得る樣に學び得、又概して云へば男兒よりも女兒の方が此點について大に勝れる所あるを知れり、又同氏は子供が音樂に對する嗜好に就いて觀察せしに少しく意外なる事あり、三歳の男女に就て見れば之を好むものは男の方は三十三パーセント女の方には五十三パーセントあり、四歳になれば男兒は三十一パーセント女兒は六十パーセントになり、又五歳になれば男兒は二十三パーセント女兒は六十五パーセントになり更に又六歳になれば男兒は二十パーセントに降り女兒又五十七パーセントに降る、是に依つて觀れば男兒は三歳より六歳に達するに漸々音樂に對する嗜好の度を弱くし、女兒にありては少しく之と異る所あり、然れども未だ此研究は日本の兒童の上にも同一なるものと信じ得べからず



○ふき出し香水の名譽　日本橋區本町四丁目田邊元三郎直輸入のふき出し香水は有名なる佛國ロード會社の製品にて壜の上部の捻を開けば自然に吹き出す仕掛にて携帶にも便利なるより西洋各國の紳士貴婦人間にもてはやさるゝ由なるが今回の博覽會には宮内省より御買上の榮譽を蒙り時節柄非常なる賣行なりと

○和洋服裁斷術夏期講習會　神田區北神保町三番地和洋裁縫專修女學校に於ては來八月三日より夏季講習會を開き和洋服の裁斷及び割出し方を學理的に敎授し實地練習希望の者には午後に於て敎授し且つ石井氏の和洋割烹の敎授あり科外講演として左の諸氏出演す

日本婦人の服裝　日本女子大學校講師　戸川殘花君
講題未定　日本女子大學監　麻生正藏君
歐洲繪畫一轉の機　明治女學校講師　青柳有美君
家政學及兒童心理　佐口みつ子君
女子の敎育學　哲學博士　藏原惟郭君

新刊書目

愛國婦人	第卅三卅四號	東京麹町區下二番町	大日本女學會
福井商工新報	第卅九號	越前國福井市	福井商工新報社
理學界	第一卷第一號	東京神田區裏神保町	理學界發行所
少女界	第七號	東京日本橋區本町三丁目	金港堂
少年界	第八號	同	同
偕行社記事	第三一八號	同麹町區飯田町二	偕行社
工談雜誌	第一六〇號	同京橋區新榮町三	工談會
成功	第二卷第四號	同本郷區千駄木町	成功雜誌社
忠愛	第三號	同麻布區宮村町	忠愛新聞社
兒童研究	第六卷第六號	同神田區裏神保町	富山房
The New voice.		no 25.	Chicago.
女學雜誌	第五一七號	府下北豊島郡巣鴨村	女學雜誌社
國學院雜誌	第九卷第七號	東京麹町區飯田町	國學院
世路鏡	第二卷第六號	同芝區愛宕下町	同明館
佛敎文藝	第一卷第七號	同淺草區新谷町	佛敎社
裏錦	第一二九號	東京神田區駿河臺北甲賀町	尚絅社
峡州	第二六號	甲府市紅梅町	峡州社
女子新聞	第卅四號	東京京橋區南傳馬町	女子新聞社
新聲	第十編第一號	東京神田錦町二ノ六	新聲社
なんな	第三卷第七號	東京麹町區下二番町三七	大日本女學會
圖書月報	第一卷第拾一號	東京日本橋區杙木町二一六	東京書籍商組合事務所
六合雜誌	第二百七十一號	東京芝區三田四國町二番地六號	日本ゆにてりあん弘道會
商家の友	第十六號	東京京橋區南鍋町	時事新報社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

國光社出版圖書割引券

切取箋

注文書名	合計	此代	外に遞送料	申込者住所氏名
	冊			

▲圖書雜誌御注文に關する注意▼

◎割引券を以て御注文の分（教科書雜誌を除く）に限り定價の**一割半引**を以て**無遞送料**にて御送本可仕候

但し前金御送附にあらざれば送本不仕候

◎市内の御申込は現品引換に代金御支拂相成候とも苦しからず候

◎郵券代用を以て御送金下され候節は必ず一割増御送附相成度候

◎御注文の御書信は書名編次冊數及び住所姓名等文字明瞭に御記載相成度候

◎御照會は返信用郵券添付又は往復端書に相願度候未納税不足税の信書は一切請取不申候

◎代金は總て國光社出版部宛御送付被下度候

東京京橋區築地二丁目　株式會社　**國光社**

（電話特新橋八八番 新橋二六九三番）

電信略號九二

株式會社國光社發賣書目

宮内默藏著
●王學指掌
菊版クロース美本 定價一圓 郵税十錢

栗田文學博士著
●天朝正學
菊判洋裝 定價卅九錢 郵税四錢

吉丸一昌編纂
●名家修養談叢
菊判洋裝美本 定價三十六錢 郵税八錢

高瀨眞卿著
●學校家庭修身一夕話
菊判總クロース美本 上製金八十錢 郵税八錢
菊判洋裝美本 並製三十八錢 郵税六錢

國光社編纂
●日本教育
定價廿四錢 郵税一錢

三輪田眞佐子著
●女子の本分（十四版）
菊判洋裝大和綴 定價金二十五錢 郵税金六錢

堀内新泉著
●家庭の鑑
菊判洋裝美本 定價金十八錢 郵税四錢

三輪田眞佐子著
●女子處世論（八版）
菊判洋裝大和綴 定價二十錢 郵税金四錢

杉谷正隆編纂
●修身百首
菊判洋裝 定價二十錢 郵税四錢

内務大臣官房編纂
●明治國民龜鑑
菊判洋裝大和綴美本 定價二圓 郵税十五錢

清藤正輔編
●皇后陛下御略記 坤德
菊判大和綴 定價二十五錢 郵税四錢 特製三十五錢 郵税四錢

國光社編纂
●明如上人遺芳錄
菊判洋裝 定價二十錢 郵税四錢

矢田七太郎著
●幕末之偉人江川坦庵
四六判大和綴美本 定價金三十錢 郵税四錢

水主天姥著
●千古冤魂石田三成
四六判洋裝美本 定價金三十錢 郵税四錢

安田巖城著
●西鄉從道
菊判洋裝美本 定價廿五錢 郵税四錢

大町文學士著
●山中鹿之助
菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

三好文學士著
●上杉謙信
菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

大町文學士著
●常磐御前
菊判三切袖珍 定價十三錢 郵税二錢

清藤正輔著
●聖德太子傳
四六判洋裝 定價二十錢 郵税錢

國光社編纂
●新編ひめかゞみ
菊判洋裝美本 定價二十五錢 郵税四錢

明治三十六年八月一日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第拾五號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可